
TEN-ROBO.-天才少女とロボット執事-

ツキミキワミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TEN - ROBO - 天才少女とロボット執事 -

【NZコード】

N2741X

【作者名】

ツキミキワミ

【あらすじ】

世紀の天才少女、雪洞・F・ケイマは精神を肉体から離脱させる新システム『篝 KAGARI』を発明した。彼女の執事を務めるのは、開発をタブーとされていた人型ロボットのフランシス・ド・フィニステール。謎に包まれた少女の過去、そして青年と引き換えに破られた禁忌の意味とは 近未来を舞台に繰り広げられる 異世界×SF×恋愛×知能バトルストーリー エブリ エブリ スタで同時連載中

Prologue

春はあけぼの

やつやつと山へなりゆく山ぎは 少し明りて紫だちたる雲の細くたな
びきたる

夏は、夜

月の頃はせりなり 間もなほ 蟻の多く飛び違ひたる

秋は 夕暮

冬は つとめて

ずっと昔の凄い人

あなたはどんな気持ちでこれを書いたのですか

その時誰を想つていましたか

あの日貴方が消えた時から

私の心に夜明けは無く

四季も無いのです

あれからどれだけの夜が過ぎたのでしょうか

泣いて泣いて泣き疲れて

私は眠れなくなりました

今はただただずっと遠くの方で

篝火が灯っています

暗闇の中

遠くに

手の届かない

遠くに

いつの日か風の便りで

私の事情を知つて

慰めに来なくとも良い

少し同情してくれたら　いいと思ひます

相変わらず私は

貴方を探して

此処にいるのだから

* * * * *

「交渉は決裂ね。

今日はこれにて失礼」

街の中心部にそびえる200階建ての最高裁判所
その一室に集まつた群衆が、弱冠18歳である少女の突飛な行動に
度肝を抜かれた。

黒皮のコートに不釣り合ひな桜色の長い髪をかき上げ、少女はおもむろに席を立つ。

ガタン、と真っ赤な椅子が音を立てたのを合図に
後ろに控えていた少年が慌ててドアを開けた。

「ケイマー・雪洞・F・ケイマー・逃げるおつもりですか！」

どよめきと共に金切り声があがる。

重く大きなドアを支えるフットマンの少年が、怯えたように主人の少女、改め雪洞の顔を見た。

原告席に居た中年男性が、ひび割れた声で怒鳴った。

「あなたの作った機械、かがり籠のせいで、

うちの息子がおかしくなつてしまつたんだぞー。」

雪洞は少しだけ首をすらして横を見遣る。

男の指差す先では、ほろほろと涙を流す女性に肩を抱かれた少年が呆けたように口をぽかんと開けて天井を見つめていた。

そうだそうだ！

さつさと慰謝料を支払え！

観客、ではなく傍聴者からも痛烈なヤジが飛ぶ。

古代ギリシャの円形闘技場のよつた裁判室を、
雪洞はぐるりと見渡した。

そしてくすりと笑って後ろを振り返ると

宣戦布告する武将の「とく高らかに腕をあげて言い放った。

「なんとも言つたら死つわ。あんたたちの魂胆は分かつてゐるよ」

おいおいおい！

少年が顔を青ざめる。

幸いその声は更に高まる群衆の声にかき消された。

「いいや、行くよ！」
「は、はい！」

もはや半べそ半笑いと言ひた顔の少年を一喝すると、
雪洞はざわざわと何かを言ひ合ひ傍聴席の前を堂々と歩いて出口に向かった。

法廷から予定時間外の退場を試みる人間に反応し、出入り口に立つ
警備口ボットがガシャリと槍を交差させる。

しかし雪洞の顔を識別すると、ペラペラとこの面と共に機械的な礼をして

『ドウジ』

と道を開けた。

「わかつてゐじやない」

ふふん、と笑つて髪をぱたりと後ろにやると
凱旋門を抜けて帰国するナポレオンをながら颯爽と金縁のドアを通り抜けた。

「お静かに！」被告は速やかに席に御戻り下せ」という裁判長の言葉を待たずして
ばたん、と扉が閉まる。

「お、表は報道陣が居るかもしれないから、裏から出よう」

震える手でボタンを押す少年に促されるままエレベーターに乗り込むと
雪洞はよつやくけたたましく喧騒から遮断された。

チーン

とこう古典的な音がして、
数十メートルほど落下したエレベーターのドアが開いた。

開く扉と同時に雪洞はゆっくりと田を開ける。

田の前に飛び込んでくるのは、美しく広がる25世紀の街並み。全て白で統一された建物の間を

車輪の無いカラフルな車がヒュンヒュンと飛びまわっている。

街の向こうには真っ青な海があり

その向こうには赤く色づき始めた木々が混ざる森が見える。

体を満たしていく空気も、先ほどと一転して
実に爽やかで柔らかい。

「 何にも無かつたかのようだ、相変わらずそこそこいるのね」

街に向かつてぼそりと呟くと、
雪洞は建物の裏口から地上に続く長い階段に敷かれた
赤い絨毯にヒールを落とした。

約5時間ぶりの外だつた。

ああ、やっぱり太陽は良い。空は良い。

偽物より本物はずっと良い。

雪洞は両手をあげて思い切り伸びをすると、大きく息を吸つた。
ぱきぱきっと凝り固まった身体が軋む音がする。

胸一杯に膨らんだ空氣を一度止め、少しずつ吐き出しながら

「ああー疲れた。やんなつかうわ、わいわい。しゃーじきしどー。

」

と呟いた。

フジタマンの少年（Nicoolas）が「雪洞様おっさんみ

たい」と笑つ。

仰々しくほゞに磨きあげられた建物を背景に

明らかに不釣り合いな少年と少女が並んで歩いている。

「でもとつあえず、これで一通りの裁判は終わったんだ？」

「終わらせたのよ」

雪洞は銀色の手すりに映る強ばつた自分の顔を見る。

「まあ、ちゅうと強引だつたけどね」

同年代は恋に御洒落し、と花盛りを楽しんだらう年齢なのだが
自分の顔は会社の経営と謂れのない顧客の苦情に追われる一経営者
の苦渋に満ちた
なんとも色氣も味氣も無いものだった。

人より幼く見られがちの童顔が、せりひびくべく見える。

雪洞はふうっと重いため息をついた。

「雪洞様、すげえかっこよかつたぜ！」

一足で雪洞の数段先まで降りると、二コラが振りを輝かせて言った。

「集まつたオヤジ達の青い顔。ふふつ俺、笑いじらえるの必死だつた」

「泣きそつた顔してたのは誰よ、二コ」

雪洞が片方の眉をあげて意地悪そつ二コラの顔を覗き込むと、二コラはバツが悪そうに顔を赤らめ

「あ、あれはあぐびが出たんだ」と田をそらして弁明した。

そんな二コラを見ていたら、久方に顔の筋肉が緩まった。

「ふふ、まあそつこいつにしておこしてあげるわ。…ありがと、二コ」

雪洞に微笑みかけられ、少々照れたように二コラが頬をかく。
そして「まかすよつに言葉を続けた。

「あー、でも、ダイタイセイの無い精神的平穏の損害のメンセキと
バイショウを求める訴訟だから
会社のコンカンに関わる…コトは大変なんじょ？」

「二コ、誰から聞いたのそんな難しい言葉

明らかに意味を分かつていないのでしょつお前は、と苦笑しながら
また二コラに適当なことを吹き込んだ
張本人の顔を思い浮かべる。

聞かなくてもわかるでしょう？

と言つた顔でニコラが首をかしげて雪洞を見た。

案の定だ。

ふんふん、と興味深々に頷くニコラと
可愛がるようないたぶるような、相反して至極ひどいもよきもなうな
笑みを浮かべて

朗々と雪洞の仕事ぶりを評価する「彼」の姿がありありと浮かぶ。

やれやれと肩をすくめると、雪洞は
さも今思い出しました、という様に

「フランシス。フランシスはどこなの？」

と辺りを見回した。

実は建物を出た時から、ずっと気になっていた。

遅い。

裁判の終了時刻なら把握しているはずだ。

いつもなら、仕事が終わったら誰よりも真っ先に私を迎えて現れるはずである。

「フラン시스さんは片づけしてから来るって」

一人百面相をしている雪洞を横目で見ながら、ニカラが言った。

「片づけ？また恵永が皿棚でも倒したの？」

「つうん。雪洞様の車を狙った刺客だって」

雪洞の足が止まった。

余所見をしてつるつるの床に滑ったニカラが「おっと」とよろかる。

また、か。今度は何かしら。

…怪我しないと良いけど。

しばし何かを考えるようにじっと下を向いている雪洞に気付き、ニカラが訝しげに覗き込む。

「雪洞様？」

が、間もなく雪洞はぱっと顔をあげると

遠くで散歩中のご老人が振り返るほどの大聲で叫んだ。

「シカクでもサンカクでもいいわ。

私より優先する価値が、そいつらにあると嘆ひの？

フランシス・ド・フィニステール！」

反響する声が消えるにつれ、階段が終わった。

その先に目を向けると、まっすぐ続く道の先に白く長い車が停まっているのが見える。

その傍らで、定規で測つたかのように完璧な角度で頭を下げた燕尾服の青年が佇んでいた。

待ちわびた、「彼」だ。

かすかな風になびく銀色の髪が水面のように光を反射している。

左胸に手を当てたまま、フランシスはゆっくりと顔をあげた。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

秋を纏つた風が二人の間を通り抜ける。

黒いコートが舞い上がり、中から柔らかな白いワンピースが顔を出す。

銀色の瞳に手を引かれる様に

雪洞はそっと足を早めた。

protoype (後書き)

「おとぎ話」の話が少年誌モードに入るなど知るよしもないく...

review · advice 常時募集しております。

シキリキツリ

23世紀

それは今よりもっと

科学が世界を浸食する世界。

この時代では、人を人たらしめるものという、極めて非科学的な命題を科学的に解明しようとすると動きが起っこり始めていた。

まずは彼らが取り組んだのは、素粒子レベルでの肉体の研究。

しかし科学者たちは、肉体のみでは

極めて雄大な人間の体系を解明できないと知る。

そこで彼らが強い興味を持ったのが

精神である。

精神 それはこれまで、確かに存在が認められながらも極めて曖昧な解釈のまま、時代に放棄されてきた。

それまでの常識と言えば
「精神とは非科学的なもの」

であり、

強いてそれらしく言つなら、肉体を統括する脳の情報の収集と信号の発信という動き、とくに「くらう」として

科学的な説明、定義は未だ確立されていなかつた。

一方で、

この世の理へ理解を進めていく科学者たちの注目を集めたのが異次元空間の存在であつた。

「新たな世界」という

矛盾するような、なんとも非科学的なものにも

21世紀以降、一層の関心がよせられた。

現在我々の世界は、4次元 我々の肉体が置かれた3次元に時間軸を加えたもので成り立つとされている。

その外にある異次元の存在は21世紀からも示唆されていたが22世紀の終わり、その新たな次元の存在があるとある科学者集団によつて正式に発表されたのだ。

果たして異次元とはどこにあるのか

脳の中である。

正しく言えば、脳の動きを規定する世界というものが我々の知覚する世界と同時に存在するといふのである。

そしてその世界こそ

脳を動かす「エネルギー」

即ち「精神」の存在場所であることが分かつた。

精神と称されるそのエネルギーは、従いまでも自由に
速く
広範囲に
そして己の意思を持つて動き回った。

精神の存在が、初めて科学的に認識された瞬間であった。

科学者たちは、この全く新しいエネルギーの存在に到達し
「科学が非科学を凌駕した瞬間」と
世界中が歓喜の渦に包まれた。

こうして精神は、証拠が理論を追いついて存在するものとして

23世紀に鎮座する。

世界中の科学者たちが、今度はその発生源について
血眼になつて探索する一方で

23世紀の初頭、一人の少女が現れた。

世紀の天才と言われる、雪洞・F・ケイマである。

彼女が目を付けたのが、この脳内に定着し、活性化させるエネルギーの動きそのものである。彼女は科学者でありながら、類稀なる非科学的な感覚、いわゆる直観を有していた。

彼女はその直観により もちろん意識の上では様々な裏付け理論を組み立てたのだが 原因は分からずともエネルギーは確かに存在すると分かったのだから その跡を追つことは可能であると考えた。

そして、

精神の動きを素粒子レベルで「写し取ること」ができるば

それは「異次元における精神乖離になるのではないか」と。

科学者として気負いなのか
はたまた何かよっぽどの理由があるのか
何が彼女をそこまで突き動かしたのかは誰も分からなかつたが
まるで何かにとり憑かれたかのように
雪洞は全生命力をかけてその体系化に取り組んだ。

そうしてついに、それまで理論にすぎなかつた」の「第三ネットワー
ーク」を

雪洞はたった一人で、現実ものとして完成させる。

このとき、弱冠16歳であった。

【写し取つた精神の動きを

理論は分からずとも確かに存在する新たな異次元に移す。

その世界を【籠】^{かがり}と名付けると

雪洞は新たな「旅行先」として、人々に 有料で 開放し始めた。

肉体から開放された精神世界で新たな生活を楽しむ

そんな新世紀の高級レジャースポットは無論一大センセーションを

巻き起こし

雪洞は世界の納税者TOP10に入る大企業社長に史上最新少で
し上がつたのである。

そうして雪洞は、未だ未完成と称される【籠】の更なる発展と
その経営に奮闘する日々を送り始める。

彼女の執事、フランシスとともに 。

「フラン시스、遅かったわね」

雪洞は腕を組むと、飄々と立っているフラン시스を見上げた。自分よりずっと青年を見下すと、懸命に顎をあげる。

「時間通りとおりしゃつて下せこ」

フラン시스は淡々と切り返し、車の後部座席を開けた。

数世紀前の新型ポルシェ911カレラをモデルにした真っ白な小型リムジンは

「そもそもスポーツカーをリムジンに摸することが無理なのです」と文句を言つフラン시스を押し切つて、無理やり作らせた雪洞のお気に入りだった。

おまけに現代仕様で、空も飛べれば水にも潜れる。

さすがに光線はでないけれど、車とはなんのかもはやよく分からぬ代物には違ひない。

しかし今の雪洞の関心は、愛車よりフラン시스の悪びれぬ態度である。

「予定外の時間で出てこられたのはお嬢様です」

「う、まあそうだけじ。でもいつも30分前には来てと申つてゐるじやない」

といふか、ちつとも悪びれぬその態度がなんか嫌。

一度で良いからその飄々とした態度を壊してみたい。
いつも完全無欠な彼が慌てふためいた姿を、雪洞は見たことが無い
のだ。

雪洞がぐずぐずと黙々をこねていると、フランシスがバタンとドア
を閉めた。

「あーなんで閉めるのー?」

「ドアとはそこに入るためにはけるものです。お入りにならないの
なら閉めるのが妥当でしょう。
ついでに御乗りにならないのならこの車も車庫に戻して参りましょ
うか」

フランシスは意地悪く、ニヤリと笑った。

「の..

何か言い返してやりたいが、今回は明らかにこちらが悪い。

「あなた、また変な表情覚えたわね」

ロボットゆえなのか、人に近いゆえなのか

フランシスはまだ少女である主人に対しても容赦が無かつた。

いつも口論をしては、負ける。

「…いつか絶対、負かしてやるんだから

と数百回田の決心をして

雪洞はしぶしぶ車に乗り込んだ。

続いて一ノコラは少し離れたところに停まる深緑色の小さな車に向かい、

フランスは雪洞の乗る反対側のドアを開ける。

それを見た雪洞はきょとんとして

「フランス、今日はこっちに乗るの？助手席じゃないの？」

と尋ねた。

この時代の車には、自動の運転モードは無論、21世紀より更に発展した防御装置が施されている。

しかし、いきなり道端から射撃されるような事態には対応しきれない。

一方フランスは、そこの車型兵器よりよっぽど戦力になり得る身体能力を有している。

執事に加えボディーガードの役目も果たす彼は、後を絶たない雪洞の財産を狙つた奇襲に備えいつも助手席に座っていた。

つい先日も、遠方からの射撃を直前で察知したフランスがすんでのところで運転席に飛び移り、回避させたばかりであった。

「大丈夫です。最悪の場合にはここからでも運転席に行けると先日分

かつましたので「

「…なりいこけど」

リムジンの運転席と後部空間は仕切りで隔てられている。わざわざ一度降りて乗りなおすのだろうか、はたまたそこを突き破るのだろうか。

「そういうえばフランシス、ニコに聞いたわよ。
『片付け』はどうだったの?」

「問題あつません」

刺客に狙われた時点で問題がないわけない。

今度は一体どんな片付け方をしたの、と雪洞はフランシスを見る。

爆破、釣り首、四肢切断…

殺生は禁じていたけれども、それでも余りあるほど彼は敵に対して容赦がなかった。

完膚無きまでに、再起不能なまでに叩き潰す。

「何度も来られたら迷惑でしょう。一度で分からせてあげるのが優しさです」

と、どこかの映画を見て覚えてきたらじい台詞を俳優の様な顔立ちで述べるフランシスを見て、雪洞はぶるりと体を震わせた。

「出発してよいかでしょうか？」

「うそ」

「屋敷へ」

合図と同時に、自動で車のエンジンがかかり
「ツヨウカイシマシタ、シユツバツ、シマス」と、車が動き始めた。

その時だった。

「えいえいおっ」と地響きの様な音がして、車が小刻みに揺れた。

「何！？ 刺客！？」

雪洞が慌ててドアに手をかける。

フランシスはピクッと何かに反応する。

「お嬢様お待ちください、出では駄目です」

「バシャバシャバシャッ！－！」

けたたましい音と共に
目が眩むような光が一斉にたかれた。

「ただいま、雪洞・F・ケイマ氏が裁判所から出て参りました！」

マイクを持った女性が、25世紀仕様の巨大なカメラを担いだ男性たちを引き連れ

車の周りを一斉に取り囲む。

どこから湧いてきたのか大量の記者たちもそれに続いて半開の窓をこじ開けるように、車内にマイクをねじ入れた。

車内にまで届く稻妻のようなフラッシュの中
記者たちは口ぐちに何かを叫んでいる。

「裁判に決着は着きましたか！？慰謝料は払われるのですか！？」

「家族への謝罪は！」

「やはりシステムに異常があつたことを認めたのですか！？」

慌てて窓に黒いスモークをかけながら、雪洞がちつと舌打ちする。

「刺客よりタチ悪いヤツらが来たわね…」

「変ですね。わざわざ時間を変えて出てきましたのに、いつもありますり喰きつけられるなんて」

「もう、何そんな悠長に構えてるのー。あ、ちよつと、車壊さないでよー?」

バーゲンにつめかける主婦たちのように、記者たちは我先にと車に詰め寄る。

人の圧力でミシミシと車が悲鳴を上げる。

しかし突如、ぶわつ と

数名の記者が勢いよく背後に飛ばされた。

フラン시스がその怪力で、記者」と車のドアを開けたのだ。

「これは失礼」

フラン시스は後ろ手でドアを閉めると、カメラに向かつて優雅にほほ笑んだ。

ふつ飛ばされた同僚を見て呆然としていた女性記者が、はつと我に返ると再び声をあげる。

「！」これは、雪洞・F・ケイマ氏の執事ロボット、フラン시스・ド・フィニステールさんですね。

ケイマ氏の発明した、精神異次元輸送システム【篝 - KAGARI -】の利用により精神破綻者がでたということです。訴訟が起こっていたのですが、ケイマ氏は過失を認めたのでしょうかー?」

フランシスは女性を一瞥すると、涼しい顔で答えた。

「わが社の解答は、今まで通りでござります。

【籌】では一切のシステムトラブルも発生しておりません」

「ですが現実的に、精神破綻者がでているのではないですか！」

「現実的に、誤作動の履歴は残つておりますん。

これは検察側の調査によって正式に認められたもの。

それは貴女も、「存知でしょうか？」

フランシスに見つめられた女性記者は顔を赤らめ、ぐっと言葉に詰まる。

代わりに隣の男性記者が、街のチンドウのような勢いでまくしたてた。

「それでもあんたらの作った機械が原因で被害が出たことには変わりないだろう！

責任を放棄するのか！？」

男の眼鏡が冷たく光る。

「フランシス、やっぱり私が行くわ」

黒くスマートをかけた窓の向こうから、雪洞が声をかけた。
しかしふランシスはそれを手で制すと、なおも言葉を続けた。

「責任の放棄。

責任の放棄と申しますなら、御話は早い。

そもそも、わが社で提供しておりますのは、精神を肉体から解放し、共存させる新たな世界【籠】へとお連れる『方法』に過ぎません。もちろん最低限の安全は保障しておりますが、そこから何をするか、何が起こるかといつことは全て利用者様の責任にござります」

したたかな、しかし下腹部を押し上げるような強い声が響いた。辺りは一瞬、しん、として一同はフランシスを見つめる。

「もしそれすらも、こちらで保障しなければならないといつのなら選択は二つ」

フランシスは端正な細長い指を一本、瞳の前に掲げた。

「一つは、【籠】内における利用者様の全ての行動を、こちらで監視・統制させて頂きます。これまで提供してきた『自由』を代償に、全ての責任を負わせて頂きましょう。」

そして二つには、【籠】利用の全面停止」

指の間から覗く瞳が、少しつりあがったかと思うと鋭くきらつと光った。

「ですがそれは、全世界に何万と居られます利用者様を納得させられたらの話になりますが」

細めた瞼から覗く銀色の瞳は
柄から抜かれた日本刀を想わせるほど冷たかった。

「ああ、やはりこれは人では無い
主人を守る
その義務を遂行するためだけに存在を許された
ロボット なのだ

女性も男性も、カメラのレンズからそれを見ていた報道陣も
その並々ならぬ迫力にじごくり、と唾を飲んだ。

そんな張りつめた空気を弾くように、フランシスはぱっと表情を変
えると
一転して柔らかい笑みを報道陣に向けた。

「それでは、詳細は追ってお知らせしますので、今日はこれにて失
礼いたします」

深々と頭を下げると、真っ白な車のドアを開けて優雅に乗り込む。

同時に ガーッ と黒い窓が開き
中から雪洞が顔を出した。

「やつこつことだから。じゃね」

にこにこと手を振る雪洞を隠すよつて
再び窓が閉じられていく。

魔法にかけられたように呆然と立だけぐす報道陣たちを地上に残して
真っ白な車と、それを追つ小さな深緑色の車は悠然と空中に上がり
て行く。

くるりと旋回して見上げる人々に影を落とした後
雲一つ無い真っ青な秋晴れの空へと消えて行った。

1 - 0 (後書き)

後ろの車内では、コラがそんなフランス劇場を涙目（恐怖）で見つめています。

フランシスは恐ろしく美しい顔をしていた。

陶器のような白い肌に、滅多に変化しない顔色は
ガラスケースに仕舞われたフランス人形を見る人に髣髴させる。

二人で歩いているとすれ違う女たちのほとんどが振り返った。

そんな時、雪洞は自分より頭一つ分高いフランシスの顔を盗み見るので

時折機械的に瞬く睫毛は雪洞の2倍はあるのではと思われて、嫉妬心を忘れまじまじと見つめてしまうのだった。

フランシスはロボットである。

精神の科学的研究発展に伴い

25世紀では人工知能　いわゆるロボットの研究も進んでいた。

精神たらしめるエネルギーの解明が遂げられていない以上、その能力は未だ

人間のそれにはるか及ばないものであつたが
家庭用、業務用、軍事用、娯楽用と、人間の様々な目的に応じ多くのロボットが作られては、

日夜世界の潤滑な進行に貢献している。

そんな中、天才発明家兼【篝 KAGARI】社長として多忙を極める雪洞・F・ケイマの執事として、

彼女自身により作られた人型ロボットがフランシス・ド・フィニーステール（Francis de Finistere）であった。

それは実存するどのロボットより、

極めて人間に近く

考え

笑い

動く

超高性能ロボットであつた。

科学的な精神研究者として時代の先端に立つ彼女だからこそ、それほどの人工知能をいち早く開発できたのかも知れない。

実際のところ、どのような技術で、どういう経緯で彼が作られたのかは誰も知らなかつた。

ある日突然、雪洞はフランスを連れて現れたのだ。

人々はただその美しすぎるロボットを見て

「一つの意味で - 驚嘆したが

彼女を迎えたのは、その技量への称賛に加え痛烈な批判であつた。

人型ロボットの発明は、その開発が進む一方でタブーとされる傾向にあつた。

技術とコスト上の問題、また倫理上の問題からである。

雪洞は、この禁忌を犯して、フランシスを作った。

「世界の秩序を乱す氣か！？」

「お子様のお人形遊びとは違うんだぞ！」

巻き起こる批判の渦の中、雪洞は突き付けられたマイクに向かって
「量産はしないわ」とだけ答えた。

【篝 KAGARI】を筆頭とし、雪洞は数々の社会活動を行つ
てきた。

もちろんそれは止まぬ批判に対する雨除けにすぎなかつたのだが
雪洞はフランシスを彼女の執事として用いることで
間接的に社会貢献に従事する平和維持型ロボットと位置付けること
でようやく事を収める。

一方で、フランシスにはもうひとつ、少し厄介なこともあった。

その外觀ゆえに引き起しきられる
倫理上外の問題である。

「どちらがご主人か分かりませんわね」

ある時、世界工学発明者という俗にいう『天才』たちが集る会議で、ライバルのアリエル嬢に言わされたことがあった。

「まるで気晴らしに散歩にでかけた貴族が
氣まぐれに村の平民を引き連れているようですわ」

そういう彼女も、雪洞の後を追うように作った超高性能人型ロボットを引き連れていた。

フランスより一回り小さなその男性型ロボットは、性能の面でも外見の面でもフランスより劣っている。

女の嫉妬であった。

「そういうあなたのロボットは、もう少し装飾を施した方がいいんじゃない？」

「お、御二人とも落ち着いて。世紀の天才と言われる少女同士が争つては、世界がいくつあっても足りませぬ…」

ばちばちっという音が聞こえそうな火花のぶつかりあいに周囲が戦慄する中

フランスは有変わらず涼しげな顔で雪洞の後ろに立っていた。

雪洞はしばしば、似たような子供じみた嫌がらせを特に女たちから、幾度となく受けのこととなつた。

しかし

主人より美しい執事

雪洞にとつてそんなどは、どうでも良かつた。

例え、彼の銀髪が雪洞のひそかに白慢としていた長い髪よりはるかに綺麗な艶を持つていても

例え、色めかしくも男性的に響く彼の声がしばしば事業の交渉相手を発情させ商談を中断させられても

例え、ひどく冷たい銀色の瞳で痛烈なダメ出しを繰り返す彼の冷たさに幾度となく心の傷を抉られても

あの日『彼』が消え

『世界』が消え

心を照らす全てが遠ざかったあの瞬間から

フランシスと篠だけが

雪洞の生きる、唯一の理由であったからだ。

【篠】

それは彼女にとって
まだ未完成で
不十分で
それでも狂おしいほどに
焦がれる世界だった。

その完成を目指してフランシスと歩く道のりは
彼女の願いに辿りつくまでの

旅に他ならないのである。

一人で夢見た

世界を追つて

彼の残した

言葉を負つて

雪洞の発明した精神異次元輸送システム【篝 KAGARI】

その運営における不祥事をめぐる裁判から数日が経った。

その後、システム上の異常は起つていなかつたといつ調査結果を検察側も正式に発表し
そして何よりフランシスの提示した「二つの条件」が世界中で3D
映像で発信されたから
雪洞たちを糾弾する声はぴたりと止んだ。

【篝】の過剰滞在から神経に傷を負つたとされる少年は和解成立と同時に驚異的な速度で回復し、現在は学校への復帰を控え、自宅で療養中であると朝一番のニュース番組で、局名物の女性キャスターが報じていた。

「結局慰謝料田辺の、こちやもんだつたのよ」

フランシスの用意したモーニングセットを食べながら雪洞が言った。

「こちやもん」

「濡れ衣つて」とね

「なるほど。

ジャムは毎になさこますか? マーマレードになさこますか?」

「苺」

赤い小瓶を雪洞に手渡しながら、フランシスは頷いた。

「これでようやく、通常の仕事に専念なさることができますね。それでは本日のスケジュールなのですが、まずは世界ロボット工学研究者会議の……」

御経のように読み上げられる分単位のスケジュールを聞き流しながら、

雪洞はたつぱりと苺のジャムを乗せたスコーンを、いざ食べんと口を開ける。

と、その時だった。

「ただいま、新しいコースが入つて参りました」

何やら女性キヤスターが神妙な面持ちで言葉を続けると手渡された紙を見て顔をしかめた。

雪洞は久方に、世界ロボット開発者会議に出席していた。

「ええ、今日の議題はですね

前回に引き続き、障害者支援福祉ロボットの新型発表につきまして

…

ステージの上に立つ肥満気味の同会者は、ライトの熱に照らされ汗をしきりに拭っている。

会議と言つても、200人もの「天才」たちの出席するそれはホテルのエントランスにありそうな壮麗なシャンデリアの飾られたコンサートホールのような場所で行われていた。

そのシャンデリアの真下にある席で

雪洞はステージ上で映し出されるロボット模型の3D映像をぼんやりと眺めていた。

【篝】を発明してから約2年。

【KAGARI】を起業してから約一年。

飛ぶ鳥落とす勢いで成長する会社は幸い大きな事故に見舞われることもなくやつてきた。

それもひとえに、雪洞の類稀なる頭脳と、時として人間よりはるかに合理的かつ効率的な判断を下すフランスの努力の賜物である。

それがここのことか、どうも調子がおかしい。

雪洞は今朝のキャスターの言葉を思い出していた。

キャスターはどこかの国で戦争でも起きたのか、と言いたくなる様な表情で眉をひそめると
幾分か声を低めて言つた。

「ただいま、【篝】の利用者であつた数名が都内の病院に搬送されたとの情報が入つて参りました。

先田の訴訟と同様、今回も過剰滞在による神経回路の損害が原因とみられています

雪洞は頬杖を付いて、面倒くさそうにステージを眺める。

「障害を持った人間の手足となるロボット」とやらの顔を見ながら頭の中では白いカプセルに入れられ救急治療室へと運ばれていく男たちの映像が繰り返し流れていった。

「それでは次回までに、新型家事補助ロボットの模型について各々のレポートを…」

真っ白な髪と口ひげを生やした会長が会議の終了を告げると「やがやと一気に会場が騒がしくなる。

車を用意して参ります、といつフランシスの声に手で応えると雪洞はその口配られた電子資料に目を通す。

「また大量な資料を簡単に出しやがって。
ええと5、10…つわつ70ページもあるじゃない」

ぶつぶつと文句を言いながらポーチから眼鏡を取り出そうとしている
ふと甘ったるい講師の香りが漂ってきた。

短いスカートから覗く細い足が見える。

顔をあげると、すらりと伸びた身長にショートヘアがよく似合つ
ライバルのアリエル・アンダーザシー（Arielle Under
the sea）であった。

「お久しぶりでござります、雪洞さん」

「…まあ。お久しぶり、アリエル」

くつきりとした二重の瞳に大きな睫毛を瞬かせ
巷で大人気のカリスマモデルでもアリエルは、にっこりと雪洞に微笑みかけた。

「一連のニュース、拝見致しました。

とても大変だった様子で、私何もお手伝いできなくて心苦しかったですわ」

「お気づかい有難う。そつなのよ、ちょっとね」

雪洞は電子資料をタブレットに保存すると、鞄にしまった。

「行きましょうか

「ええ」

一人の少女は肩を並べて部屋を出ると、ロビーへと向かつ。

世紀の天才少女と言われる一人のツーショットはしばし周囲の注目を集め、

ロボット開発者会議の一つの名物と化していた。

ひそひそと話しながらこちらを指差す人々などまるで気にせずアリエルはいつものようにゆっくりと、幼なそうな高い声で話し始めた。

「そもそも今回相次いで発生している精神破綻の原因というのは利用者の過剰滞在ということでしたけれど、これまでそんなことはありませんでしたのに、何故こいつも突然？」

さも心配そうな表情でアリエルは雪洞の顔を覗き込む。

「まあ分からないわ。

何故かここのこと、こちらで規定した時間を超えて滞在した人たちがる人たちが出てるみたいなの。

先ほど家族と電話で話したのだけれど

今回は、こちらが治療費の一部を負担することで早急に落ち着きそうよ

「…まあ、それでは無事に和解できそうなのですね、良かったですわ」

アリエルが胸に手を当ててほつと溜息をつく。

「私、心配しておりましたの。

「ユースを見ましたら、執事さんを矢面に立たせて『自分は出でいらっしゃらなかつたので

先日の裁判は上手くいかなかつたのでは無いかしらつて」

よく言つわ。

しつかり傍聴席に、関係者を忍び込ませていたくせに。

あの日、広い裁判室の傍聴席で

しきりに電話で何かを報告している不審な男が居たのを雪洞は見逃さなかつた。

変装はしているが、それがアリエルの周囲にいつも居るヒュであることにも気付いていた。

雪洞はヒツヒツとほほ笑み返すと、アリエルを見上げて言つた。

「やうなのよ。あの時は何故か急に報道陣が詰めかけて来たものだから困つてしまつたわ。

だつて、早めに切り上げたはずなのに、何故かドンピシャのタイミングだったのよ。

まるで誰かに教えられたかのよう

「まあ。それはアンラッキーでしたね。

私もよく報道陣の方々に囲まれて、困りますの

ふふふ、と少女たちは顔を見合させて笑いあつ。

「そう言えば、いつも貴女の周りを徘徊しているあのJAPANは今日居ないのね」

「まあ、どの方の」とかじり。私を守つてくださるJAPANの方々はたくさんいるので、分かりませんわ

二人は警備ロボットの合図に合わせ、建物のエントランスを出た。

「これからは、私でよければいつでもお手伝いいたしますので困ったときには是非読んで下さいな」

すれ違う男たちが思わず見とれるほど可愛らしい笑顔でアリエルが雪洞に微笑む。

「それは有難いわね。

でも悪いわ、そちらも会社の経営や芸能活動で忙いでしょ？」

「まあ、他でも無い雪洞様のためですもの。

私たち、学生時代からの付き合いじゃなくって?

どうです、是非一緒に籌の経営を……」

そんな雪洞の姿を見つけ、たたたつと小さな幼女が走ってきた。
そして思い切り飛び上ると、がばりと抱きついた。

「ほんぼりたまーお疲れ様！」

雪洞はわっと声をあげてそれを抱きとめる。

抱きついてきたのは、幼女型ロボットのシャナ (Shana) であ
った。

ほっと顔をほころばせる。

「シャナー！」

シャナはフランシスの妹分にあたる、超高性能人工知能人型ロボッ
トだ。

知能指数は兄より格段に劣るが、彼女の役目である主人の“癒し”

効果は十分に果たしてくれている、セラピー用ロボットであった。

大きなリボンを頭につけ、白に近いブロンドの髪が丁寧に巻かれている。

やや垂れ下がった尻が可愛らしく、フランス人の妹にふさわしいフランス人形のような風貌であった。

「シャナ、『めんね仕事が長引いて、良い子にしてた?』

「んふふー」

答える代わりにかりと笑つてシャナは雪洞を見上げた。

とJRの泥のついた洋服が、彼女のやんちゃぶりを物語つている。

やれやれ。

また何かいたずらしたわね。

まあ、何をしたって良いわ。

可愛いから許す。

雪洞は二ビルに笑う。

「あら、この子が例の?」

アリエルがシャナを見て目を丸くする。

「ええ、そうなの。
去年、孤独死撲滅連盟から例外的に許可をうけて作った
フランシスの妹よ。
人間で言えば3歳くらいかしら」

「…」れは「…」れは、可愛いお嬢さんね

アリエルはにっこりと笑つて、視線を合わせるようにしゃがみこんで手を差し出した。

「初めまして。雪洞さんのお友達の、アリエルと言います」

シャナはささやくと雪洞のスカートを掴むと、隠れるように顔をつづめて横目でアリエルを見た。

「まあ、どうしたのシャナ」

雪洞は驚いてシャナを見る。

「…」

「駄目よ、御客様にはちゃんと挨拶しなきゃいけないでしょ！」

「めんさいね、アリエル。

いつもはこんなに失礼な子じゃ無いのだけど。

子供ってほら、素直だから」

アリエルの口角がぴくっとひきつる。

何があつしゃりたいの？と田代が語る。

言葉通りよ、と雪洞が勝ち誇ったような顔で笑う。

「…急に有名人が現れたものだから、少しひくつせてしまつたのかも知れませんね。

子供は教育者に似ると、申しますから。」

「悪かったわね」

「とんでもない」

一人の間に火花が散る。

「それではフラン시스が待つてるので失礼するわ」

フラン시스、とこゝの言葉にアリホールはまたもや顔をひきつらせた。

「おたくのセバスチャンによるじく」

ふふん、と鼻で笑うと、雪洞はシャナの手を引いて建物の裏手にある関係者駐車場へと向かって行つた。

「シャナ、じうじがやつたの？ セバスチャン

「あのお姉さん、怖い」

シャナはまた雪洞のスカートを再びぎゅっと掴んだ。それをきょとんと見ると、雪洞は声をあげて笑う。

「あははははー、やつかそつか、やつぱり分かるか。さすがロボットは敏感ねえ。」

「さうよ、あの人は危険だからね」

「キケン?」

「きけん。『気をつけなさい』ことよ」

そう話していくうちに、フランシスが車を引き連れて現れた。

「お待たせしました」

手慣れた動作で車のドアを開ける。

雪洞がそれに合わせて乗り込むと、
シャナも続いてよいしょと座席に手をかける。

と、ひょことシャナの体が宙に浮いた。

「お前は向こうだ」

シャナの背中をつまみあげたフランシスは
その後ろに停まる深緑色の車に向けて
ポイッと投げてしまった。

遅れて着いたその車から出てきた二口ラガ
慌ててシャナを受け止める。

「あわわ、フランシスさん危ないって

「なんで、兄さまのバカ！」

シャナもぼんぼりたんと同じ車に乗る、いやあー。」

そんな抗議をまるで介せず、といつたよひに
フランシスは車に乗り込みドアを閉めた。

「行ってくれ

「リョウカイ、ウンテン、サイカイシマス」

わわわわん、と電気モーター音が鳴る。

雪洞はそれでも何か言いながら追いかけてくるシャナに手を振りながら
フランシスに言った。

「乗せてあげればよかつたのに

「シャナを乗せたら何をされるかわかりません。

先日あの怪力で特注のバスタブを破壊されたのをお忘れですか！
この車はメンテナンス代も馬鹿にならないのですよ

田々ケイマ家の家事や財政管理に追われるフランシスが悲壮な声を
あげる。

「はいはい、分かったわ。優秀な執事を持って本当にた・す・か・る」

ひらひらと手を振ると、雪洞は窓を開けて外の空気を吸い込んだ。

「ヒロウモード、コレ、「パチュウイクダサイ」

車がゆっくりと高度を上げ、空中道路を滑走し始める。

「わざアリエルに会つたわ」

「アリエル様。お久しぶりですね」

「やつぱり、この間報道陣に情報を流したのは彼女だったみたいよ

「やつぱりでしたか」

気付いてたの?と雪洞がフランシスを見る。

「…まあ、いいわ。今日はシャナが仇を取ってくれたから

窓から地上を見ると、除々に小さくなつていく街並みの中ですぐやく諦めたシャナがニコリと車に乗りこんで離陸するところだった。

雪洞はふつと笑った。

「シャナが。アリエル様に」

「そつなの。随分悔しそうな顔してたわ、実はね…」

と雪洞は一連の話をフランス語に話し始めた。

「アリエル様、車の『』用意ができました」

アリエルの執事ロボットであるセバスチャンが近づき、
冷えて参りましたのでこちらを、とカーディガンを渡す。

アリエルは黙つてそれを受け取ると、

小さくなつていく車を懐々しげに見上げながら

「…妹、ね」

と呟いた。

「仕返しと言えば」

スケジュール帳をめくりながらフランシスが言った。

「先日裁判所の前で仕掛けてきた刺客ですが、身元が判明しました」

「そう」

雪洞はパノラマの様にゆっくりと流れる景色を眺めて呟いた。

「数ヶ月前に破産した小規模会社の元経営者と会社員数名。企業を立て直す資金を手に入れないか、という話をどうぞやの大企業から持ち込まれたとのことです」

ふうん、と興味なさそうに雪洞は答えた。

「今月で30人目だつけ?」

「正しくは36人目、団体数で言えば11個目です。

生憎、その大元の企業については確認はできておりません。申し訳ございませんが、今しばらくお待ちください」

「別にいい…。でも誰なんだろう、思いつく人いる?」

「はい」

「書いてみて」

「全部…で御座りますか」

「全部」

フランシスは顔をあげると、しばし静止して記憶を手繰り寄せた。

「…アルファベット順でよろしいですか？」

「…いや、もういい」

雪洞は手を額に当て、ため息をついた。

いつの時代も、権力に敵はつきものだ。
雪洞の経営する会社は彼女が一代で築き上げたばかりの脆弱なものだ。

その上雪洞はまだ一八という、小娘となめられて仕方ない歳でもある。

自分の敵を作りやすい言動も相まって、
自分に敵が多いことは彼女自身重々承知していた。

起業を決意してから予想はしていたことだつたけれども、
さすがに毎日他人から死を望まれる生活にはいい加減うんざりする。

「はあ」

思わず投げやりなため息をついた主人を見て、フランシスはぱちくりと目を瞬かせた。

「お嬢様、御安心を。お嬢様のお命は私が御守り致します」

珍しくフランシスが優しい言葉をかけてきた。
驚いて飲んでいたホットココアが口からじぽわきになるのを慌ててこらえる。

「フランシス……」

「お嬢様は私達にとってとても大切な方ですから」

「何事かしら、槍でも降るんじゃ……」

あ、酷使しそうでどこかシリアートしたかな。

なんて心の声とは裏腹に、思わず涙腺が緩む。

「ありがとう」

「お嬢様が居ひつしゃらなくなれば、私とシャナは引き離され、データを初期化、全ての感情回路を切断され、どこかの屋敷でこき使われることでしょう。

」「今は路等に迷いホームレスに逆戻りでしょう」

「……」

砂浜の波が引くよつに雪洞の感動が薄れていぐ。

「いんな主人に仕えたばかりに…。あまりに不憫です」

今度はフランシスが涙ぐむ真似をした。

雪洞の表情から学習したらしい。

「ちょっとねー！」

「お嬢様。どうせ」「くなるのでしたら、御子息ができてからにして下さい」

フランシスが雪洞の手を取り切実な眼を装つて訴えた。

イワシとくる…しかしい」止ま抑えよつ。

雪洞はフランシスの方に向き直ると

「へえー。じゃあフランシス私に夫を探しててくれるの?..」
と詰め寄つた。

冷静を装つてこるものの顔はつゝ上がつてこる。

「いえ。それは無理とこつものです」

主人の様子など氣にも留めずに執事はサラッと答えた。

「じゃあどうやって子孫を残すの?」

怒りを増した雪洞の語尾が震える。

「別に男は必要ありません。どうしても御自分のDNAを残したい
といつのであれば精子バンクという手があります」

「…私に、産めと」

予想外の解答に雪洞は啞然として口をあんぐり開けた。

思わずマグカップを落としけ、フランシスは「おっと」とそれを
支える。

「代理母を用意しましょつか」

夫は無理でも代理母は用意できるのか。

「他にこゝりでも方法はあります。養子などはいかがですか」

「それは手っ取り早くいいわね」

嫌味を言いたくなってきた。

「全くです。お嬢様の面倒な性格を受け継ぐ可能性がないだけに寧
ろよろしいかと」

「どうこう意味よ」

雪洞の顔色など気にもせず、フランシスはつらつらと言葉を続ける。

「二二二二二などせじでしょ、う？」

お嬢様の息子としては少々歳が行き過ぎていますが、あれは貧民街
から救われた恩義を常に感じておりますから裏切る心配が無いです
し、数少ないお嬢様贔屓ですよ。

まあ、頭が悪いのが玉に瑕ですが

フランシスは端正な顔立ちをわずかにゆがめると、腕を組んで考え始めた。

珍しく真剣な表情だ。

全く持つて皮肉極まりない。

「…考えておくわ」

心配されてるのかされてないのか。
そもそもプログラミングを間違えたな。
いや、教育の仕方が悪かったかしら。

かすかな期待がもろくも崩れ去るものいつものことである。
そんなことを考えながら雪洞は再び窓の外へと視線を戻した。

爽やかな空気を見にまといながら田を進んでいた車が
オレンジ色の花々の横を通り過ぎる。

と、風とともにふわりと甘い香りが車内に香ってきた。

せわしなくスケジュール帳に何か書きこんでいるフランシスの隣で
雪洞はすっかり空になつたホットココアのコップをくわえたまま

「キンモクセイ…」

と呟いた。

「花言葉は、『真実』『初恋』……」

何かを懐かしむように、言葉をこぼす。

フランシスはそんな雪洞の横顔をちらりと見た。

しかし、哀愁とも憧憬とも取れぬ表情を『分析不可能』と認識すると手もとの手帳に再び目を落とした。

1・3（後書き）

一人の後ろではニコラとシャナが助手席をめぐって喧嘩中。

市街地を囲む海を越え、更に一つ小さな山を越えると中性のヨーロッパを想わせる長閑な田園地帯が現れる。

その中に古びた洋館がただ一つ、悠然とそびえ建っていた。黒ずんだレンガがその歴史を物語つている。

それこそが雪洞・F・ケイマ邸だつた。

近隣と行つても一番近い家でさえ屋敷から徒歩10分ほどかかるのだが人々は、
かの有名な雪洞の邸宅の名にふさわしいほどの大豪邸を指差しては
『実は地下に遺跡が眠っている』とか
『家中にからくりが張り巡らされている』とか
『地球の危機が来ると変形してロボットになる』とか
思い思いの噂話をして楽しんでいた。

そんな近所の奥様方のかつゝのネタになつてゐるとはつゆ知らず壮麗な屋敷の主人を乗せた真っ白な車が、バロック調の壮麗な庭園にゆっくりと降り立つた。

車が止まつたのを確認すると、フランシスがドアを開ける。
庭で風に揺られる花々もびっくりの、しなやかで無駄の無い動きだ。
促されるままに立ち上がつた雪洞は、差し込む昼間の太陽に目を細めた。

車に車庫へと戻るよう指示を出したフランシスが、雪洞に声をかける。

「お疲れ様で「jazz」ました」

この日、雪洞は朝から例の被害者家族らとの示談に向けた非公式な会議に出席していた。

「本日は御同行できず申し訳ありませんでした。お話は滞りなく進みましたか？」

「うん、和解は正式に成立したわ。でも思ったより、慰謝料を取られた。向ひうがなかなか腕の良い弁護人を抱えていたの。

…詳しく述べ後で話すわ、今は少し何も考えないで散歩したい

かしこまりました、と頭を下げるフランシスに先立つて雪洞はゆっくりと庭園を歩いていく。

まだ昼前と言うのに、少し肌寒くなつた秋の空気を吸い込みながら雪洞は綺麗に整えられた花壇眺めていた。

ふと、その中でひつそりと咲く秋桜が目に入った。

「お前、今年も咲いたの」

雪洞はしゃがみこむと、そつとピンク色の花弁に触れた。

疲労のせいかぼんやりとした視界に

いつかの映像が映し出される。

ああ、あの日もちょうど、こんな晴れた日だったな。

真っ白な道をいつも一人で歩いた。

あの人は歩くのが少し遅くて
私は振り返つてばかり居た

あの人は花壇に咲く花を見るのが好きだった。
そして、咲いたばかりの秋桜を見つけると
囁くように言つたの

「ここにも居た…私の雪洞。

儂くも、強い花

「お嬢様」

フランシスの声で雪洞ははつと顔をあげた。

「呆けておひれましたが、大丈夫ですか？」

「ええ…少し、花を見ていたの」

フランシスは雪洞の手元にある秋桜に手をやつた。

「コスモス、ですか」

「うそ」

「菊科の一年草でメキシコ原産。観賞用として花壇に栽植するのに好まれ、現在は品種改良により20種も色がございますね。

別名アキザクラ、秋の季語として用いられ、花言葉は『少女の純真』『真心』

「…」

「しかし、お嬢様に似ていらつしゃこますね」

「え?」

思わずびくっと鼓動がする。

「『』覧になつてください」

フランシスは秋桜の葉を一枚手に取った。
葉の上には青虫が乗つている。

今日の雪洞は、桜色の髪に若草色のピンをさしていた。

「…捻り潰したろか

雪洞はふてくされた様にスタスターと歩き始めた。

「軽食をお持ちしましょつか？」

何食わぬ顔で微笑みかけるフランシスを横目で見ながら、

「いや、いい。それより早く恵永の料理が食べたい」

とびつときらぼうに答える。

「では早急に恵永に料理を作らせましょづ。

何をお召し上がりになりますか？」

「何でもいいから美味しいもの」

「ではそのよづに伝えましょづ」

フランシスは胸元から携帯電話を取り出すと、『屋敷へ』と告げた。
しばしクラシック音楽が流れた後、空中に三次元化された屋敷内の

映像が現れる。

しかし、しーんとして何も聞こえない。

「故障か？」とフランシスが顔を近づけたときだった。

「ガツシャーン！――！」

辺りに不快な音が響き渡った。

「またか…」

ちつといつ舌打ちとともにフランシスが呟く。
多分、というより確実に犯人は恵永だろう。

今度は何を割ったのかしら。何にせよ、今月はこれで二回目ね。
片付けに時間がかかりそうだ、少しうっくり行ってやろう。

正門から屋敷まで5分ほどの道のりを歩きながら、フランシスの隣
で雪洞が苦笑する。

何か騒ぎながらがちゃがちゃと陶器を片付ける音がして
今度は男の映像が現れた。

いかにも人のよさそうな顔立ちの東洋系の男である。

「あつあの、お呼びでしょうか」

「……総料理長の恵永、お嬢様がお帰りだ。お食事を用意してくれ

フランシスがいかにも苛立たしげに言った。
つられて恵永の顔も恐怖でひきつっていく。
いつもの光景だ、見なくても分かる。

「は、は、は、はい。何を作ればよろしいでしょうか」

「とにかく美味しいもの！」

すかさず雪洞が答える。

「あ、お嬢。わかりました！」

雪洞の顔を見た恵永の顔がぱっと安堵で輝く。

しかし、それもつかの間

「…にしても恵永。今度は何を壊した！？」

主人の肩をぐいとどけてフランシスが再び顔を出した。

「…いつ、仮にも主人を。

「皿を…」

「どの……」

お前は先日、ヴェネツィアから取り寄せたガラス皿を壊したばかり
だろう、と思わずフランシスが身を乗り出すと、
「片付けは後でいいから、食事の用意をお願いね！」
とだけ言って雪洞は回線を切ってしまった。

「お嬢様！！」

「ふ、あははは」

血相を変えて怒るフランシスを見ていた雪洞が、腹を押さえて笑いだした。

フランシスは不思議そうに雪洞を見る。

「だつて、銃器を持った大の男たちに襲われても微塵も動じないあんたが、こんなことでこんなに怒るなんて…」

その長閑さがなんだか可笑しくて、雪洞は久しぶりに声をあげて笑つた。

「お嬢様…笑いごとではありますぬ

「まあ、今に始まつたことじやないでしょ」

雪洞は目尻の涙をぬぐつて言った。

たかが数十万の皿の一枚や一枚。

それよりも今、彼の料理が食べたいのだ。

そしてなにより、『ご飯を作つて待つてくれる人が居る。帰りを待つてくれる人がいる。

それが嬉しいのだ。

やつと手に入れた
大切な「家族」。

少しだけ

今だけはここで羽を休めて、良いよね

まだ何か言いたげなフランシスが言葉を探していると
「おかいなさい！」
と、シャナとニコラが屋敷から走つてくる音が聞こえた。

—おいしーい！！

20畳はあるかと思われる広い食卓のこれまた一際大きなテーブルに色とりどりの食材で彩られた料理が並べられていく。

ホウレン草のキッシュに甘く煮詰めたオニオンのスープ、フレッシュユーハーブを練り込んだバケットに鶏肉と8種の野菜を使った恵永特性プレー・バスケーズ…

雪洞は歓声をあげ、一面に広げられた料理を次々と口に運んでいった。

「やつぱり」の味は料理口ボツトじゃ出せないわ。

たまらん、と言つた顔で雪洞が思わずフォーケを振り回した。
仮にも『お嬢様』としてはしたなすぎるその腕を黙つてフランシス
が掴むと、そつとテーブルに落ち着かせる。

「お詫びにあざかり光榮です、お嬢。西の方にある國の地方料理でして…」

と、厨房から白いタオルで手を拭きながら「ツク」が出てきた。黒髪を後ろで束ねた長身の男である。

「私は田舎料理の方が好きなの。よくわかってるわね」

満足そうに雪洞が頷くと、
バタバタと遅れて二「コラ」とシャナが部屋に入ってきた。

「うわあーおこしやー」「
シャナも」飯するーー！」

ビザビヤと席に着くと、合掌してから争つ様に皿にかぶりつく。

普通従者は主人と共に食事をとらないのだろうが
「こんな広いテーブルで一人ぼつねんと食べろっていつの?」
との一聲により、ケイマ家ではこれが通例の光景となっていた。

「恵永さん、天才！」

パン屑を頬につけた二「コラ」が言った。

「そ、そりがな…へへへ、いやでも、まだまだレシピが足りなくて
ね。

それでお嬢、また新たに食材を取り寄せたいんですが、これがまた
高価で…」

「いいわよ。お金なさいへりもあるから」

「へへへ、いつもすいません」

人より下がった眉をせりて下げながら、恵永が会釈する。

もうすぐ三十路に差し掛かるこの男にこそが

美食家の雪洞が厳選に厳選を重ねて雇ったケイマ邸の総料理長であ
つた。

恵永が屋敷に来たのは今から一年ほど前のことだ。

「世界一大きなレストランで、世界中の料理を出す」とが夢なんです！」

数々の名立たる有名料理家たちが集まる試験会場で大して目立つた履歴も無く、今田舎から出てきましたと言わんばかりの風貌の男が審査席に向かつて頬を紅潮させながら訴えた。

「お金がなくて旅行に行けない人が、海の向こうの料理を食べられる店にしたいんです！」

突如声を張り上げた男を見て、会場内からくすくすと笑いが起る。雪洞は黙つて恵永の作った料理を口にするし、当時気に入っていた黒ぶちの眼鏡をくいつとあげた。

そして

「あとは帰して良いわ」

と、まだ大量に残っていた料理人たちの履歴書を執事に投げて席を立つた。

会場内がざわざわと困惑の空氣に包まれていくなか恵永の背中を冷や汗がつたる。

「どうしよう、怒らせてしまった。
もはやこれまでか…

と、恵永が諦めたときだった。

雪洞は半身だけ振り返って恵永を見ると
「夢を持つ男は嫌いじゃないわ」
と言つた。

いつものようにニヤリと笑つて

「お嬢様の我儘に応えるのは大変ですよ。辞退するなり今のうちに
す」

「いいやー」

ふんふんと怒りながら審査会場出ていく少女と、それを追う美しい
執事をただ呆然と見つめる。

その日から、恵永は見事ケイマ邸の総料理長へと就任したのだった。

あの時の「ご恩は一生忘れません」と涙ぐむ恵永の隣で、雪洞が次々
と料理をたいらげていく。

「いやあ、お嬢の食べっぷりを見ていると、作りが甲斐があります

「だつて美味しいんだもの」

雪洞が答えた。

「しかしお嬢様、」さうが残つてゐますが」

「うう……」

フランシスの指差した先にあるペーマンを見つめ、雪洞は思わず手を止めて顔を搔かせる。

「だから、あ…嫌いなのよ

「子供ですか

「うわあこわねー嫌いなものーつかーへ、誰にだつてあるでしょ
う」

冷ややかな視線を送るフランシスに向かって雪洞が顔を赤らめる。すると、隣で特性エナジードリンクをジョッキへ飲んでいたシャナが言つた。

「シャナの」とほ好きー?..

雪洞はこつこつと笑つて

「好きよ」と答えた。

「やつぱり雪洞は好きでしたって好きでしょ?」

空いた皿を「づかながらフランシスがぽかつて呟いた。

思わずぴきつと顔にすじが入ると、雪洞は

「あなたは嫌い!」

と、ふいっと顔をそむけてしまった。

「キラ・イキラ・イー兄さまキラ・イー！」

さやつさやヒシャナが声をあげて笑う。

「口も笑い、恵永も口元を隠して笑った。

フランシスは一、二度目を瞬かせると
「嫌われてしましました」

と、雪洞を指差して「口を見た。

「駄目だよフィニステールさん、雪洞さんはガラスのハートの10代なんだから」

「誰がガラスのハートよ、どうから仕入れてきたのよその死語は」

「お嬢様の場合、例えるならガラスといつより青銅器でしょ」

「いい加減にしなさいフランシス！」

はしゃぐ顔も、声も、いたいけな少女そのままである。

昼夜の大人数と肩を並べて
あんなに勇敢に戦っている人とは思えないな…

「口はスプーンを加えながら、そつと雪洞を見つめた。

そんな一同の様子を窓辺に影を落とす大きな栗の木にとまる一羽の小鳥が見つめていた。

ぐるりぐるりと首をかしげると

時折ちちちちと可愛らしく鳴き声をあげる。

その足元には、小型の真っ黒なカメラが括りつけられていた。

ジーッと機械音がする。

ちちちち

ジー

ちちちち…

と、小鳥は部屋からふと空に視線を移した。

真っ青な空を漫食するように、灰色な雲がもくもくと迫つてゐる。

動物の直観で何かを感じたのか

鳥は翼を広げてばさばさと羽ばたかせると、

空高く飛び立つて行つてしまつた。

「ええ、ぱぱぱぱぱぱ… とポットが沸く音がある。

近頃の雪洞は様々な紅茶にはまりだしていた。
今日はかつてのドイツ地方から取り寄せたカモミールティーだ。

部屋中に、甘い香りが漂つ。

「ふう、落ち着くなあ。ね、やつぱり蜂蜜の味があるでしょ? これ

部屋の外では、ぱぱぱぱと雨が降り始めていた。
窓に顔をくっつけてシャナが空を見ている。

「さつきまで晴れてたのにね」

真っ白なカップを手元で回しながら、雪洞もふと外を見た。

ぱぱぱぱぱぱ…

ぱぱぱぱぱぱ…

えああああ…

そんな平和なケイマ邸を取り囲むよつこ
雨脚は段々と強まって行った。

一方で優雅に食後の紅茶を注ぎながら、フランシスが口を開いた。

「時にお嬢様、被害者家族の方々とは
どのようなお話をなさつたので？」

雪洞の手が止まる。

「もう。休憩中ぐらい仕事の話はやめてよ

「申し訳ございません。
ですが、最も合理的かつ効率的にお仕事が進むような補助をブログ
ラムしましたのはお嬢様でござります」

フランシスはポットを置くと胸を張り、紅茶にも負けない甘い笑顔
を浮かべる。

「あーもう、すぐそれね。そろそろ本気で止めるわよ。」

「あなた」とさすめられる私ではあります

雪洞は肩をすくめると、諦めたようにカップを置いた。

「それもさうね

「向こうの言い分はね、今回発生した精神破綻者7名の発病原因は
篝のセキュリティミスにあるって言うの」

先ほどまでは打つて変わつて、雪洞が天才発明家兼若手社長の顔
つきになつて話はじめた。

「ねえねえ、篝つて実際どういつ仕組みなの？」

「口ラが恵永の裾をつかんで聞いた。

「俺、この屋敷に来て1年たつけど詳しく聞いたことはないんだよ
ね。」

「それはね、ええつと。篝といつのは自分の神経回路を流れる電流
をデータ化して…」

恵永がうーんとうなる。

助けを求めてフランシスを見た。

「あれほど繰り返し繰り返し100回以上も説明してきたのに、恵
永の頭はレシピ以外の知識を入れる要領は無いようだね。」

言葉とは裏腹にどびきりさわやかな笑顔が、怖い。

ひいっと恵永が身を強張らせる。

「一般人には理解できなくて当然よ、恵永」

くすりと笑つて雪洞が助け船を出した。

「やつね、簡単に言うとね。

籌はこの世界と別の、新たな世界のことよ。」

ふんふんと恵永が頷き、「口には首をかしげる。

「なんとなくわかるけど、どうにあるの？それは」

「この世界はいくつもの層が重なりあってできているの。
死後の世界、なんてよく聞くでしょう。

人間は体という入れ物に魂を入れて動いているの。

籌は、その魂の動きを電子的に「ペーパー」として、一つの世界で共存させるのよ」

「口にはふーんと言うと腕を頭の後ろで組んだ。
あまり深く追求しない性格の様だ。

「要は、別の世界で第一の人生を送れる道具なの」

「口では納得したように頷いた。

「口では

「つまり『夢』のような世界なんだね」

「やつ、『夢のような』世界なの

「でもそんなに簡単に、タマシイって抜き出せるものなの？」

「正しくは取り出すのではなく、『』じとののです」

フラン시스が言つ。

「もちろんリスクはあるわ。人の精神が体から分離して、平均3日で影響が出始める。

もちろん籌では、そんなことが起こらないように20時間以上の連續滞在を禁止しているけどね。

やはり肉体を一時仮死状態にするわけだから、自然なことではないの。

自然じゃないと云ふことは、何らかの不具合が生じて当然と云ふこと

と

雪洞は頬ずえをついてしばし瞳を伏せた。

「…」この世の理から外れたものは、かなりず壊れるようになつているのよ

雪洞が何を言つているのかよくわからなかつたが、その仕草が何故か妙に大人っぽくて、

二口ラは何だか見てはいけないものを見た気がした。

慌てて話をすらそつと話題を探していると、突如シャナが

「ほんぼりたんは、良いことしてるんでしょー？」

と声をあげた。

「え？」

雪洞がきょとんとシャナを見る。

「かがりは、みんなが楽しい世界！みんなが喜ぶ世界！」

「ま、まあ…」

「そうですよお嬢ー！」

恵永も加担する。

「篠のモツターは、『あの日の幸せを、再び』、ですよね！」

『幼き頃、誰もが一つ一つの夢を持っていた、なりたい自分を描いていた。それを宝物として確かに持っていた。時が経つにつれて、現実が過ぎ去つていくにつれて、この世界はそれを叶えてくれないと知る。そして自分はそれを叶える力が無かつたのだと、肉体の限界の前に諦めるしかなかった。

だけど違つ、精神は無限、誰もがまだ心には確かな願いを持ち続けている。

心の世界なら、人はどこまでも夢を見続けることができる——そう、幸せだったあの頃のように…』

恵永がうつうつと囁び泣き始めた。

「私は、私は初めてこれを聞いたときお嬢はなんと素晴らしい理念を、と感動して、感動して…うつうつ

「ちょっと恵永さん、何泣いてるの？」

「口うるさい丸くする。」

フラン시스が手を叩いた。

「おお、わが社のコンセプトをよく覚えましたね恵永。泣き落としまでつけて、密受けはばっちりですよ」

フラン시스は心からの賞賛を送っているようだ。

「そうです、籌は皆様が現実で諦めた夢を再び叶える場なのです」

「なんかすげえなあ、さすが雪洞様」

そんな様子を見ながら雪洞は「ははは」と笑った。

少し困ったように――――

「誰もが、幸せに……夢を……」

と呟いた。

「……参ったわねえ、シャナ？」

「まいったの？ぼんぼりたま、まいったの？どこか痛いの？」

「本当に参りましたね」

フラン시스が代わりに答えた。

「いやうちは皆様の『現実逃避』をお手伝いしてこますのに、あれつ

』とか篭の顧客だと名乗る数名の男たちが

『篭の利用によって家族に精神異常が起こった』などと高額な慰謝料を請求してきたわけですから。

呆れて物も言えません』

「現実逃避つて、フランシスさん」

「コラが苦笑する。

「で、でもお嬢の作った機械ですから、そう簡単に間違いが起こるわけないですよね？」

「もちろん常に過剰滞在が無いように監視アバターでチェックしてあつたわ。

よっぽどのハッカーかウイルスが無い限り、そのシステムに異常は来されないはずなのよ。

：まあ、証言上はそれが起こったということだけど。私のセキュリティソフトを越えるような、何かがね

「ふんふん」

明らかによく分かつていらない顔付きでニコラが、いつちょ前に相槌を打つ。

「ほんぼりたまより頭良い人なんているの？』

フォークを握りしめたシャナが苺を挿そと身を乗り出して言った。

「世界は広いのよ、シャナ

「ふーん」

淵まで転がった苺が皿から落ちると、赤い染みがじわあつとクロスに広がって行く。

わあつとシャナが声をあげた。

「彼らの滞在時間は？」

フランシスが真剣な顔付きで、手を額に当てている。

「1週間以内が3名、残りは約10日」

「…集団発生というのが気になりますね」

「やうなのよ」

雪洞は髪をかきあげて言った。

気持ちを落ち着かせるときの癖なのだ。

「黒幕がいるでしょうね。」

恐らく篭の長期滞在による精神異常は本当に起じた。

だけど、それはあくまで能動的なものよ、自然発生的なものではないわ。

何かしらの手段で監視をかいくぐつて、自ら、または他者によつて強制的に滞在させられたんでしょう。

今回の訴訟者なんて金で雇われた一般人に過ぎないわ。いくら積まれたのか知らないけど…家族を卖つたのよ

「なるほど」

フランシスは苺をつまみ上げ、クロスを拭いた。

「今回はなんとか、最低限の慰謝料に収めたわ。本当はびた一文払いたくなかったけど。

その代わり、関係者の篭居住権を永久剥奪してやったの。

だから、篭依存者による慰謝料目的の真似事は牽制できたと思うわ。もちろんもうこんな馬鹿な真似は私の篭でさせないつもりだけど、それでもまだまだ、似たような騒ぎが続くかもしないわね。大元を早急に締め上げない限り…」

もはや会話についていけない一コラが田を白黒させてくる。

「分かりました」

フランシスは手についた苺の果汁をペロリと舐め、にやりと笑った。

「対処、できそつ?」

「ええ、お任せください。いかなる時もあなたの剣となり、盾となれるようプログラムされてあります」

そしてポケットから取り出した小瓶の液を数滴たらすと、魔法のようにクロスから赤い染みが消え去ってしまった。

シャナが顔を輝かせる。

「兄さま、すーじーーー」

「見事なものですねえ」

恵永も感嘆する。

雪洞の顔にも、ようやく不敵な笑みが戻った。

「そうよね。私の執事だもの」

デザートの皿をシャナの前に置き直し、フランシスは付け加えた。

「私の計算で行きますと、そろそろ第一波が来るころでござります」

その言葉を待つていたかのよつこ

ゴンゴンゴンゴン

と、突如ドアを叩く音が部屋に響いた。

1・6(後書き)

シキ//『…シャナが苺を食べられて、ロボット的なヒビがつて消化あるの?』

キコ//『…モード?』

review · advice 常時募集しております。

シキ//キコ//

「お休み中失礼します！」

「」が食卓の大きなドアを開けると、メイドのシャーロット（Charlotte）が息を切らせ立っていた。

青いショートヘアが深緑色のメイド服によく映える、活発そうな女性である。

「やあシャーロット、どうしたの？ そんなに慌てて」

片手をあげる「」には田もくれず、シャーロットは一礼してすぐさま口を開いた。

「大変でござります、お嬢様」

「もう、シャーロットまで。今度は何の騒ぎ？」

ちえつ無視かよーと呟く「」を「お読みなさい」と言わんばかりに一睨みすると

シャーロットは広い廊下の先を指差した。

「籌で騒が…」

「騒ぎ。また都市改造計画に反対するモノか何か？」

それなら放つておいて良いわよ、と雪洞が手をふる。

「いえ、先日の騒ぎとは違つて、変なのです」

真剣な顔のシャーロットを見ながら、
ニコラが恵永に耳打ちする。

「トシケーカクの『デモなんかあつたの？まるで現実世界みたいだね』

「篳の原則は自由な生活だからね。人々が好きなように街を作つたり、改造したりできるんだ」

「自由なのに『デモ？』『デモ？』オウボウな政府に怒るやつでしょう？」

口ごもる恵永に代わり、雪洞はシャーロットから視線を逸らさぬまま答えた。

「自由は自由でも、共同生活であつて一人の世界ではないもの。そこには必ず相互作用が生まれるのよ。それによる意見の食い違いもね。

つまり衝突は多様性ゆえのもの、人が自由である証拠であり自然なことなのよ。で、シャーロット、どう変なの？」

「それが…赤くて変なのです」

「赤い？」

「変と言えばもともと存在が変ですがね」

フランシスを無視して雪洞が尋ねる。

「どう赤いの」

「なんというか…私が見たときには、画面一面が真っ赤で。カメラが故障しているのか、それ以上の解析もできないんです」

そう、と言うと雪洞はしばし何かを考え始めた。
「このところ続く一連の事件が頭を過る。

関係ない、わけ無いでしょうね。

「いいわ、とりあえず見てみましょ。フランシス

はい、と言う前にフランシスは壁に貼られた薄型モニターのスイッチを入れた。

細長い指の動きに合わせて画面が変わる。

『C - e s t l a v i e ! T u n e d o i t p a s . . .
ピッ

『アリエルカンパニーの魔法のステイック！限定色で本日発売…』

ピッ

『午後のニュースです。今日未明世界ロボット工学博士の…』

ピッ

一連の娯楽番組のあと、篝の中継モニターに切り替わる。
そして現れたのは、真っ赤な画面。

それは背後から光で照らされているかのように明るく鮮やかであり
まるで一枚の赤い紙が壁に貼られたようであった。
所々汚れたような毒々しい黒ずみがあり、

風に吹かれているかのように時折揺れている。

「さやあー！シャナこわい！」

シャナが声をあげて雪洞にしがみつく。

「なんだこれ？気持ち悪…」

「え、これ篝ですか？？カメラの…、故障じゃないですか？」

「」と恵永も氣味悪そうにそれを眺める。

そんな中、フランシスが淡々と言つた。

「火事ですね」

「火事！？」

恵永がすっとんきょうな声をあげた。

雪洞は黙つて目を細める。

「こちらの影をご覧ください。恐らくこれは先日サウスエリア第3都市に立てられた高層ビルです。
そしてこちらの左端にあります影は、サウスエリアを囲む海岸部の曲線と一致しています」

フランシスは振り返り雪洞を見た。

「サウスエリアにて大規模火災が発生していると見て間違いないで
しょう」

「つ、これが火災って規模なの？俺には町の影すら分からぬけど
…」

ニコラが肩を縮める。

「恐らくサウスエリア内部の中継映像回路は遮断されています。
その証拠に他の都市なら、ほら」

フランシスが指を動かすと、パッと画面が切り替わり一面の銀世界
が現れた。

優しい灯りが灯る可愛らしい家の周りで、白い息を吐きながら人々
が談笑している。

ノースエリアの風景だ。

「災害は行政システムで自己処理されるはずよ。
こんな規模になるまで消防隊員は何してるの？」

「それが、何故か全く危険信号が鳴らなかつたのですから、気づ

いた時には既に中枢部と連絡がとれない状態で…

作動履歴を見ましても、作動した形跡はありませんでした」

雪洞は眉をひそめると、しばし思考を巡らせた。

またこれは面倒そうね。

セキュリティソフトの異常と言い、治安維持機能の不調と良いただの事故が偶然に続いた、という可能性は低いわ。かと言つて辻褄を合わせるには、証拠が足りなすぎる

ちらりとフランシスを見やると、長い睫毛を瞬かせ黙つて前を見ている。
相変わらず何を考えてるか分からぬ顔だ。

主人の視線に気づいてか、執事はにこやかに「紅茶の御代わり、おつきしましよう」とカップをとつた。

「…そもそも本格的にハッカーの可能性が出てきたような、
滞在者の安否確認は取れてる?」

「ええと、ログイン者数が一気に減少していました。ですので、恐らく篭外へ、現実世界へ逃げたのかと思われます。

その情報もどこまで信用できるものか分かりませんが…」

「どうせしても、これだけ大規模にやられてしまつとセットし

かありますね

フランシスが赤い画面を眺めながら言った。

「リセット？ ゲームみてえ」

ひゅいっと口笛を吹いた二�の頭を、シャーロットが「この馬鹿つ」とはたく。

前述の通り籌では、行政、消防、警察などの自治業務がプログラムされたバー・チャルキヤラクターにより行われる。

住民は彼らに一定の提言権利を持つ代わりに、街で何事か起こった時の責任も自分たちで担わなければならない。

要は、現実と変わらぬ、もしくはそれ以上の民主主義が成り立つているのである。

しかし時折、あまりにキヤパオーバーな事態が発生した時のみ仮想世界の特権であるリセット 記録の消滅と再生 が行えることになっていた。

「無償でリカバーはできないわ。

ルールの無い自由は無い、その原則はなるべく守りたいの。秩序の無い世界は、混沌に向かつしかないもの」

雪洞はフランシスに言い返した。

「その前に原因をつきとめなきやー！」

「『うわくわくした顔で田を輝かせ、その隣でうつむいたえる恵永が顔を覗きめている。

ざあああああ

ざあああああ

一つ壁を隔てた向こう側では、バケツをひっくり返した様な雨が降っている。

しん、とした部屋の中で、滝のように窓を濡らす雨だけが流動し続けていた。

一同の視線が雪洞に集まる。

・不自然な精神被害者の発生
そして突然の治安維持システムの停止
どちらも自然に発生したのではない

誰だか知れないけど、この私に喧嘩売るなんて、いい度胸じゃない。

雪洞は煌々と燃える炎の映像を見つめた。

——これは真っ赤な挑戦状つてわけね……

そんな声に応えるかのように、それはやうりつと袖をゆりめかせた。

覚悟を決めたようにまだ熱い紅茶を一気に飲み干すと
「分かつたわ、とにかく行つてみてみましょ。」
「ありがとうシャーロット、戻つていいわよ」
と立ち上がった。

「え、行くつてど」「へですか？お嬢

恵永が慌てた拍子に足を思い切り椅子にぶつけた。

「決まつているでしょう、篤に行くのよ。いつなつたら直接見てくるわ」

「お、お嬢様が直接ですか？何があるか分かりませんし、システムの解析をされてからのほうが…」

シャーロットも慌てている。

「大丈夫よ、肉体は置いていくわけだから、よつほど無茶しない限り死ぬことは無いわ。

それにもう一つは、外部より内部の異常であるケースがほとんどなの。

それなら一刻も早く処置しないといけない。私じゃないとできないのだから、私が行くしかないじゃない。
それに…」

雪洞は不気味にやあつと笑った。

「「！」まで氣合」の入った輩がどんな面してゐるのか、見てみたいじゃない。

徹底的に証拠を探し出して、訴訟問題も含めて一気にカタをつけちゃるわ。

…売られた喧嘩は売り返さなきやね

「い、行つてらっしゃいまし」

シャーロットがか細く言つた。

「やうと決まつたら計画を立てなきや。やえーと行つてからまず都市部を確認して、整理して、解析してプログラムし直して。一日で足りるかしら。

明日は会議は入つてないはずだから、ああその前に学会にレポート出さなきやだわ、それは帰つてきてから考えよ」

「シャナも行くー！」

「俺も行きたい！」

シャナヒロもぱつと立ち上がつた。

「駄目よ、あんたたちほお・る・す・ば・ん。

子供にはまだ早いの。

シャーロット、コートを取つて。

恵永、腫れないうちに冷やしなさいね。

ニコラ、留守の間屋敷をお願いね。

そして「

雪洞は振り返つて執事を見上げる。

主人の椅子を引きながら、フランシスは柔らかな笑みを浮かべた。

「それでは参りましょう、お嬢様」

何してるんださう

こんな些細なことで

あんなに一生懸命かき集めて積み重ねた欠片を踏み砕いている

いつも あと一歩で君を傷つけて

それ以上に僕も傷ついて

結局

逃げてしまおうとしている

僕を許して欲しい

ぱちっ！

とこう音と共に、フランシスは目を覚ました。

目の前に飛び込んできたのは、見渡す限り何も無い草原、と、忘れ去られたような鳥居が一つ。

足元を見ると、直径2メートルもの大きな魔方陣がなぎ倒された草でミステリーサークルのように形作られていた。

そこjが籠の中と気付くのに数秒を要した。

そうだ、俺は確か、お嬢様が来られる前に、先に籠に入ることにしたんだ。

彼女の安全性が確保された、世界を作るために。

ようやく意識がはっきりと戻ってきた。

手元に戻る感覚を捕まえるように、フランシスはゆっくりと掌を握りしめる。

なんだ今のは…

なんだあの声は。

これが「夢」とこつものか

「夢」は人間ならではのものでは無かったのか

そういえば俺は時折「夢」を見る気がする
気がするけれど思い出せない

フランシスはぼんやりと、いつひな眼で宙を眺めていた。

胸元につけられた小型無線機から雪洞の声がした。

フランシスははっと我に返った。

今自分がどれだけ無防備な状態であつたのかに気付いてしまつた、と顔をしかめる。

「申し訳ありません。少々神経回路が混乱しておつましたようで」

フランシスはマイクに手を当じると、今度はしつかりした足取りで歩き始めた。

「ねずみじへーつとしてたわよ。何があつたの?」

「いえ。それよりお嬢様、篭の空間超越経路にも不調が無いか、調べておいて下せ」

「何? どうこうこと?」

篝の外、すなわち現実世界の篝管理室からフランシスの映像を見ていた雪洞がマイクに顔を寄せる。

「篝に精神が着地するまでの間、第三者の思考が流れ込んで参りました。何らかの混線が起つてはいるのかもしません」

「…ふうん。分かったわ。見ておく」

フランシスは「お願ひします」と言つて、きびきびと歩き続けて真っ赤な鳥居を抜けた。

しばらく道なりに歩いて行くと、突如下が見えないほど深い崖が現れる。

崖といつより、空中に浮かぶ島に乗つてはいると言つた方が近い。

そしてフランシスの居るその場所からは、更に四方八方に伸びる吊り橋がかけられていた。

篝には総勢30の街がある。

ここはいわゆる篝の入り口であり

島に繋がれた橋の向こうにて、4つのエリアに分けられた各街があるのだった。

つまりこの吊り橋こそが、篝の世界に続く道なのである。

フランシスは迷つことなく『ヒロシマ』と書かれた看板をつけた橋を見つけ

300メートルはあると思われる長い道のりを歩き始めた。

大人一人が通れるだけの小さな吊り橋は、

時折吹く風でぐらぐらと揺れる。

おまけに辺りに立ち込める真つ白な霧のせいで、前も後ろもよく見えない。

小心者はまずこの時点で怖気づくらしい。

しかしフランシスは、慣れた足取りで黙々と歩き続けた。

篝の中に入ると、なんとも言えぬ変な感じがする、とフランシスはふと思った。

それもその筈か、要は『幽体離脱』をしているのだ。

「ロボットの俺にも魂があるのか」

馬鹿な、と笑う。

「何?なんか言った?」

「いえ。それより、着きましたよ」

深い霧の中から、頬りなく地面に突き刺される一つのへさびと、それに繋がれた橋の先端が現れる。

その向こうに広がる光景に、フランシスは目を細めた。

「おやおや。これはまた」

街は燃えていた。

第3都市で火事が起つた、というよりも
第3都市が火事になつた、という方が正しい。

それくらい、街全体が一つの有機物の様に
煌々と真っ赤な炎を空に突き上げていた。

不思議とそれがとても静かであることにフランシスは驚いた。

「見えますか？」

「見てるわ」

雪洞がため息をつく音が聞こえる。

「いやあもう駄目ね。財産データも不動産データも。
住民には一からやり直してもらいましょう」

「住民は幸い脱出したようですね。」

焼死体、いや失礼、データが焼失した匂いがありません。

「うう。住民が居ないのなら周囲の酸素濃度を急降下させましょ」

「うう時に穴抜けルートがある仮想空間とは便利です」

酸素が無ければ炎は燃えない。

あくまで『自然』な消火にしたがる雪洞の言動に矛盾を感じながらも、

フランシスは出かけた言葉をぐつとこらえた。

「中心街はともかく、市街地にも食糧供給用の農作地帯があつたはずよ。そこは？」

フランシスはこめかみに手を当てると、ぴぴぴと瞳のカメラで炎の勢力を計測する。

「規模と風向から察するに、かるうじてそこまでは回つていません」

「私も行くわ。先に向かってくれる？」

「了解しました」

フランシスはぐるりと踵を返すと、市街地に背を向け歩き始めた。

それを追いかけるように、

ビビビビビおつ

と、背後から地響きの様に建物が崩れ落ちる音が響いた。

フランシスはようやく、島の周縁にある小さな村に着いた。

かつてそこは、自給自足の農業生活が営まれていた長閑な町だった。

酪農と葡萄の栽培で有名なその村は、主に昔懐かしの片田舎生活を求める人々が集う場所であった。

炎を逃れてぼつねんと回り続けている真っ白な風車とそれを囲む色とりどりの可愛らしい家々がかつての幸せな生活を思わせる。

フランシスの予測通り、村は至る所で黒い煙が上がっているもののかわいじて原型をとじめていた。

住民も残っているようだ。

しかし先ほどと違い、混乱する人々の声、泣き声、怒鳴り声があちらこちらから聞こえてくる。

騒がしい。

フランシスは不快そうに顔をしかめると、ぱさっと上着を脱ぎ捨て「お嬢様、とりあえず消火するので適当に消防車が何か送つてください」と言つた。

「わかつたわ。はい」

頬杖をついて画面を眺めていた雪洞が、手元のボードに何かを打ち込む。

すると、

「パッパーー」というけたたましいクラクションと共に、どこからか大きな消防車が数台現れた。

フランシスは手慣れた動作でそのうちの一つに乗り込むと勢いよくアクセルを踏み込んだ。

そして車ごと、逃げまどつ人混みに突っ込んでいった。

「ちょっと…被害を増やしてどうするのよ」

雪洞が思わず立ち上がり苦笑する。

「失礼、久々なもので足の感覚がどうも」

その後も豪快なハンドル裁きで村中を暴走した後、ようやくお田当てと思われる火の手の強い現場に着いた。

フランシスは颯爽と車から降り立つ。

突如現れた消防車を見つけ、小さな男の子がたたたつと走り寄るち歓声をあげた。

「うわあーしじゅづひづじやーーー。」

高額な料金の発生する籌に滞在する子供など、大方どいかの御曹司か何かである。

「これ、まーくん！」

と彼の祖母らしき人物が駆けつけるが、白髪の混じるその婦人もどこか高貴そうな立ち振る舞いだ。

「乗る乗るー僕が乗るって言つたら乗るのー。」

まーくんと呼ばれたその子供は、祖母の手を振り払つと地団太を踏んで騒ぎ始めた。

背後には炎が迫つてゐるといふのに、案外子供の方が肝が据わつてゐるのかもしない。

いかにも知能の低そうなな子様ですね、栄養素を脳の活性化に正当てた方がよろしいのでは

と思わず飛び出しかけた言葉を抑えて、
フランスは対女性子供向けの営業スマイルを作つて振り返る。

「もう危ないから、行きましょー」

「やだやだーーーしなり向でもできるひと言つたじやんー。」

ついに靴を脱いで放り投げ始めた子供を、女性がおろおろとあやし始めた。

そんな一人にゅうくりと細長い影が近づいて行つた。

そして すつ と小さな運動靴が差し出される。

海外の香水のよつな、爽やかだけれど甘い香りが漂い、子供と婦人は顔をあげた。

「ボク、ちゃんと掃いてあげないと、靴がかわいそうだらう」

フランシスは跪くと、少年の足に丁寧に靴を履かせた。

「いいいいいいいいいい、何してんのよナコ」

と、マイクから聞こえる雪洞の苦情をぴんと指ではじく。

一丁前にオーダーメイドの革靴か、具現化にも金がかかるだらうことは言わず、「

今度はうつとうと腰を抜かして見つめる老婆を向くと

「さあ、『』婦人も下がつておいで下れこ

と手を取つて立ち上がりせた。

「あなた様の白い手に黒いすすがついては私の立つ瀬が『』ませ
ん。

せっかく顔に似合わず小奇麗にならつておりますの。」

籌では恰好だけでなく、顔もオプションで変更することができるのです。

この機会に、是非いかがでしょつか？

100%イメージ通りの御顔になりますよ…」

「なんか最後の方おかしかったわよ。営業入つて無かつた？」

と騒ぐマイクを再度弾いて黙らせる。

終盤のたっぷり込められた無礼講にも気付く間もなく
フラン시스の甘美すぎる笑顔に、老婆は握っていた子供の手を離してまで

ぶんぶんぶんぶんつと首が折れんばかりに頷いた。

フラン시스は二コリと笑うと

「さあシェルターへ」

と一人を促す。

魔法にかけられたようにふらふらと遠ざかっていく一人の背中を見送りながら
フラン시스は段々とサディスティックな顔に戻る。

元通りに眉と目尻をあげると、炎に向き直つて言った。

「お嬢様、空気をお読みになつて下さい。

「こういう一つ一つの地道な宣伝活動の積み重ねこそが企業の生き残る道なのです」

「地道とこつよつむかやりー一番高額なオプション売りつけてるじやない」

そんな会話をしながら、フランシスは消防車のトランクを開けた。

そして決して軽くないだろう大きなホースを両手に抱え直すと、

燃え盛る炎に向けて勢いよく水を噴射し始めた。

並ぶ数台の消防車からも次々に水が噴射される。

二〇〇七

二〇三

がやがやがや

いつの間にか遠巻きに人だかりができるていた。

突如現れた美しい消防士に、拍手が起ころる。

フランスは振り返ると観衆に向かつて愛想よく微笑みかけた。

くらくらりと女性たちが倒れる。

貧血だ。

「被害者を増やすなー」

雪洞がメガホンを持って抗議する。

「不可抗力です」

5分、10分と消火活動が続く。

しかし一向に炎が収まる気配は無かつた。

「おかしいですね」

フランシスは顔をしかめると、どさつとホースを投げ捨てた。

そしてパンパンッと手を払うと

「すみません、お嬢様。やはり面倒なので、土砂降りの雨でもふらしていただけませんか?」

と不機嫌そうに空に呼びかけた。

「あーあ。もうわかったわ。『神の見えざる手』つと

もはや自然な方法では事を進められないと観念した雪洞は、EME

REGENCYと書かれたボタンを押した。

突如黒い雲があたりに立ち込めると、スコールのよつた土砂降りの雨が降り始める。

次第に赤い炎は灰色の煙へと変わつていった。

「あーあ。 最初からいひすればよかつた」

営業用とは分かつていても、自分以外に美しすぎる笑顔を振りまくフランシスを思い出し
ムカムカライラしてくる。

ガソッと拳でボタンを叩きつけると
フランシスの頭上から落ちる大粒の雨が勢いを増した。

少しきょとんと空を見上げてから、

「もう大丈夫です、完全に火は消えたことを確認しました。

いらして下さい、お嬢様」

と、満足げな笑顔で呼びかけた。

ずぶぬれな体などお構いなしに、珍しく心から嬉しそうな顔だった。

そんな笑顔を見ていたら何も言えなくなるだろ「ノホヤロウ。

恨めしげに画面を見ていた雪洞であつたが

「もう、しかたないなあ」

と言つとしづしづ立ち上がり、壁にかけてあつたコードに袖を通した。

「しようがない、行つてやるか」

* * * * *

一時退去命令を告げる行政ロボットの声に促され、人々がしづしづ現実世界へと戻つて行く。

波の様に押し寄せる群衆を搔きわけ、フランシスと雪洞は都市の中心部へと向かつっていた。

「ずいぶんと派手に燃えてしまつたけど、まだ何かあるかしり」

大きな頭巾を被つて顔を隠した雪洞が、少し心細げに言つ。

「人為的原因であるならば、何かしらの痕跡が必ず残つてゐるはずです」

「そう。徹底的に解析して犯人を見つけ出してやるわ。

そして私の貴重な昼食時間を削つた責任を、嫌というほど取らせいやらなきや。

まあ、ちよつと町の改造もしようと思つていたから手間がはぶけたけど」

とその時、目の前のフランシスの体が突如止まつた。

わやー！

と思い切り雪洞がぶつかる。

鼻を押さえて恨めしげに顔をあげると、フランシスは遠く離れたビルを見ていた。

瞳孔を拡げ食い入るように何かを見つめている。

何らかの視覚映像をズームし、解析しているようだ。

雪洞が同じ方向に顔を向けると、黒い影が窓にゅうりつと映り、ふつと消えるのが見えた。

「誰か居た……」つむぎを見ていた？

「追いましょう」

フランシスは片手で近隣の人々をつまみあげぬいぐるみのように投げ捨てる

雪洞の手を取つて走りだした。

雪洞は必至に走る。

* * * * *

しかしここに篲創設者が居るなどとまづ知らず、紛争地帯から逃げ出す難民のように

我先にと出口へ向かつていく住民たちに押し流され上手く前に進めない。

雪洞は運動神経が悪かつた。

「お嬢様、失礼します」

そんな雪洞をもどかしく思つたのか、フランシスは彼女をひょいと脇に抱えると、するすると器用に人の間を抜けて走り始めた。そして少し顔を歪めた。

「お嬢様、育ち盛りなのは誠に結構なことです、3か月前より1・8キロ増量なさっています。

身長が御伸びになつたことを考慮しても、少々増量が過ぎていませんか」

「フランシス、あなたね。この状況で言ひ方」と?

「どんな時であろうと、主人の体調管理は重要な執事の役割ですかいら」

「レディーに体重の事を言つのは失礼よ!」

「おつと、お嬢様はレディーだったのですでしたか。レディーとはもつとスリムな方々と思つておりました」

「私をレディーじゃなくて何だと思つてたのよ

「貴禄が出てきた若社長」

「あのねえ」

雪洞はフランシスの背中でため息をついた。

この緊迫した空気の中、氣を利かせた冗談ではなく本氣で言つていいのだから腹立たしい。

「とにかく帰つたら、運動メニューを増加します」

「私のことは私が決めるの！」

「それは結構なことで」*ジゼー*ます。

ですが、スリムなレディーになりませんと婿も迎えられません

「また、それ！？」

雪洞はあきれた声を出す。

「良き伴侶を迎える」とは結婚は子孫繁栄のために必要不可欠なのですよ。

執事は主人の先を見据えた上で必要な提言をしているのです。
それに度々お嬢様を抱える私の労力も削減され、一石二鳥で

います」

なんとか抗議しようと雪洞が口を開いたとき、フランシスがすっと
雪洞を降ろした。

「ああ、着きましたよ」

雪洞が見上ると、そこには巨大なロボットの足のような

ずんぐりとした灰色の建物が、空に突き刺さるよつとそびえていた。

今にも歩きだすのでは、と思われるような形のそれは
傾いた二つの塔が相互に支えあって建っている、なんとも妙な外観
だった。

「相変わらず変な形ね」

雪洞は建物を見上げて言った。

このサウスエリアは様々な芸術で溢れる街として有名であった。
特に都市部では、モダンアートに傾倒する芸術家たちが集つては
日夜自身の芸術作品を競合する洗練された都市でもあった。

この建物もまさに近代芸術のトレンドである『曲がる石』をモチー^フにしている、

と、この作品を作り、更にそれを高級マンションとして一般開放し
ていた大御所建築家が言つていた。

雪洞からしてみれば、同じエリア内に点在する他の不可思議な建造
物とこれがどのように違うのかよく分からなかつたが
サウスエリアに住む多くの芸術家たちにとつてそれは
『一世代遅れた様相で、周囲との調和を乱す』ものであつたらしい。

この巨大建造物は、莫大な予算を投じて完成させられたにもかかわ
らず
数ヶ月前から痛烈な苦情が寄せられた。

この『横暴』な作品の取り壊しを求める芸術家と、表現の自由を求める芸術家たちの間で数々の論議が行われ、

ようやく先日取り壊しの日時が決まったところであった。

「これ、この間やつと入居者の財産データを保存して、工事前の最終確認に入ったところよね。

誰が、こんなところに？」

包帯のように巻きつけられた『KEEP OUT』のテープをバリッと破ると

フランシスは無造作に投げ捨てて言った。

「さあ、お嬢様。準備はよろしいですか」

「OK。行きましょう」

カツン、と石で固められたエントランスに雪洞は足を踏み入れた。

もはや周囲にはだれも居なかつたが、目撃者が居たならこう言つたかもしだれない

「二人の後ろ姿は、体を失くした象の足元に、小さな生き物が無謀にも立ち向かっていくそれに似ていた」と。

人の消えた静かな街で

埃を含んだ風の唸り声だけが響いていた。

2 - 2 (後書き)

はたして3カ月前はどうのよにして雪洞の体重をフランシスは知つたのか ry

外観にそぐわざ内部は意外と単純な作りになつていていた。

一階のロビーを過ぎれば、螺旋状の階段がただただ上に続くばかりである。

「あの場所からあの角度で見えたといふことから分析からして、あの人方が居たのは7階の8号室です」

フランシスは声を幾分かひそめて言つた。

「エレベーターは何が起くるか分かりません。何かありましたら面倒ですから、階段で参りましょう」

雪洞は黙つて頷くと、後に続いて歩き始めた。

すると、フランシスは再び立ち止まって
「お嬢様、その前に靴を履き替えて下さい。それでは足音を消せません」
と、雪洞の赤いヒールを指さした。

「でも靴なんて持つてないし」

雪洞が口を尖らせる。

「執事に不備・不可能など許されません」

当然、と言つた顔で笑うと、フランシスはと胸元からピンクの運動

靴を取り出した。

「どうだ」

「貴方は秀吉なの」

どにしまつて いたそなもの、と呆れた声を出しながらも
どにか満足げに雪洞は差し出された靴に履き替えた。

雪洞とフランシスは一段一段静かに階段をのぼつていぐ。
廃虚ビルの中は勿論明かりも無く、足元も見づらい。
氣を抜けばすぐに転んでしまいそうである。

「お嬢様、おわかりでしょうがくれぐれも声は出さないでください
ね」

雪洞は再び黙つて頷いた。

一階、二階… 大会場のある四階を超えて五階、六階…

よつやく七階にたどり着くと、途中でついに体力が切れフランシス
に負ふわれた雪洞がそっと降ろされた。

薄暗く絵画の一つも無い無機質な廊下を、
一人はゆっくりと歩いていく。

雪洞は時折背後を確認しながら、壁づたいに部屋を回るフランシスに続く。

彼の合図に合わせ最後の部屋に入り口とした時だった。

カタン、

と小さな音が聞こえた気がして、
雪洞はふと後ろを向いた。

出口の見えないトンネルのような暗闇の先には、何も無い。

風かしら

雪洞が再び部屋に入ろうとした、
その時だった。

さつ と

視界の隅で何か黒い物が横切つて行った。

思わず「あつ」と声をあげる。

顔をしかめて振り向くフランシスのスーツを引っ張ると、
影の主も此方に気づいたのか慌てて走り去る音が響いた。

「追いましょう」

すばやく向き直ると、フランシスは少女を乱暴に抱ぎあげ

暗闇に向かつて一直線に走り出した。

影は更に長い階段をのぼり、最上階の一室に駆け込むとバンッとドアを閉めた。

それを追つフランシスが、一足遅れて乱暴にドアを蹴破る。

そしてそこに現れたのは　　家具も全て取り払われた無機質な空間だった。

人影どころか一切の影もない。

フランシスは居るはずの影を探すように部屋中を見渡すと、雪洞をどさりと降りした。

「胸が潰れて、苦しかった…」

「強く圧迫するほどの胸はいざれこませんので心配いざれこません。
それよりお嬢様、影が消えました」

胸を押さえながらフランシスを睨みつけていた雪洞であったが、
よつやく状況を確認すると
「消えたってどいつこいつ」と「…？」
と声をあらげる。

しつと端整な指を口元に当てる。フランシスは「ここの部屋に入ったところまでは認識したのですが」と辺りを見回した。

珍しくどこか腑に落ちない顔をしている。

「私の視覚データミスでしょうか」

「見間違いやないわよ、私も見たもの。仕方ないわね、わかつたわ。ここに何か手がかりがあるのかも知らない。

とにかく探してみましょ」

珍しく心細げなフランシスを見て気分を良くしたのか、今度は雪洞が先立つて颯爽と歩きだした。

探す、と言つても部屋には大きな窓が一つあるだけで、そこから差し込む光以外に部屋に残るものは何も無い。それでもわずかな痕跡が残つていなかと、一人は部屋の隅々まで丁寧にチェックしていった。

しかしあはり、何も見つからない。
足跡の一つも見当たらなかつた。

「無いわねえ。そんな突然人が消えるつてこと、ある?
ああここは篭だから論理的に不可能じゃないわね」

と、搜索に飽きた雪洞が大きな窓から地上を眺めていたときだった。

「お嬢様、こちらへ」

何かに気づいたのか、フランシスが雪洞を手招きしている。

「ここに何か、跡があります。」

フランシスが真っ白な壁の中央部を指さして言った。

「跡？ 部屋の装飾や改造はを所有者は許していなかつたはずよ」

壁を一面ぐるりと見渡すと、フランシスは手袋をはめた右手をそこに押し当てる。

バコッという音とともに壁が抜け落ち 　 というよりそれはもどある扉が開かれたように

大人一人分ほどの大きな丸い穴が現れた。

二人は思わず顔を見合わる。

中に入ると、そこには一転して雑多な、多くの物が散乱している煩雜な部屋が現れた。

「何よ、これ……」

あるはずのない部屋を見渡して、雪洞はただ驚く。

「ひんな部屋、設計図には無かつたわ」

雪洞に続き、フランシスが部屋へと足を踏み入れる。

と、
ツルリ

原始的な効果音とともに彼の重心を支える足が滑った。

「つと」

フランシスが猫のように体を曲げて体勢を整える。

「えつ！」と雪洞が振り向く。

良質な革靴は滑りやすい、加えて先程の雨で濡れている。普通の人間ならそのまま転倒していた摩擦係数だったなどと真剣に分析しながらフランシスが床を見ると、そこにはハガキ大の少し黄ばんだ厚手の紙が落ちている。

フランシスはそれをひょいと拾い上げた。

何も書かれていない。

ただのゴミか？

不満げにその真っ白な紙を裏返すと、突如カラフルな画像が現れた。

それは、ケイマ家屋敷の居間の写真だった。

「何これ。うちの『真じゃない』

雪洞は背伸びしてフラン시스の手元を覗き込む。

「厳密には『真ではなく、居間をレーダーで透視した映像を超薄型タブレットに映している』ようです」

フラン시스は食い入るようにそれを見つめ、人で言つ虹彩にあるスキャンモードを作動させた。

「何か残ってる?」

「人体データは それが篭内の指紋となる は付着していません。代わりに何かの纖維のようなものがかすかに。これは……」

その時だった。

「 動くな

二人の後頭部にヒヤリと冷たい物が押し当てられた。

ガチャリ、と弾を回す音がする。

銃。

それも、神経回路にそれなりの傷跡を残しそうな、ライフル銃。

「両手をあげて跪け」

背後からひどく冷たい声が響いた。

フランシスと雪洞は黙つて手をあげると、寄り添つように動く銃口に合わせ、ゆっくりと膝をついた。

「要求は何?」

雪洞の非日常的な低い声が響く。

「籌創設者、雪洞・F・ケイマ」

「随分と手慣れたようだけじ、ニニからどうするつもり?」

「その執事兼総取締、フランシス・ド・フィニステール」

ひどく感情の無い平坦な声だった。
微塵の動搖も、焦りも感じさせない。

同じく平静を装いながらも多少強張った雪洞の声と交互に
薄暗い部屋の中を木靈していく。

「町の管理センターを壊したのは、あなた?」

「…」

「それともただの通りすがりの強盗かしら?
それならいいからでやめておいた方が良いわよ。今なら見逃してあげ
る」

「……ひるむこお嬢様だな。この状況が分からぬのか？」

ぐつと銃口が押しつけられる。

「……あなたこそ、もう少し冷静になつたうぢつかしら。
あなたのよつてな無謀な輩ど、ひつりは何度も顔を会わせてこるのよ。
そして無残にも御縄に掛かつてく姿を見てきたわ」

「……」

「金田当てなら、命があるひつて逃げときなさい。
ひつひの執事の力くらい、ト調べしてあるでしょ」

雪洞はわずかに顔をそらしてフランシスを見る。

「動くな。撃つぞ」

「まあ、話だけでも聞いてあざるわ。

どちらにじつは褒めてあげる、これまで私たちを呼び出せたことを」

「普通に呼んでも来てもらえなさうだったから、少々工夫したま
でだ」

「つまり一連の事態もあなたの仕業には間違いないところ」とね。
そうなると、果たして単独犯かしづ……」

雪洞は犯人との接触時の重要性を理解していた。

「ついでときは、自分のペースに乗せられた方が勝ちなのだ。

さすが数々の修羅場を経てただけはあって、危機的状況でも頭はしっかりと冴えている。

心理戦になら自信があるわ、一気に元締めを暴いてやる。

「誰に雇われたの？これほどの腕がありながら、もつと良い生き方があるので無いのかしら？」

「お前には関係ない」

「もつたいないわ。私ならもつとつまへ貴方を使つてあげる

「…」

「いくら出されたの？それとも脅迫？」

かかつた！

「ぐぐり、と唾を飲むと、

雪洞は言葉を続けた。

「とりあえずその物騒な物を下してもうえるかしら。

籠内だから撃たれても死がないことは、あなたも存知かと思つけれど」

「…もう良いか？」

「は？」

銃口がガチャリ、と動いた。

「鍵の場所は？」

「なんですか？」

「箸の鍵だ」

「ちょっとあなた」

雪洞は苦笑しながら答えた。

「箸のシステムキーのことを言つてゐのかしら。

そんなもの何に使うの？

手に入れたところで、生憎そちらの人間には扱えない代物よ。」

箸を狙つた犯行か。

なんだ、いつもと同じじゃない。

もう良いわよフランシス、とこう合図を送りつつ雪洞が手を動かす。
その時だった。

「違う。 篪とその先を繋ぐ鍵の場所だ」

「なんですか？」

雪洞の声が部屋に響く。

「もう一度言ひ。

「篝とその先を繋ぐ、鍵を渡せ」

雪洞が口をつぐむ。

「先つて、どうこいつ意味かしら？ 篪の拡張システム、なら存在しないわよ。

これ以上広げるつもりもないもの。あつてももちろん教えてあげないけど」

「とぼけなくて良い。俺は知つてゐる

「何を知つてゐるですか？」

「お前が知られたくないことを、だ」

「…言葉遊びが上手いのね」

雪洞が時間を稼ぐ間、フランシスはできる限りの情報を引き出さうと

懸命に声の主を分析していた。

懸命に低めてはいるが、声帯は少年から青年への移行期特有のものだ。

犯人は未成年だ。

そして若干東方なまりの発音がまじっている
中東出身か？

とかく感情の無い声だ、心音に乱れは無い。

こういう状況に慣れている者に間違いない。
それも幼きころから訓練を重ねていると見える。
少女へのぞんざいな扱いにためらいもない。
かといって極端な憎しみも感じられない。

この類は個人的恨みでは無いな。

かといってただの刺激を求めた快楽犯罪者の類ではないだろう。

俺としたことが、お嬢様を危険な田にさらしてしまった。

執事としてはあるまじき行為だ。

まあ、あの方はこれくらいで怖がるような神経では…

と、フランシスが横目で雪洞を見ると、いつの間にか主人はひどく強張った顔をしていた。

「…お嬢様？」

なんだ、久々で緊張なさっているのか？

無理もない、お嬢様もまだ18だからな

これは悠長に構えている暇は無い、と再び思考を巡らせる。

それでどうするか

この体制から彼女を抱き寄せその反動で銃を蹴り落とすのに、大体
0・7秒

相手がどんなに俊敏に反応しても、神経信号が動きに繋がるまで最
低0・3秒、引き金から発射されるまでに0・8秒

通常ならなんら危険性を伴うことではない。

しかし問題は…

再び雪洞の横顔を見遣る。

その視線に気づいたのか、雪洞は左手をわずかに動かした。

行つて、の合図だ。

確認すると同時に、フランシスは口を開いた。

「お前もロボットか？」

その瞬間、背後でぴくりと体が動いた。

その一瞬の隙をついて、フランシスは風の様に姿を消す。

わずか1秒にも満たない間、部屋中に極度の緊張が走る。

慌てて少年が銃を抱え直すと、突如懐にフランシスが現れた。

鈍い衝撃と共に、銃もろとも腕をたたき落とされる。

バンバンッ！

響き渡る銃声とともに、少年が後ろに跳びのいた。

銃口から上がる煙にも負けない軽やかな動きだった。

フランシスはスカートの埃を払つて立ち上がる雪洞に手を貸しながら少年を見つめた。

若いな。14、5と言つたところか。

身長173cm、左利き。

「遅いわよ、フランシス」

「申し訳ありません。

しかし何分、ここに来た時から銃口を向けるまで彼には人の気配が

ありませんでした。

その分析に少々手間取つてしましました。

そして先ほどの画像データに付着していたのは人工皮膚特有のもの。

恐らく彼は…」

「俺はロボットではなんかじゃない」

少年はゆらりと立ち上がると、眼光を光らせて雪洞をぎらりと見据えた。

かすかに窓から差し込む月の光が少年の細い髪にそそがれる。

雪洞は田を見開いて少年を見つめた。

灰色の髪をした茶色い瞳

褐色の肌

そして額には煙草を押し付けられたような火傷の跡が残っている。

必死で記憶を手繕り寄せる。

「誰だろう、居ないわ、こんな知り合い。

「多少体を直されただけだ」

少年は自嘲気味に口角をあげる。

その時、窓から差し込む月の光が少年の右腕に注がれた。

先ほどのフラン시스の攻撃がかすつたのだろう
すっかり首元の伸びたロングTシャツの袖が破け
中があらわになっている。

フラン시스と雪洞は、それを見て思わず目を見開いた。

少年の腕は、灰色だった。

肘から手首にかけて、鉄の部品が組み合わされたような機械が覆い
それに皮膚を張り付けたような、なんとも異様な掌。

「お前と同じだ、雪洞・F・ケイマ」

「…なんですか？」

ぴくり、と雪洞の体が動く。

「失ったものを補いたい。一度と同じ物は戻つてこないとわかつて
いるのに。

要するに繰り返しているのだろう、お前も」

一瞬、雪洞が息を飲んだのが分かった。

「お前に何が分かる…」

雪洞がぎゅうつ、と拳を握りしめた。

「繰り返してなんかいない、補おうともしない」

雪洞の感情 おやじく怒りに近いもの を抑えようとも震える声は恐ろしく低い。

「約束を果たそつとしているだけだ。

それ以上は、何も望んじやしない」

「じゃあそれは何だ？ 隨分大事そうに抱えてるじゃないか」

「黙れ！」

何を言つてこのだらつ

失つた物…？

お嬢様の四肢は生まれた時の姿のままなはず。

フランシスは分析しきれないデータ処理に戸惑つていた。

よくわからないが、お嬢様もひどく憔悴している。
とにかくもつとデータを得なければ

「少年、何を知つている？ 黒幕は誰だ？」

少年はフランシスをちらりと見た。

「これは別件。いつの依頼主はそこまで考えつけない」

少年はくるりと両手の銃を回す。

「二重依頼？」

一つの依頼主でつける傍ら、もう一人本当の依頼主がいるパターンだ。

そして、少年はポケットから小型の機械を取り出した。

ボイスレコーダーだ。

かちっとボタンを押すと

『約束を果たそうとしているんだ。それ以上は何も…』
ブツツと言ひ音と共に、雪洞の声が切れる。

「確かに頂いた。いざとなればそのお人形を壊しても心のたがを外させてもらう予定だっただけど、案外単純だつたな」

しまった、こいつ… 声を私の声を…！

雪洞ははつとして

「私の声紋から分析しても無駄よ」
と声をあらげた。

「やつ、使るのは声じゃない」

少年は胸元に手を当てる
とんとんと叩いて言った。

「籌の力ギはー！」にあると、あの人は言っていたろう？

雪洞・F・ケイマ

鋭い緊張感が

一瞬にして部屋を駆け巡る。

同時に、雪洞が何かにつりのめされたように後ずさった。

「まずいですね。

彼の言動の真意は分かりませんが、精神世界である籌の声紋とは
感情や思考の反映と言いかえられます。なんにせよ

フランシスは声をひそめて言った。
しかし

「…お嬢様？」

雪洞からの返答は無かつた。
指示も無い。

主人の様子がおかしい。

しかし、それを気にする余裕は無かつた。

田の前の少年は、一瞬でも田を逸れかねば田の前から消えてしまつた。全身から、まさに飛び立とうとする動物の「」と張りつめた氣迫が感じられた。

「行つて……」

雪洞がかすかな声で呟いた。

「早く……」

その叫びを聞くか聞かないかのつゞり、
フランシスは地を蹴つた。

地に積もった埃が煙の様に舞い上ると

それがゆらめくより早く、フランシスは少年の背後を取つた。

少年は微塵も体を動かさず、田を右から左に動かしただけだった。

やつた！

次の瞬間には雪洞の脳内には、執事が少年を締め上げるこつもの絵図が鮮やかに浮かんだ。

ぐつと両手を握った雪洞であったが、

大きく開かれたフランシスの腕は次の瞬間、少年の体に届く前にむなしく空を切った。

「…？」

「甘いな」

崩れる体勢のまま声の方向に顔を向けると窓辺に足をかけた少年がこちらを見下ろしている。

「敵を捕まえるには、まず逃げ道を抑える。

そんな基本も、習わなかつたの？」

表情一つ変えずそう言い放つと

少年は羽を拡げるよう腕を拡げた。

そして

ゆっくりと階中から落ちて行った。

「まさか…」私は20階よ…？

バンツとフランシスが床に腕を付いて立ち上ると同時に
雪洞も窓辺に走り寄る。

ひやりと冷たい窓枠から、落ちんばかりに身を乗り出して下を見る
が

そこにはただ、灰色の大地が広がるだけであった。

2・4（後書き）

『籌の健はここにあるとあの人は言つていただなんづ~』

少年は自らの足首を指差した。

雪洞・フランシス『あ、アキレス健・・・・・(。・・・)』

「くそ！」

何も残らない、まっさらな大地を見ながら
雪洞は拳を窓枠に叩きつけた。

「逃げられた…」

「逃げられたわ！」

どこか犯人を、軽んじて見ていた。

これはその甘さが生んだ失態だ。

もう一度、ガスッと鈍い音を立てて掌を打ちつけると

悔しそうに顔を歪ませ、雪洞は膝から崩れるように座り込んだ。

すっかり項垂れたまま、言葉をこぼす。

「…鍵を、取られたわ」

篭の鍵

感情と心音を競合させて編み出されるその人特有のリズム、それが

確かに籌のセキュリティキーである。

この世では私とフランシスしか知らない筈だ 最も、籌の鍵とはいわゆるセキュリティキーのこととしかフランシスは認識していないだろうが

あんな少年が、そんな情報を手に入れているわけが無いとはながら決めつけていた。

絶対、なんて絶対無いのに。

そして何より…

真っ白な壁に、

うつすりと血の元じんだ手を這わせる。

雪洞は焦点の定まらない目でそれを睨みつけた。

問題は、あの少年の

まるでその『先』を知っているかのような言動。

まさか籌の経緯を知っている…？

なぜ作られたのか、その本当の目的を

そして何より、

あの人のこと…

「失ったものは一度と戻つてこないのに」

「繰り返しているんだろう」

耳元で少年の声が木霊する。

抑えていた重く生ぬるい感情がこみあげてくる。

吐きそうだ

雪洞は髪をかきあげ、ぎつと歯をきしませた。

もう一度ぐつと
拳を握りしめる。

そしてそれを叩きつけようと、腕を振り上げる。

その時、背後からそれよりもっと大きな掌がすっとそれを包み込んだ。

「出血しております。

手当て致しますので、お待ちください」

フランシスは胸元から白いハンカチを取り出すと、口こくわえてびりと破く。

手慣れた動作でそれを雪洞の小さな手に巻きつけると
「今消毒液を出しますので」と今度は逆側のポケットから小さな箱
を取り出した。

相変わらず、いつぞやの猫型ロボットが持ったと言われる四次元ポ
ケットの様だ。

雪洞は狐につままれたように

次々と拡げられていく応急処置道具を見ていた。

掌から伝わる体温と、除々に収まっていく自分の鼓動を感じる。

「セキュリティキーならすぐに変更すれば済みます」

フランシスは小瓶から数滴をガーゼに染み込ませながら言った。

「声紋を盗まれたところで、それを並大抵の人物が再現できるとは
考えられません。

お嬢様より知能の高い人物なら別ですが、
この世界ではそつ多くも存在していないでしょ？」

そうして、ガーゼを傷口に押し当てた。

ちりつと焼けるような痛みがする。

「ひとまずは、火事の原因を探りましょ。
それが今、一番合理的で効率的な行動です。

「今夜はこちうに泊まり込みになりますね」

慰めているのか、はたまた何も考えていないのか
特に優しい声色を作るでも無く
かと言つて咎めるでも無く
フランシスは淡々と言つた。

雪洞は黙つて、魔法のよつに巻かれしていく
白い包帯を見つめていた。

* * * * *

「しかし、サウスエリア防衛第7小隊、ステイーブ・ウォータード
佐であります！」

栗色の短髪をびしっとワックスでまとめ、金色の肩当てを当てた青
い軍服の男が
雪洞に向かつて敬礼する。

「お疲れ様。大佐、街の様子はどう?」

「イエス、マイロードー。
異常、ありません!」

もう一度胸を張ると、男らしい低い声でウォーター大佐は答えた。

「… そう。街ではびりやけり、火事があつたよつなのだけど？」

「イエス、マイロードー・

そのような報告は、届いていません！」

異常、ありません！と彼の後ろに並ぶ数十人の部下がそれに倣つて敬礼する。

「… 分かったわ。

大佐、街に破損箇所がたくさんあるみたいだから軍を派遣して復興を手伝つてあげてちょうだい

イエス、マイロードー！

ともう一度大声で答えると、ウォーター大佐はエンブレムの付いた黒い帽子を被り

ぐるりと後ろを向いた。

「諸君！これから街に向かう！

本日の任務は街の復興である！

Aチームはまず西地区に…

昨日の家事などまるで無かつたかのよう
街は太陽に照らされている。

サウスエリアの中心部にある駐屯場で
雪洞はウォーター大佐が熱く指示を飛ばしているのを見ながら
首をひねっていた。

どうやら本当に、自治システムには情報が行つてないのね。

でもシステム自体は故障していない。

どうこうとかしら…

わいわいわいわいわい

真っ白な灰が積もった街に向かつて
軍は一糸乱れず行進していく。

「大佐！」

と、舞い上がる土埃の中から一人の軍人が走ってきた。

「どうした、ジョブ少尉！」

ぱたぱたとゆらめく軍旗の下で、
小柄なジョブ少尉は
ウォーター大佐は雪洞に敬礼すると、
右腕を差し出した。

「異常な電磁波を発生しているものを、発見しました！」

危険だ！今すぐ爆発物処理班に…」

「なんだと！」

血相を変えて飛び出そうとする大佐を制し
雪洞が少尉に向き直った。

「見せて」

はつ！ と差し出された手の平の上には

小さな黒い物が置かれていた。

彼の掌より幾分小さな、歯車だった。

雪洞は目を細めると、それを太陽にすかす。

エネルギー特有の光反応が、起ららない。

「これは…」

本物だ。

どうしたこと?

ここは精神世界、脳を動かすエネルギーの動きを反映させただけの世界。

現実世界の物質が、何故ここにある?

「少尉、どこでこれを見つけたの?」

「はっ！」

繁華街の、遊園地内であります！」

少尉は胸元から地図を取り出すると、大きなバツ印を指差した。

雪洞はそれを食い入るように見つめると
あつ と声をあげた。

街の中心に位置するその場所は
フランシスが割り出した出火場所にとても近い。

「少佐、見つけたのはいつ？」

「正午0時、13分、現在より20分ほど前になります！」

「そう……。ありがとうございます。戻つていいわよ

イエス、マイロードー！と再び敬礼すると

大佐と少尉は肩を並べ軍へと戻つて行つた。

雪洞はもう一度

掌に載つた歯車を見る。

なんだろう

すゞく、重たい…

その時、体に着いた埃を払いながら
フランシスが戻ってきた。

「おかえり。一通り自治体システムにチェックを入れたけど
どこにも問題は無かつたわ。

そつちは？あの少年のデータは何か残つていた？」

いえ、と首を振ると

フランシスは舞い上がる土煙の中行進する軍隊を眺めながら言った。

「一通り街中を探して参りましたが、それらしきものは何も。

それよりお嬢様。すっかり忘れておりましたが、このタブレット」

フランシスはぴつ

昨夜彼を滑らした写真を取り出した。

「屋敷の写真以外に、何かのデータを保持しているようです。開示しようと試みましたが、何をやっても拒否されます。

強力なセキュリティがかけられてるようすで

フランシスが言い終わらないうちに、雪洞は

「なんですかー!? 貸してー!」

とひつたぐるよつこそれを奪つ。

不可解な火事

あるはずの無い歯車

危険な少年…

私の篝に、何かが起つていてる。

敵の言動が予想外だったとはいっても、何にしてもみすみす篝のセキュリティキーを渡してしまった自分の軽率さも相まって雪洞は苛立つていた。

「 $dV/dt = Im - (\nabla a + \nabla b) \cdot gn_a - \dots - x - \dots$
 $(t - x) = A \cos(t - \dots)$
」
公式を……」

雪洞は自分がこれまで得た知識を総動員して
貝殻のように頑なに閉じたデータの開示を試み始める。

隠れるように背を向けて黙々と解析している雪洞の手元を覗き、「む
と、
見ないで」と拒絶されてしまった。

主人の命令違反は原則タブーである。

フランシスはそれ以上の詮索をやめた。

しかし、

フランシスと雪洞の間に、これまで一度も『隠し事』といつものほ
無かつた。

少なくとも、彼はその認識していた。

なんだかんだと文句を言しながらも雪洞は自分に対しても真っ
すぐ向き合ってきた。

それに対して、昨日からどこか雪洞の様子がおかしい。

- お嬢様は何か隠されている…。

なんだこの不快な感覚は。

そんな主人の様子を為す術もなく見つめながら、
フランシスは拭え切れない初めての感情に困惑していた。

どれだけ時間がたつたのだろう。

駐屯地にある時計台が、ボンッと一時を告げる鐘を鳴らす。

と、同時に

カシャン…

何かがはまつたような音が響いた。

あつ、とフランシスが声をあげ
雪洞の手元を覗きこむ。

『コード、カクーン。

セキュリティ、カイジヨシマス』

ガシャガシャガシャンッ

突如かみ合った歯車が回り出したように

縛りから解かれたタブレットが
雪洞の小さな掌の中で動き始めた。

焼け野原と化した町並みは先程まで大規模な戦争が行われていた扮装地帯かのように閑散としていた。

建物の影に敵が潜んで一矢から銃口を向けている

自らの足音だけが聞こえる静寂の中、少年はかつての感覚を思い出していた。

少年はポケットから超空間無線機を取り出すとビームに連絡する。

「終わりました。」

「そうか。報酬はあとでな。」

ブツツとこつ音とともに乱暴に回線が切られた。

「…。」

少年はしばし無線機をじっと見つめると、ぽいっと放り投げ

「ああ、疲れたあ。」

と、ドサッと倒れ込んだ。

「ふああ」

のんびりとした声であぐびをすると、
バサッと両腕を広げて寝転がる。

三田円がたの細くつりあがつた田じりがゆっくじと下がる。

少年の顔つきは、先ほどまでとはうつてかわった年相応の、もしくはそれより幼いものに変わっていた。

「うちの方は別にどうでもいいよね。」

ターゲットとコンタクトをとれとは言われてなかつたから聞いたら怒るだろ?な、

依頼主はヒステリックみたいだから。

さて、行かなきや…。

しばし空を堪能した後、歩こうと動いた少年の腹部に

ズキッ・

と鈍い痛みが走る。

どうやら先程のフランシスの攻撃を完全にはかわしきれなかつたようだつた。

あの執事相手に無傷では済まないか…。

それにしても、あの執事には驚いたな。
まるで同じ顔じゃんか。

少年は眉間にしわを寄せ、痛みに顔をゆがませながらゆっくりと歩いていった。

町はずれに行くと、そこには空に届かうほど高く積まれた瓦礫があつた。

それは家屋の破片であつたり、車のドアであつたり、たまにみられる不明な歯車を除いては現実世界のそれと同じものが殆どであつたが一つ異なるのはそれらが無臭のことだつた。

——どうせ再現するなら中途半端に手を抜かなかつたらいいのに……まあ、どうでもいいけど。

誰も居ない世界の果てで無機質な山を見上げ少年はぼそりと呟くと、ふと真っ直ぐに銃口を見つめてる先程の少女の顔が思い出していた。雪洞たちが街の修復を始めたのだろう。

遠くの市街地で修復ロボットが発動されたらしい、サイレンが鳴つた。

その音で我に返った少年は瓦礫の山を仰ぎ、タタソルとリズムよく登つていった。

少年はリズム良く瓦礫の山を登つていく。
が、どうやら足場が悪かったらしい。

がくつと体が回転すると少年はお尻から地面に落ちた。

追つて落ちてきた瓦礫が彼の顔に当たる。額から少し血が流れた。

彼は袖でそれを「ゴシゴシ」と拭いてみたが、そんなことで血は止まるわけもなく、

顔にくつきりと赤い線ができてしまった。

「あ…痛い。お腹も痛い。

お尻もいたい。絶対青くなってる。

顔も痛い。顔は傷になつてもいいけど、お尻が一生青かつたらどうしよう。

これじゃあ、いつものワガママな依頼主と一緒に嫌だなあ…。

少年は立ち上がりつぶらふらと歩き始めた。

と、田の隅に何か黒い物が見えた。

それはミイラ化した遺体であった。

「君は…」

はつと氣づいたような顔をし、少年は手をポンとたたいた。

「友人のリオン君? 久しぶりだね。

死んだんだね。ご愁傷様。成仏するんだよ。」

少年は膝を抱えて座り込むと、手を合わせた。

「あ、おばさんにお悔やみにわなきや。」

彼は座つたまま電話を取り出した。

「あ、もしもし？」

「はい、此方……」

電話にてたのはリオン本人だつた。

「あれ？ リオン。 なんだ生きてるんだ。 ジャあね。」

それだけいうと彼は一方的に電話を切つてしまつた。
くるつと死体に向き直ると、

「で、君はなんで死んだの？」
と話しかけている。

勿論死体からの返答は無かつた。

「ま、いつか。」

膝をポンポンと叩いて少年が立ち上がつた瞬間、ポケットの電話が
なつた。

ディスプレイをみると『リオン』と書かれていた。

「なに？」

少年は機嫌が悪そうな声で答えた。

「『なに？』じゃねえよ。

寧ろお前が何なんだよ。」

「はあ……。だから何なの！？」
「いや、だからお前がだな」「用事ないならさうね。」

サラリとこうと、彼は電話を電源から切ってしまった。

「バイバイ。」

小さく手を振つて死体に別れを告げると、少年は『じやいじや』と足場が丈夫そうな箇所を探し再び登り始めた。

ある程度まで登ると、

「ふう」

といつたんため息をついてから、

少年はおもむろに両手を突っ込みガシャンッと掻き分けた。

ガラガラガラ…

と歯車が落ちていく音がして、現れたのは少年の半分ほどある空間の裂け目であった。

三田円型のそれは、空にぱつぱつと穴をあけたようにならかに向っている。

相変わらず、変な出口。

途中一度だけ振り返り後ろを確認すると、少年は潜るよつて亀裂に入ると姿を消してしまった。

青い海に白い砂浜。

カシャリ、カシャリ、ヒシャッターを押す音と、誰に向けるでもなく「きやはは」とはしゃぐ声がする。

その日は夏は海水浴を楽しむ人々で満杯になるはずの海辺が一面貸し切られ

大手企業の広告撮影会が行われていた。

ばしゃっと水しぶきの音とともに振り返る、太陽の様な笑顔の少女。それを囲む人々からは時折感嘆の声がもれた。

ユリシス・セバスチャン（Ulysses·Sebastchan）は電話を切ると、撮影を終え戻ってきた長身の少女にガウンをかけた。

「お疲れ様でござります。アリエル様。」

アリエル・アンダーザシー（Arielle·Underthesea）はテーブルに並べられた飲み物を手にとると、執事の差しだしたサングラスをかけた。

「ユリシス、彼から連絡は来ましたか？」

「はい、たつた今セキュリティーキーを手に入れたとの報告がございました」

「そうですか。これで準備は整いましたわね」

アリエルはつっこりと微笑むと「あの方に感謝しなければなりませんわね」と言った。

「御言葉を返して申し訳ございませんが、アリエル様、突然現れるように無礼講な態度の男性を信頼するのは、いささか危険であると思われます」

「まあ、セバスチャン。その様に人を疑つてはいけませんよ」

アリエルはユリシスの顔を覗き込んだ。

「申し訳ありません、アリエル様。

しかし、主人の危険遭遇率が1%でも残る限り安全対処に勤めるのが私の役目でございました。

しかし、アリエル様のおっしゃる『人の理』も新たに理解する必要があると感じます。応用能力が高まりますまで今少しお待ちください

頭を下げるセバスチャンをサングラスに映しながらアリエルは答えた。

「良いのです、セバスチャン。こうして人は学んでいくのですから。そしてもう一つ、あなたの辞書に付け加えておいてください。

『The ends justify the means.』

目的は手段を正当化する…私はこう解釈しています。
目的には手段を選ばない、利用できるものは有難く利用させて頂け
ばよいのだと」

アリエルが口角をあげたその時、中年の男が手を擦りながら女に近づいてきた。

「いやあ今日もお綺麗で」ぞいます、アリエル様。
この度はお忙しい中我が社のプロモーションにご協力頂きありがとうございます」とぞいました。今日のCMは3ヶ月後に…」

アリエルは立ち上がり、「いらっしゃ光榮ですわ」と男の手をとつた。

はじけるような笑顔、白いガウンから覗く白い肌、胸元から覗く花柄の水着に男は鼻の下を伸ばしている。

男から夕飯の約束を誘いを受けながら、アリエルはスケジュールを確認する。

そしてヨリシスの耳元で

「例の手筈を進めてください、今夜中に」と囁いた。

3・2（後書き）

セバスチャンの髪は赤です、もちろん。

「これ……」

ぶつんっと音がして暗くなつたかと思つと

タブレットの画面に再びケイマ邸の風景が現れた。

「同じじゃない」

「お待ちください」

フランシスと雪洞が食い入るよつに見つめていると、突如画面に映る部屋のドアがギイツと開いた。

「動画ーー？」

「この間に撮られたのーー？」

「これは録画ではありません。

おやじく……」

空いたドアから入つて来たのはシャナだつた。

パタパタ……と部屋を走り回る音がして、
追いかけるようにシャーロットが部屋に入つてくる。

『 むう、ビリビリしたのシャナちゃん。』

お姉さんお仕事があるのみ、やはり、出でること。

お嬢様がもうすぐ帰つてきますよ』

シャナは部屋の棚に隠れぬとい、やまうきみうじシャナを探すシャーロックアーチャーを盗見で

キヤッキヤと笑つてゐる。

シャーロックはそれによがつかなことわかつた。

『 むう、この部屋じゃなにのかじりへ。

遊び相手が居なことすべりれなんだから……。

シャナちやーん…』

シャーロックは部屋を出て行った。

雪洞とフランシスは顔を見合せた。

「これは、今現在の屋敷の様子ですね。中継映像です。

一体何のために、そしてどうしてセンサーをかぶべつたのが…

しばしの沈黙が流れ、雪洞は思考の渦に懸命に自らを沈み込ませる。

- 精神被害訴訟

篝の不調

社長の訪問

少年の奇襲

屋敷の映像

センサー…

センサー…?

ぱきんっ！

と頭の中で、何かが音を立てて動き出した。

その瞬間、すべてがパズルのよつに

次々と組み合わせれ

やがて一つの地図の様に、言葉の地図を作り上げる。

「や、ひれたわ……」

雪洞が突如、声をあげた。

「戻るわよ、フランシス！」

急に血相を変えて走りだした雪洞を慌ててフランシスが追いかける。

「一体どうこうことですか？」

雪洞は走り続ける。

「…あのタブレットが落ちていたのは偶然じゃないわ、必然よ。

普通では開けられないデータが入れられていたのも。

一枚目の写真はフェイクよ。

問題は、私がタブレットに触れて、セキュリティのかけられたデータを開示したことだつたんだわ。

なかなか開けられないデータ、それ自体が罠だったのよ。

「開きそつで開かないデータ…なるほど」

フランシスも雪洞の思考についてこいつと必死で頭を巡らせる。

「お嬢様に解析させる、つまり長時間タブレットに触らせるところ」ことが狙いだったわけですね。

不審な少年との接触後なら尚更、お嬢様は解析に躍起になりますね
「そうよ。そしてそこには、私の指紋を読み取るセンサーが埋め込まれていたはずよ」

フランシスは手元のタブレットを開ける。

かすかではあるが、言われてみればそれらしき物が確かにある。

「やつして私の指紋を読み取って、屋敷のセンサーを解いたの！」

「なるほど…忘れていたが、やはりこの人は頭が良い。

と、心底感嘆しながらフランシスは少し尊敬の眼差しを向けた。

しかしそれは、同じく難解な論理を組み立て、かつお嬢様の言動を予測できるほどの

高い頭脳の持ち主で無いと仕掛けられない罠と云ふことだ。

「ですが、そこまでして屋敷の映像を送る目的は？」

「…思い出して。一連の訴訟から始まり、不自然な籌の不調。

ダメ押しにセキュリティを一時的に壊す、おかげで私たちは

「まんまと籠に連れてこられたというわけですか」

「アリよー。」

体力の無い雪洞が早くもはあはあと息を切らし始める。

「つまり、私とお嬢様が、一時的に屋敷をあける状態を作るため、
とこいつことですか。」

それでは、留守を狙つた窃盗といふことですか？

それならわざわざ、」のような映像を送りつけてくるメリットな?

これではまるで、せっかく出て行つた我々の帰宅を促すかのようでは
ないですか！」

フランシスが困惑した声をあげる。

「…まだそこまでは分からないわ。

だけど、私たちを追いだして、帰宅したてに何かを仕掛けてくるつ
もりなのは間違いないわ」

「あの少年は？

籠のセキュリティーキーも絡んできましたし、

彼が何やら不可解な言動もしていたのも気になります

雪洞は一度口をつぐむと、苦虫を噛み潰したように顔をゆがめる。

「…知らないわ。

とにかく要は、思い通りに踊らされたわけよ！」

「お嬢様、首謀者の田星はつこいらっしゃるのですか？」

「決まってるじゃないー！」んな悪趣味なことするやつ、一人しかいないわ！」

と、雪洞がフランシスに振り向いたときだった。

画面に映る屋に再びシャーロットと二コラが現れた。

『おい、入れて良かつたのかよ？』

『仕方ないじやない、どうしても余つまで帰らないって言つんだもの。

大丈夫よ、今回はお一人なようだし。』

ひそひそと話す二人の背後から、若い男が顔を出した。

『よひしきでしょつか?』

『あー申し訳、ござりません、どうぞお入りください。

ただいまお茶をお持ち致します。手伝つて、二口か。』

『お、お!』

あ、ビリビリゅうくつ

一人になつた部屋に入つてきた男は、真中におかれた大きな来客用ソファに座つた。

男の顔を見たフランシスと雪洞は、思わず息を飲んだ。

男は赤い髪をかきあげ

部屋を見渡すと

ゆうべつとこからを見あげた。

『お帰りをお待ちしておりますよ。

フランシス・ド・フィニーステール』

「コリシス……」

二人は同時に声をあげた。

「やつぱり、アリエル！！

あの冷血女、今度は何をする気…？」

画面の向こうで何かを物色するように辺りを見ているコリシスに向かって雪洞が叫ぶ。

「しかしこれで合致しました、常人では組み立てられないようなセキュリティ、巧妙すぎる罠…

お嬢様と同レベルの頭脳の持ち主といったらアリエル嬢くらいしか

「…」

「一緒にしないであんなヤツ…！」

その時だった。

部屋の隅から、ひょこつとシャナが顔を出した。

『お姉さん?』

先ほど隠れていた棚に、そのまま入っていたよつであった。

シャナはたたたつと走り寄ると、ユリシスを見上げた。

『よつ! やーー、ほんぼりたんのお家へー!』

ユリシスは一瞬、むつという顔をすると、

優しくほほ笑んで言つた。

『これはかわいいお嬢さん。』

はじめまして。

ユリシス・セバスチャンと言つます。

…あなたが、フランシスの妹さん?』

『そうだよ!』

シャナはほんぼりたんが作つたんだよー!』

コリシスは目を細めると、しばし何かを考えた後シャナを手招きして言った。

『よろしければ、』主人が戻るまで私と遊びませんか?』

「シャナ!—ダメ!—」

雪洞が悲鳴に近い声で叫ぶ。

『いいの!—?』

シャナが顔を輝かせ、促されるままコリシスの膝に乗つた。

コリシスは手袋のまま、シャナの頭をなでる。

「いこつ…何をする気だ?..?」

そつか、と雪洞は顔を青ざめて呟いた。

「アリエルは学会でシャナに会つてゐる、

何か仕掛けてもおかしくないわ…』

タブレット越しにユリシスを見つめるフランシスを置いて
雪洞は再び全力で走り始めた。

3・3（後書き）

その時だった。

部屋の隅から恵永が現れた。

シャナとのかくれんぼの途中、置いて行かれたようだった。

恵永「……。」

コリシス「……。」

「一ノリは屋敷の一室で、精神の抜けたフランシスと雪洞の体の番をしていた。

「ちえつなんだよ口タのやつ。

親切心で言つてやつたのによつ」

ゴコシスに出すお茶を作るのを手伝おつとつて、また喧嘩したらしい。

5つ年上のシャーロットが最近どうも氣にならひこ一ノリは、何かにつけて彼女について回るのだが、

その度に粗相をしては彼女に叱られる日々が続いていた。

「どひせ回じ味なんだから、茶葉なんて大匙も小匙も一緒だひつが。

あんなに怒んなくつも…」

「一ノリは椅子に座つて足をぶらつかせながら、ふくつと頬を膨らませた。

ダメって言われてるけど。

「あ一つまんない。おれも篤行つちやおつかなあ。

…そしたらあいつ探しにくるかな

何を想像したのか、ニシシシッと笑う。

そして椅子から軽快にピヨンッと飛び降りると、
そろりそろりと「Do not touch」と書かれた標識のある
ガラスのドアに近づいて行つた。

そつとドアに手をかける。

と、

扉の向こう側後で寝ていた2人がガバッと起き上がつた。

「わあっ！」

フランシスと雪洞は顔を見合させ、現実世界に帰ってきたこと確認
するように頷いた。

「あ、御帰りなさい雪洞さん！」

驚いた拍子に転んだ体を起して、ニコラが慌てて声をかけると

「ああー！」良かつた無事だったのね。

「そこで大人しくしてなさいよ。」

と、雪洞はシールドの解除ボタンを押してカプセルを開けるや否や部屋から飛び出して行ってしまった。

続けてフランシスがカプセルから出てくる。

「あ、フィニーステールさんもお帰りなさい」

「コラの呼びかけに手で応え、雪洞の後を追つ様に走つていったフランシスであったが

出口でふと立ち止まつてぐるっと振り返ると

「お前はまだ篝に入れないと言つただろ？」「コラ。

後で私の部屋に来なさい、御仕置きだ」

とだけ言つて走つて行つた。

嵐のように去つて行つた一人の足音が遠ざかるを聞きながら、コラはしばし目を瞬かせていたが、はっと我に返ると

「げえっ、ばれた。」

と顔をしかめた。

* * * * *

雪洞が長い廊下を走っていると、厨房から出てきたシャーロットが通りかかった。

「お嬢様、お帰りなさいませ！」

あのう、先ほどお密様が…」

「シャーロット…」

雪洞はシャーロットを見つけると、駆け寄って両肩を力強く掲んだ。

「大丈夫！？ ユリシスに何もされてない！？」

「えー…ええ…」

雪洞はほっと息をつく。

「何かされるつて…やはりそんなに危険な人なのかな？」

いつも馬鹿にしているように見えたから、少し軽く見てしまったのかも。

やはり勝手に入れてはまずかっただろうか…

少ししゃん、とじてシャーロットが主人の顔を見ていると、すぐさま

「シャナはー?」

と尋ねられた。

「あ、それが、また居なくなつてしまつたんです。

どこかに隠れてこると想つので探し行いつと想つていたのですが…」

それを聞いた雪洞はぐつと口を一文字に結ぶと

「分かつた、ありがとう」

と再び走つて行つてしまつた。

少し遅れて息を切らしたフランシスが現れる。

シャーロットを確認すると、壁に手をついてまおつと息をついた。

珍しく乱れた彼の姿にシャーロットは思わずドキッと胸が高鳴る。

少し顔を赤らめて、シャーロットは尋ねた。

「あ、フランシスさん。籌の方は大丈夫でしたか？」

「ああ、なんとかな」

「それは安心致しました…あの、今お嬢様が血相を抱えて走つてい
かれたのですが

何かあつたのでしょうか？」

「ああ…厄介な客が来たもんでな。また詳しく説明する。

それにしても…」

ふと立ち止まって、フランシスは耳をそばだたせた。

- 何かがおかしい

現実世界に戻つたときから、屋敷の異変を感じていた。

まるで何か、目に見えない細い糸が屋敷中に張り巡らされてるよ
うに、ピーン、と空気が揺れている。

通常の人間では感知できないだろうくらいの、じく微かな高音の電
子音が鳴り止まない。

- 何かを仕掛けているのか、ユリシス

かすかな悪寒が背筋をなぞる。

シャーロットの視線などまるで気に留めることなく、フランシスは雪洞と同じ道を走つて行つてしまつた。

フランシスの背中を見送りながら、シャーロットがため息をつく。

「もう行つちやつた。相変わらずお一人とも忙しいなあ。

恐らくコリシス様の居る居間に向かつたのだろう。

あれ？でも私、コリシス様が来たと言つたかしら。

…どうして、コリシス様が来たとわかつたのだらう。

ちよこんと首をかしげたシャーロットであつたが、

「まあ、の方たちに不可能なことは無い。か。

と納得したよつとふつと笑うと

「わかりました、どびきりの紅茶をお持ちしますねー！」

と二人の背中に向かつて声をかけた。

しかし彼女の言葉が、彼らに届くことはなかつた。

後に彼は悔むことになる。

この時なぜ振り返って一言、「来るな」と言つてやらなかつたのか
と。

雪洞が最後の扉を開くと、見慣れた壯麗な廊下が現れた。

——見えた！

あの角を曲がれば、客間だ。

ようやくたどり着いた地上の光にほっとしながら、雪洞は走る。

「はあ、はあ……広すぎるのよこの屋敷！ 誰だ設計したのは」

無論彼女である。

しかしそんなことを考える間もなく、急なカーブに体勢を崩しながらようやく目的地点へと到着した。

ゴシック調の扉を見上げる。

——待つててね、シャナ。

私があなたたちを意地でも守るから、

一度と大切な人を目の前から消したりしないから……

雪洞が、少し錆び付いた金色のドアノブに手をかけようと手を伸ばす。

そのときだった。

ガツ、と、後ろから何者かに腕を掴まれた。

「つー

思わず身をこわばらせ振り返ると、大きく肩を上下させてこいつを睨んでいるフランシスだった。
ところどころ汚れた燕尾服が、ここに来るまでの壮絶な過程を物語つていて。

「なんだ、フランシス。驚かないでよ

——ちつ、もう来たのね。

雪洞はバツが悪そうに手をそらした。

彼女も今回のコリシスの訪問がただ事ではないことに気づいていた。フランシスのように高周波を感じることはできなかつたが、野性的直観からか屋敷に起こっている異変にも無意識に感じていた。

だから、彼を置いてきたのだ。

「…お嬢様、お待ちください

「なによ、フランシス！」

フランシスは雪洞を無理矢理振り返らせ、息を整えて言った。

「すでにお分かりかも知れませんが、潜在的な危険性が高い状況です。

ゴリシスからと思われる不審な電磁波が発せられております。ひとまず私が話を聞いて参りますので、お嬢様様は別室にてお待ちください」

「なんですよ、いやよ！私の密よーー？」

雪洞はフランシスの手を振り払った。

「主人が使用人を守らなくて、何を守るのー！」

「お嬢様に万一のことがあつたら、誰がこのあと彼等を養うのですか。私が行きます」

「ダメよ、やめて

「お嬢様、子供の我が儘を言つてはいけません

「我が儘ってなによ！」

「あなたは数兆の金を動かす大企業の経営者なのです。『ご自分の抱える責任を自覚なさい』

フランシスの鋭利な視線が突き刺さる。

恐らく彼は、本気で”社長”的の保身を案じているのだ。

彼の顔はKAGARI取締補佐そのものになっていた。

そして彼女の非合理的な行動がどうやっても解せぬ、そういう顔だつた。

「ううとき、彼が人間ではないことが便利なようで虚しい」と悉く感じる。

彼の言つことは正しい。

それでも——

「嫌

「お嬢様……」

「（）は、私の社長としてのプライドなの」

——約束したのだ、誰もが焦がれるような世界一の会社を作ると

雪洞はだらりと下ばた拳を、ぎゅうっと握りしめた。

「それ」

あなたに何かあったら、私はどうすればいいのよ

そう言いかけたときだった。

ドスッ

と鈍い音がしたかと思うと

雪洞は目の前が真っ暗になつた。

後頭部にフランシスの手刀が入つたのだ。

ガクッと倒れる雪洞の体を支えると

フランシスは近くを巡回する警備ロボットに「医務室にお運びしろ」と命令した。

フランシスは立ち上がり、彼の伸長をゆうに超える大きな扉に向かい合つ。

バキバキッと拳を鳴らすと
不敵な笑みを浮かべた。

「さあ、行こつか

ギイッ…と、重い扉が開かれた。

「大変お待たせ致しました」

フランシスが部屋に入ると、コリシスがソファに座つて優雅にこちらを見ていた。

シャナはコリシスの膝を枕に寝息を立てている。

「コリシス様、うちのシャナが大変御迷惑を…」

「いえ、お気遣いは結構です。私もこの様な可愛い妹が欲しいものです」

コリシスはシャナの頭を撫でた。

「ありがとうございます。お誉め頂き私も光栄です。しかし、彼女は遠慮というものを知るべきですね、シャナ、お客様に失礼ですよ。起きなさい」

優しい声でシャナを諭すが、ぴくりとも動かない。

「シャナ…」

そつと面つづけでフランシスはシャナを抱きかかえようと近寄った。

「ですから、気遣いは無用だと申し上げた筈です」

コリシスはお気に入りの伸縮自在のコンパクトステッキを胸ポケットから出し、ショットと伸ばした。

その先端で近寄るフランシスを、どんと押し返す。鈍い傷みと共にフランシスがよろめく。

「おつと、そんなに力を加えたつもりはなかつたのですが失礼しました」

ユリシスがポンポンとステイックを叩く。

「…懐かしい品をお持ちですね」

フランシスも胸元をほろいながら笑みを浮かべた。

「ええ、昔話をするにはちょうど良いかとお持ちしました。まあこれは、先日アリエル様が開発されたニユータイプなのですが…」

ユリシスもについつと笑つと、朗々とその性能について語り始めた。

手元のわずかな動きを読み取り、しなること鞭の「」とし、

指先の微細なタッチから増幅される先端の破壊力はナイフの「」とし

：

——よくもまあ

とフランシスは思った。

その高性能のステッキは、彼の主人であるアリエル嬢の会社から販売された大ヒット商品だ。

変幻自在な機能を持ちながら洗練されたシャープなフォルム、しかし一方でその開発に隠された血塗られた背景を背負うそのステイツ

クは

まさにアリエルの本性そのものを現していた。

雪洞より3つ年上のアリエル嬢は、飛び急を重ねた雪洞の同期かつライバルでもある。

田舎娘丸出しの雪洞の一方で、常に最新のブランドに身を包んだ可愛らしいアリエルはいつも蝶々花よともてはやされてきた。

雪洞は彼女が嫌いだつた。

といつのも、色香で周囲を騙しては次々と毒牙にかけていく彼女の本性を知っていたからである。

しかし、「いけすかないヤツ」と思いながらも当初は大して気にも止めていなかつた。

一方でアリエルは、常に自分の一步先で周囲の称賛を集める雪洞をいつも悔しそうに眺めていた。

何故、知能も美貌も併せ持つこの自分よりあんな幼児体型の田舎娘がちやほやされているのか…

異常なまでの嫉妬心がアリエルに沸き上がつていた。

一人の仲が目に見えるほど劣悪になつたのは、ちょうどアリエルがこのステイックで一大センセーションを巻き起こしたころからだ。

表沙汰にはなつていないが、その伸縮自在の変幻ステイックは、何

を隠そアリエルの元恋人の発明品であった。

彼は秀才の集まる雪洞たちの学校で物理学のトップに君臨する期待の星であり

何より、当時から理解者の少なかつた雪洞の貴重な友人であった。

天才には天才同士しかわかりあえないこともあるのだろう、いつも一人で教室のすみにいた雪洞の隣を、彼はいつからか一緒に歩くようになった。

そんな一人に対し周囲は、「天才同士の最強コンビ」と一層の関心を寄せたのであった。

そんな彼の様子に異変が起じたのは、卒業研究の迫る最終学年のことだった。

「ねえ、雪洞は卒業研究何にするの？」

「…人工知能よ」

「えー!? そりやまたなんでそんな壮大なテーマを」

分厚い物理学の本を肩にかつき、少年が雪洞を見た。

「ちよっとね、やりたいことがあるの」

同じく分厚い教科書を両腕に抱えた雪洞が答える。

「ふうん。それが何かって、聞いても教えてくれないんだろ?」

「うん。成功するまで、誰にも言いたくない」

少年は笑つて雪洞の小さな頭を本でポンポンと叩いた。

「はは、そういうと思つたよ。…お前に俺の手助けなんか必要ないだうけど、なんかあつたら言つてくれよ」

「うふ、ありがと。そういうシンレイは？」

「俺は、どこまで機能性を濃縮した小型機器を作れるか、限界に挑戦したいんだ」

シンレイと呼ばれた少年は、分厚い眼鏡の下からまっすぐな瞳で前を見据え、はつかきとした声で言つた。

「そして利益とかなく、社会に普及させたいんだ」

「ははは、シンレイらじこいね。…シンレイならできるよ」

この頃から起業を本格的に考えていた雪洞は、無償で社会貢献を行いたいといつシンレイを少し眩しく感じた。

俺も、天下の雪洞に言われたら出来る気がしてきたよ——

シンレイも屈託のない笑顔で笑つた。

その後、言葉通りシンレイは不可能とまでいわれた100もの機能を僅か10cm足らずの金属に集約するという一大発明を成し遂げた。

おまけに社会性も実用性もあるこの大発明は、学校始まって以来の功績として表彰されるだろう——と、誰もが思った。

各メディアが集まる卒業発表会で、その超高性能機器を手に現れたのは

シンレイと——アリエルだった。

一斉にたかれるフラッシュの中、口下手なシンレイをサポートするように、無邪気な笑顔でアリエルは口を開く。

「これは、私と友達のシンレイ君が一緒に考え、協力して作り上げたものです」

ね、シンレイ、とアリエルが彼の指をなぞった。すっかり魂を抜き取られたような顔でシンレイは答えた。

「はい……僕とアリエルの、共同制作です」

数々の質問が飛び交う中、雪洞はただ口をあんぐりと開けてそれを見ていた。

——そんなばかな！

あの機器は、シンレイが一人で、血のにじむような努力を重ねて作

つたものだ！

そんな雪洞をやひり裏切るよひ、アリエルは言った。

「私たち、これを新たな生活補助グッズとして発売したいと考えております。ね、シンレイ」

「うん…僕はこれを、商品化します」

いつのまに瞳でシンレイが頷いた。

雪洞は耳を疑つた。

――バカなバカなバカな！

利益とか商品とか、あんたの一 番嫌いな言葉だつたじやない！

雪洞は出演者席から立ち上がり声を張り上げた。

「どひしちやつたのシンレイ！

崇高な工学発明を金のために行つべきぢやないつて、いつも言つてたじやない！」

慌てて周囲から宥められる手を振り払い雪洞は叫んだ。

「そんな女のために、信念を捨てたの…？そんな馬鹿だったのあなたは…？」

すると、それまでずっと見ていたシンレイが顔をあげて雪洞に言った。

「雪洞…僕の気持ちは、君にはわからないよ」

これは後から分かったことだが、アリエルは奥手な彼をあの手この手で誘惑した後、発明家なら絶対口を割らないはずのメカニズムを枕元で聞き出したとのことだった。

ついで、共同起業の話を夢物語のように説いて聞かせ、現在まで続くアリエルの会社を立ち上げさせたのだった。

雪洞の起業に先手をついての、雪洞への明らかな挑発だった。

シンレイがアリエルに利用されている、それは内部事情を知る誰の目にも明らかだったが
一度捕まえてしまえばもうお手のもので、純朴なシンレイなどひとたまりもなかつた。

シンレイはその後、人が変わったように金をアリエルにつぎ込んだらしい。

全財産と、世纪の発明特許を横取りされた彼は、次第に憔悴し、その後自ら命を経つた、と風の噂で聞いた。

苦虫を噛み潰したような顔でフランシスに一連の話を説明しながら、雪洞は

「自業自得よ、あの馬鹿…」
と言つた。

こつしてこの一件は、アリエルという少女の美しさがもたらした悲劇の一端として人々の記憶の片隅にしまわることとなつた。

これは余談になるが、この話を聞いてフランシスは、なにかしらまだ残つているような主人の表情を不審に思いこの件について極秘に調査を進めた。

そして実際のところ、元々の原因は他でもない雪洞にもあったことが判明した。

シンレイは雪洞が好きだった。

卒業の迫る日、彼は出来上がつた発明品を手に、雪洞に想いをつげた。そしてあっけなく、振られてしまう。

氣落ちするシンレイのもとに現れたのがアリエルであつた。

アリエルは優しい言葉を巧みに操りシンレイの心の隙間に入り込んで行く。

それでも元は堅気な科学者、なかなか心を開かないシンレイだったがアリエルの一言を聞いて呆然と立ち尽くした。

「知ってる？ 雪洞つて、恋人がいるのよ。

人工知能の研究も、その人に捧げるんですって」

「どうりで」

ユリシスの声でフランシスははつと我に返つた。

「肝心要の雪洞・エケイマ様の姿が見えないようですが?
私は彼女に会いに来たのです」

ユリシスがステッキをぐるりと回して縮めると、
胸ポケットに閉まつた

。フランシスは左胸に手を当て

「大変申し訳ありません、主人はただいま心身ともに調子を崩して
おりまして
別室にて休養中でござります」

と頭を下げる。

「それはそれは」

ユリシスは何かを見透かしたように、フランシスを見つめた。

「確か今日は、裁判の日でございましたね。

学会でも話題にのぼつておりましたゆえ、存じておりますよ。
籌のセキュリティに欠陥がありましたそうで」

「欠陥の有無につきまして田下探索中でござります。

大きな声では言えませぬが、世界規模のわが社ともなりますとあの手この手で莫大な財産に近付こうとする輩が居るものですから。この世界ではいつも事が単純ではないことを、お分かりでしょう」

お宅のような小規模経営が時折羨ましく思われます、とフランシスは微笑んだ。

「…順調に経営が進んでいらっしゃるようで何よりです。しかしあまりに多忙なスケジュール、いくら有能社長と言つてもそこは少女、ついに倒れましたか」

コリシスは憐れむように言つた。

「おつとその点は、責められるべきは雪洞様ではございませんね。私などは企業経営と芸能活動を両立なさるアリエル様の一挙手一投足に細心の注意を払つておりますゆえ、ここ数年我が主人は風邪の一つもひいておられません。

主人の体調管理は、執事の役目でございましょう」

フランシスはぐつと言葉に詰つた。

体調管理どころか、先程主人を殴つて気絶させた張本人である。

言い返さないフランシスを見て、コリシスの言葉はさらに続く。

「しかしいくら体調が優れぬとは言え、客人が来ているのにたかが

同じ敷地内、顔も出さぬというのはこれいかに。

世界規模の顧客をお持ちな経営者としては、大層な無礼講ではありますか。

そんな脆弱なトップが率いる会社なら、つぶれてしまつのがオチで

しちう

どうだ、と言わんばかりの顔である。

「申し訳ありません、言付けは私が承りますので」

言葉とは裏腹に強気な態度でフランシスは言い返した。

「…」の度は誠に申し訳ありません。しかしながら、裁判にしろ御訪問にしろ、急でございましたためご了承ください。
私が承れない後用事でしたらまた日を改めて、
次は双方の都合の良い日に…」

そう言つてフランシスは背広の裏ポケットから手帳をとりだした。

「貴方は、言葉が通じないのでですか？」

いい加減じれてきたようにユリシスが苛立たしげに声をあげる。

フランシスは手を止めてユリシスを見た、

彼は膝に頭を乗せていたシャナを抱え直すと、不気味に笑みを浮かべた。

「シャナちゃんは可愛いですね。言つとも奥く聞くし…
ふふふ。いや…本当に可愛い」

「シャナを離して下さい。

彼女は今から勉強の時間なのです」

フランシスが歩み寄る。

「勉強なんかしたくないよね？女の子は可愛ければいいのだから、シャナちゃんは十分だ」

「シャナ、私は馬鹿な妹は嫌いですよ」

「君の『』主人様は、どうしているのかなあ？」

ユリシスは寝ているシャナに語りかける。

「シャナ、フルーツタルトがあるから起きなさい」

「『』主人様に会いたいねえ」

「シャナを、起こして下さい」

「ああ……雪洞様に会いたいなあ

あえなければ私がアリエル様に叱られてしまう」

フランシスの伸ばした手がシャナに触れようとした時だった。

ユリシスの右手がゆっくりとあげられた。

そして -

バンバンッ！

キーン、という耳鳴りとともに
鋭い痛みが頬に走る。

フランシスがゆっくりと顔をあげると、
ユリシスの右手には微かな煙をあげる、小型の銃が握られているの
が見えた。

「……寧に消音機能までついた、エアガンだ。

ところによれば発射されたのは銃弾ではなく、高圧で圧縮された空気。
しかし、旧時代のそれとは殺傷能力が桁違いである。

じくらロボットでも、あたればそれなりのダメージだらう。

フランシスは身動きひとつせず、正面からユリシスを見据えていた

「氣は確かか？」

「ふふ、少しでも動いたら撥ね飛ばしてやうと思つたものを」

ユリシスが再度ゆつくつと引き金に指をかける。

フランシスの右耳からひびきと人工血液が滲む。

・
ひづ

ギリギリ逸らすこともできないのか、下手くわが…

フランシスがじりつと足を動かす。

「おおつと、動かないでくださいね。可愛い可愛い妹さんを私が頂く」とになってしまいますよ」

ユリシスは左袖からも銃を取り出すると、フランシスに向けた。

——こいつ、ついに狂つたか

フランシスが思つより早く

ユリシスは微塵の躊躇もなく引き金を弾いた。

バンバンバンバンバンバンッ！—

矢のように鋭い空気の軌道がフランシスの髪をかすめていく。

これほどの痕跡を残せば、後から言い逃れはできない。

無論、監視カメラにもしつかり映像として保存されているはずだ。

突然過ぎる

直接攻撃

——「いつ…何がしたい？」

「頭は確かか？」

いくら音を消しても、すぐに防犯ロボットが来るぞ。
それとも、ここを死に場所に選んだのか？」

すっかり感情が顕になつた顔で
フランシスが睨み付ける。

「口の減らない方ですね、私は捕まりませんよ

全く臆する」となく、コリシスは再度銃口を向ける。

「お前、本気で俺に勝てると思つていいのか？」

答える代わりに「ヤリと笑つと、

コリシスは

「楽しみにしていてください、面白いものを見せてあげますよ」

と、言つた。

・面白い、もの。

わざわざ訴訟を起こして篝に火をつけ我々を呼び出して
更に奇妙な少年を使って屋敷の写真を撮るなんて面倒なことをして
まで

行おうとしている何か

そもそもセキュリティシステムに侵入したのはここからか？

仮にも雪洞のライバルと言われてアリエル嬢なら不可能ではな
いかもしない

しかし何かが足りない気がする

そう言えば、あの不可解な電子音

あれも仕掛けの一いつことなり

これだけの愚行も

あながちハッタリでもないかもしけないな——

「生憎ショリーは嫌いだが」

フランシスは言った。

「きっと好きになりますよ。魔法のように
消えてなくなりますから」

——
一 消えるだと?
何を?

そして再び、
ユリシスの指が引き金にかかるのが見えた。

バンッ!
とこう音より早く
フランシスは手元にあつた椅子を引き寄せる。

無惨にも犠牲となつた真つ赤な椅子が
紙吹雪のよあに粉々にくだけ散つていく

「そんなもの無駄ですよー！」

コリシスが再び引き金に指をかけた
その瞬間

飛び散る破片に一瞬氣をとられたコリシスの懐に、
フランシスが飛び込んだ。

ひゅあっ　　と風音が鳴ったかと思うと
地を抉るようなアッパーがコリシスの顎に直撃する。

バキッ

と鈍い音がして、コリシスはシャナもろとも倒れこんだ。

「こいつなつたらこちらも実力行使と行こい」

頭上からフランシスの恐ろしく低い声が聞こえるが
体が動かない。

「社会の序列どころか力の差も分からないよつだな」

ぴつ、と顔についた赤い破片を弾き、フランシスはつづくまのコ
シスを見下した。

「そんなに幼女が欲しいなら、主人に作つてもうえ」

更にユリシスの腹部を蹴りあげる。

ユリシスの両手からカラーンカラーンと銃が落ちた。

「かはつー。」

「何を企んでるかしらんが
ネタばらしの時間まで待つてやるつもりはない。
さつさと吐いてもらおうか。」

これまでまだ可愛いものと目を瞑つてきてやつたが
少々おいたが過ぎたな。

「いいでお炎を据えとこいやる」

フランシスが袖もとに忍ばせた短刀でユリシスの肩を突いつとした

ときだつた。

コリシスは自分の下敷きになつているシャナをガシッと掴み胸元まで乱暴に引き寄せた。

そしてフラン시스に向き直ると

「これが見えませんか！」

と叫んだ。

「なつ、ー。」

フランシスの動きが一瞬止まる

ゴリシスはすかさず胸元から新たな武器を取り出した。

ぱちぱちっと青い電流の走る棍棒である。

「…」

「はははは！」

田の前にシャナの体をちらつかせられたびにビリしても一瞬行動の遅れるフランシスは
ゴリシスの怒涛の攻撃を避けるので精一杯だった。

「ほらほらほらじつしましたか、先程の勢いは！」

ゴリシスはいくらフランシスに劣る機能と言えど腐つても世紀の天才と言われるアリエルの作った超高性能ロボット
そこらの人間よりはよっぽど戦闘能力も高い。

ハンデがあるとは言えかのフランシスを追い詰めるほど俊敏に、

右へ左へと棍棒を振り回していく。

「で、社長には会わせていただけ…」

ユリシスは体勢を崩したフランシスの手を蹴りあげる。

短刀が空を切り、はるか向こうでカシャンと落ちた。

「まさか？」

ユリシスは顔を近付け、フランシスに笑つてみせた。

しかし目は笑っていない。

フランシスはユリシスを睨みつけた。

「…無理だと言つたら?」

「貴方の妹君がどうなつても知りませんよ

ユリシスは彼の左腕の中で、だらりと両腕を下げ眠っているシャナを見遣つた。

——くそ、防犯ロボットは何している
監視力メラは？

苛立たしげにフランシスが天井を見上げる。

「おつと、余所見をするなど余裕ですね」

ユリシスがぶんっと棍棒を振り上げた。

「何のために、あなた方を追い出したと。

屋敷の回路は少々、手直しさせていただきました」

「チツ」

——やはりあの電磁波か

ひらりと交わしながらも、後退するしかできない自分な憤りがつの
る。

——シャナさえいなければ……

フランシスは考えた。

シャナはロボットだ。

最悪、代わりを作れないこともない。

確かに、今のシャナとは別物にはなる。
ロボットといつても、そこには蓄積した経験、環境が性格や能力に
微妙な差異を「与える」。

特にお嬢様の作った人工知能は従来のそれとは異なる複雑で多様な
成長とはを遂げるのだ。

意志をもち、時には主人の命令を拒否できるまでの人格を持つ——
もちろん、主人を裏切ることはできないが。

一方ヨリシスは、主人の命令に絶対従順、
自身の意志で行動することができないという一段階遅れた人工知能
だ。

シャナはあのような拙い喋り方をしているが、
潜在的な学習能力や成長速度はヨリシスと比べものにならない程高
いとも言える。

しかし、

お嬢様の代わりはいない。

我が社の損益を考えるなら、社長であるお嬢様に何か起らることが一番の避けるべき事態、
それは火を見るより明らかだ。

この会社はお嬢様の頭脳だけで此処まで拡大し、維持できているといつても過言ではない。

一執事としてもここには迷わず主人の保身を優先すべきだ。

多少の犠牲はやむを得ない

しかし――

フランシスは雪洞が口にこそ出さないが、自分を慕う屋敷の者をとても大切に思つていてることを知つていた。
彼等への愛情が、彼女の大きな動力であることも。

フランシスの思考回路が更に高速で回転する。

「——もしも『」でコリシスを倒すこと』を第一に、シャナを捨てたら何が起る。

お嬢様は間違いなく数日、いや数カ月、いや下手したら一年はショックによる心身の不調を来すだろう

それは会社の経営に計り知れない悪影響をもたらしかねない

それならコリシスがシャナに手をかける前に、シャナを救い出せば……

いやそれは無理だ、彼は俺の不審な動き一つで躊躇いなくシャナを壊すだろ？

いつそ一か八か一度お嬢様を呼ぶか……

フランシスは終わりの見えない思考を止めた。

「など、

愚問！――

防戦一方だったフランシスが突如地面を蹴りコリシスの懷に飛び込み両腕を掴み骨が折れるほどの強さで締め上げた。

「貴様も倒して、シャナも助ける！」

フランシスの怒鳴り声が響く。

「ぐつ……」

皿にも止まらぬ早さで武器」と腕を捻りあげられ、コリシスが呻き声をあげる。

「シャナ、起きろ――！」

コリシスの腕から解放され、落ちていくシャナに向かってフランシスが叫んだ。

しかし…

「馬鹿が」

掴んだ腕はいつのまにか武器を持ち直し
棍棒の先端がフランシスの手に当たる。
同時に強力な電流がフランシスの体に流れ込んだ。

「ぐあああああああ…！」

バチバチッという火花が体中に飛び散り、フランシスがドサッと倒れる

「ふ…貴方にはがっかりです。
こんな古典的な方法に易々と乗つてしまつとは。
少々冷や汗をかかされましたがそれも私の慢心ゆえ。
あなたを買い被り過ぎていたようで」

ユリシスは容赦なくフランシスの頭を蹴飛ばした。

フランシスは動かない。

「この調子だと、わざわざあの男の力を借りなくとも
そしてあんなよくわからないモノを使わなくても
雪洞・F・ケイマなんて瞬殺でしょう」

と、ゴリシスが高笑いしたときだつた

「それはどうかしらね」

ゴリシスは一瞬の悪寒の後瞬時に体を振り向かせ

飛び込んできた光景に息を飲んだ。

——しまつた！！

開かれた窓のそばで、

シャナを抱えた雪洞が

風に髪をなびかせ悠然と立っていた。

騎士の鎧を被つた大きな警備ロボットを3体両脇とその背後に引き連れ

雪洞は人形のようにじっとそこに立っていた。

コリシスを射竦める瞳からは、怒りも恐怖も感じられない。

——しまった人質を奪われたか

どくん、どくん、と心臓が脈うつのが聞こえる。

コリシスの頭に、緊急事態発生、の文字が浮かんだ。

——いや、しかし大丈夫だ

執事はしばらく動けまい、この少女だけなら他愛ない

次第にに静まる鼓動を確認しながら、コリシスは不適な笑みを取り戻した。

「ふつ……」ここで雪洞・F・ケイマ様の登場とは、願つてもないです。
ね。

元々、貴方に用があつたのですから。

フランシスさん、死なずに済んで、良かつたですね

足元に倒れるフランシスを爪先で小突く。

雪洞を挑発するように、コリシスはニヤリと笑った。

しかし雪洞は興味無むげにフランシスを一瞥するとい、彼女の腕で眠るシャナに向直つた。

「シャナ？ シャナ？」

「ふん、瀕死の執事には関心無しですか

随分肝が据わつてゐる、さすがはKAGARI社長といつたといふ……

再び速まる鼓動を感じながらも、コリシスは言葉を続けた。

「寝ているだけですよ。

少しばかり、深い深い眠りについて頂いております。

…「一つ目覚めるかは、あなた次第になりますが」

雪洞は何か考えるようにシャナを見つめると、

「そう」とだけ言つて

傍らの警備ロボットに「シャナを彼女のベッドに」と命じた。

ガシャン、

と仰々しく頷いて、小さな幼女を抱き抱えたロボットが部屋を出でいく。

「…治療法を教えてもらわなくて済んで自分で治せると

「私を誰だと思つて居るの？」

よつやく雪洞の表情に変化は起つた。

ひどく冷たい、微笑みになつた。

そしてコリシスの左腕を指差すと、農むよつた言つた。

「その手袋の下、擬似一ユーロンを破壊する磁気が入つていいわね。愛撫の「」とに神経回路に作用させて、段階的にシステムダウンさせた」

コリシスが目を見開く。

「だけどお生憎様、脳細胞の復元なんて私にとつちやお茶のこじっこさいよ。

技術も設備も私は常に最先端なの。
一晩もあれば簡単に治せるわ」

抑揚の無い、しかし力強い声で雪洞がコリシスを追い込んでいく。

「ふ…それは大変失礼を。さすがは雪洞・F・ケイマ様」

コリシスはぼとり、と手袋を落とした。

砂鉄が入っているかのような鈍い音が響く。

——惑わされるな、落ち着け

状況は明らかにこちらが有利なんだ

何体警備ロボットを連れて来ようが、フランシス以外は敵ではない

「しかしこちらの、フランシス様の方はいかがでしょう。

生物学で首席にもなられたことのあるアリエル様が開発なさった電磁気ですから、

暫くは痺れが残ると思われますよ。

しかしなんなら、それを内部から早急に打ち消す薬を…」

ユリシスの言葉を全て聞かずして、雪洞は倒れるフラン시스に声をかけた。

「だつてよフラン시스、どうする？」

わずかに痙攣する体のまま、フラン시스が顔をあげる。

「恐れながらお嬢様、貴方様は馬鹿です。

来るなと申し上げた筈ですよ。私は何のために居ると思いませんか？飛んで火にいる夏の虫とはまさに…

私の努力をなんだと、くつ…」

端整な顔立ちが痛みで歪む。

しかしフラン시스は力を振り絞つて弱々しく立ちあがつた。

そんなフラン시스を一瞥すると、雪洞はもう一体の警備ロボットに命じた。

「フラン시스を別室に」

「恐れながらお嬢様、私に逃げろと申すのですか？」

フラン시스が声をあげる。

「執事が主人を置いて逃げるなど、許されません！
私の存在意義を貴方は…」

そう言いかけた時だった。

フランシスが、雪洞の顔を見て、はつとした。

「……」

つかつかと雪洞が歩み寄る。

「今の状況ではどの道役立たずよ。
わざと連れて行きなさい」

「あ、お嬢様！？」

雪洞はフランシスを強く睨むと、思い切り腹を蹴飛ばした。

「うぐ！」

「さつきの仕返しよ」

雪洞が顎で合図をすると、
警備ロボットは倒れ込んだフランシスの肩を持ちあげ
ずるずると下へ運んで行った。

残されたコリシスは「くつと睡を飲んだ。

「雪洞・F・ケイマ、何を考えてる？」

開かれたままのドアからかすかな風が吹き込み、
ユリシスの赤い髪を撫でる。

それに促されるように

「邪魔者も去りましたところで、本題に入りましょう」とドアノブに手をかけた。

すると雪洞がすっと近づき

「お客様に悪いですわ」と一足早くドアを閉めた。

部屋はついに、2人と一体の警備ロボットのみを残した密閉空間となつた。

「さて、お話を伺いましょう」

雪洞がにこりと笑ってソファに座った。どうぞ、とユリシスをその向かいに座るよう促す。

ユリシスも懸命に表情を整えて答える。

「本日は我が主人、アリエル様の託を預かつて参りました」

「彼女はお元気?」

「ええ、お陰様で」

「最近は、学校にいたころと違つてお会いする機会が減つたからさみしく思つていたのよ。でもテレビで見かける機会は増えものだから、なんだか変化感じだわ。芸能活動も順調みたいね」

「はい」

「会社の経営と合わせて、一束の草鞋を履くなんて私には真似できないわ。相変わらずあの人は器用ね」

「ええ、アリエル様は実に多岐にわたる才能をお持ちでいらっしゃいますから」

「そうね。カメラの前に立ちながら、カメラを人の家につけるなんてなかなかできないわ」

雪洞がにっこりと笑う。

「今回は結構頑張つたじゃない。私も少し冷や汗かかれたわ。あの規模の火事を起こすなんて、どうやったの？」

ユリシスもつられて笑う。しかしどうしても、顔がひきつる。

「火事?なんのことでしょう、どこかでまた事件でも?」

「そりなの、ちょっと篝でね。ふふふ」

「篝で。それはまた、大変でございましたね。はははは」

人外の力を持つたロボットと、非力な人間の少女ではどちらが有利かなど火を見るより明らかだ。
それでも何故か、胸騒ぎが收まらない

それほどまでの、威圧感。

「面倒が起る前に、早く終わらせてしまおう

ゴリシスは表情を引き締めると、雪洞に向き直つて話し始めた。

「雪洞・F・ケイマ様。単刀直入に申し上げます。

アリエル・アンダーザシ からのご提案になります。
籌の所有権を、わが社にお譲り頂きたい」

ゴリシスはまっすぐに雪洞を見た。

弱冠一八歳の少女は、眉一つ動かさず悠々とこちらを眺めていた。

「それはまた、急ね」

「お譲り頂く、と言いましても、形だけのもの。
つまりお貸し頂くのは名義だけでござります。

ご存知の通り、わが社はこの一年で飛躍的な進歩を遂げて参りました。

市場の占有率、スポンサー獲得数は歴史上でも稀にみる速度で上昇していることは、世界経済アナリスト連盟からも公式に認められていますはすでに存じかかと思ひます。

ゆくゆくは、貴社に追随できる唯一の企業となるだろつと社員一同
自負しております」

「同感だわ」

「それもひとえに、我が社の総取締役であるアリエル・アンダーザ
シ－の類稀なる人望の高さ、経営者としての才能ゆえでござります。
現在わが社で働く人数は、全世界で約30万人。
ここまで広い拠点、人材を各国に持つ企業もなかなかおりませんで
しょう」

「まあ、もうそんなに大きくなつたの」

「一方、貴社KAGARIの雇用者数は、どのくらいになります
でしょうか」

「実質正式な社員とは、私とフラン시스だけよ。
強いていえばこの屋敷の者たちも含むかしら」

「そこでござります。

これほどまで多大な影響を世界に及ぼしていらっしゃる企業を、そ
れだけの人数で
むしろ雪洞・F・ケイマ様お一人の力で統括していらっしゃるのは
驚愕以外の何物でもございません。

しかし、果たしてそれはいつまで存続可能なものでしょうか。

この度の訴訟問題、篭での不祥事、更には今後いつコントロール不
可能な事態が起こるやも分かりません。

篭の利用者が増えるに連れ、そのシステムも同時に発展していくも

のと思われますが

それは同時に、潜在する危険性を高めるところとでもいえます。

つまり、今後の貴社の更なる発展を望むものであれば、これまでのようなワンマン経営はもはや限界では無いか、と

アリエル様は心配していらっしゃるのです

「そうね。そろそろ一人でやるもの大変になつてきたと思つていたところよ」

雪洞は足を組み直して言つた。

ユリシスは身を乗り出して言葉を続ける。

「そこで、ここから、アリエル様の提案で『ござ』います。

繰り返しになりますが、お譲り頂くのはあくまで名義だけで『ござ』います。

実質は協同経営という形で参加して頂きます。

経営や雑多な実務は全てアリエルカンパニーの方でバックアップ致しますので、

雪洞様のような余計なものに惑わされることなく、これまで以上の時間と労力を持つて籌の発展に従事なさることができるの『ござ』います」

「つまり、わが社のスポンサーになつて下さると?」

「資金の提供に加え、人材も。

更にはフィジカル面のならず、開発におけるソフト面での協力もさせて頂きます。

「

雪洞がくすりと笑つて椅子に肘をかけた。

「そういうお話は、お断りしております。
篝は私の力だけで動かしていくわ」

「雪洞様が、他人との共同作業をお好みでないのはアリエル様もご存知でいらっしゃいます。

しかし、今後もずっと雪洞・F・ケイマ様お一人で経営を続けていくことが不可能なのは明らか。

そうなりましたときに、この世界で唯一その協力者となることができるのは

古くからの友人であり、雪洞・F・ケイマ様に劣らぬ知能を持つアリエル・アンダーザシーだけでございましょう

「そうね。可能性だけで言えば、彼女が唯一の候補者になるかしら。0%か1%かの違いだけだけれど」

「代わりにこちらが求めてているのはその名義だけ。

それも、アリエルカンパニーという名前と、更に各プロモーションにアリエル様を起用して頂くことだけが、こちらの条件でございます。

着々とその人気を上昇させておりますアリエル様が全面に出て宣伝を行うことは、

更に貴社にとっても多大な利益となることと思われます」

「彼女の人気は今、飛ぶ鳥を落とす勢いですものね」

「篝の開発から一年、起業から一年たった今こそがまさに、岐路でござります。」

「……一つ、」考廬頂けませんでしょつか。

決して悪い話ではないと思われます。世紀の天才少女一人が手と手を結ばない、これを世界の財産の無駄遣いと言わずしてなんでもありますか

カタカタカタン、と風に揺られた窓が鳴った。

二人は不気味な笑みを浮かべたまま、何も言わず見つめ合っていた。

雪洞は眉を少しあげ、再び足を組み直した。

「お断りしますわ

そして、そもそも可笑しそうに声をあげて笑う。

「……ままでして、何を言ひだすかと思えば、協働経営ですか？」
笑つちやうわね

「……やはり考えては頂けませぬか

「……みんなさいね。アリホールにいつづけて

『おとといこりつしゃい』って

やつですか、ヒラヒトココシスは皿を締めた。

「やつこうだね」と思つておつました

やつしてやつへつて立ち上がる。

「まあ、やつお帰つ?」

「まあか。実はもう一つ、お聞き頂きたことがあります」

残るは雪洞と、

私よりはるかに弱い一体の警備ロボットだけ

十分だ

いける

「残念です、雪洞・F・ケイマ」

ココシスはやつぱりと、耳に両手を当じた。

そしてやつへつて、何かを口にくる - - -

「貴方を、別の世界にお連れします - - -」

そのときだつた。

--- · --- · --- · --- · --- · ---

雪洞が大きく目を見開く。

そして彼女の体から、けたたましい警戒音が鳴った。

はつとしてヨリシスが顔をあげると

パカッ」という音と共に、雪洞の右手が地に落ちた。

ユリシスは目を見開く。

そして人形の様にぱかつと開かれた口からは小さなスピーカーが覗くの見えた。

「残念だつたわね、ユリシス」

から ぱつと振り返ると、ドアもとに立っていたあの大きな警備ロボット

聞き覚えのある声がした。

そしておもむろに、頭の鎧を自ら外した。

中から現れたのは、

踊るように解き放していく、桜色の、長い髪

しまつた！――

ユリシスが思わず声をあげて後ずさった。
全身を凍てつくような悪寒がよぎる。

そしてもう一度、体が崩れかけた雪洞を見た。

「これは、偽物！

そうか、本体の雪洞・F・ケイマは警備ロボットの中から
この偽物を操り……

「正解

鎧をまとったままの雪洞は、にやりと笑つて腕をあげた。

その手には、銀色の回転レボルバーが握られている。

やられた…！

予想外の展開に混乱したユリシスの思考回路は
正しい次の行動を算出すべく高速で情報を処理していく。

それが一瞬の遅れを生じさせた。

直観を持たないロボットの、

致命的な欠陥。

「残念だつたわね。遅いわ」

雪洞はその銃から

強力な神経麻酔針を数十本発射させた。

ドスドスドスッ！！

と、鈍い音が響く。

逃げ遅れた体に大きな針を突き刺さるのを感じたまま

ユリシスは目の前が真っ暗になった。

雪洞は足元に横たわるココシスを見下ろすと、ふうっと息をついた。

腕のボタンを押すと、ふしゅっと音と共に鎧が開く。すっかり汗だくなつた体が冷やされしていく。

わすがはアリエル、冷や汗かかせやがつて…

「わいと、あんたにはまだ聞きたいことがあるの」

巨大な像でも一発で仕留められる量の麻酔薬を数本も撃ちこんだのだとしばらくは動けないだつて、と

雪洞はポケットから電話機を取り出す。

「その前に、御迎えを頼まないとね…」

また返り討ちにあつたと聞いたら、アリエルはどんな顔をするだろうか。

またあの整つた顔立ちを醜くもゆがめるのだろうか

「今度ばかりは逃がさないわ」

と、アリエル邸に繋いだとした時だった。

「お待ちください」

顔をあげると、ドアにもたれかかってフランシスがこちらを見ていた。

「フランシス…」

雪洞は口を大きく開けた。

「何故、医務室から出させないよ。警備ロボットに命じていたはずよ…」

「ふ、あんな低レベルのロボットが私を阻むなどできません。」

まあ、あいつは後で焼却炉にぶつこんでやりますがね」

フランシスは笑った。

「その体でどうやって…
いくら知能が低いタイプでも、腕力だけならあなたにそこまでやらないはずよ」

と言いかけて、雪洞は口をつぐんだ。

彼の首には、くつきりと円形の小さな跡があるのが見えた。
それは、何かを刺した印。

ああ、と雪洞は瞬時に理解した。

恐らく、ドーピング剤を打ったのだ。

「フラン시스…あなた、またあの薬を使ったの」

フラン시스は、え？ という顔で雪洞を見た。

その薬は、人間で言うところのノルアドレナリンにあたる神経伝達物質の分泌を促し

通常の数倍の速度で電気信号を体中に巡回せん。

すなわち、危険が迫ったという警報を無理やり発動させ一時的に爆発的なパワーを引き出すのだ。

もちろんリスクも伴づ。

効果が切れれば、細胞はかかった負荷の分だけ破壊が進むことになる。

「私の許可無く使うことは許していいなかつたはずよ

「何をおっしゃるんですか」

フランシスは笑いながら雪洞に近づいた。

「こんなときに使わなくていいあるんです。

しかし、驚きましたよ。

最初は、本当に生身のあなたが来たのかと焦ってしまいました。

あの偽物は、本物のあなたより 5・6 cmほど背が高く声も高くそして幾分目も大きく鼻も高くと、美化されていましたからね。

おかげで気が付きました、あれはお嬢様の姿のみをかたどった操作型ロボットであり

本当の貴女は鎧の中からあれを操つていたと。

ご丁寧に大型の警備ロボットに摸して、中から音が漏れるのを防止してね。

だからこそ、私もわざわざ殴られるふりをしたのですから」

と、フランシスが口元の血を拭いながらわずかに痙攣の残る手で雪洞の頬を伝う汗を拭おうと手を伸ばした。しかし、

「そんなこと頼んでないわ！」

雪洞はフランシスの手を思い切りはねのけた。

フランシスが、思わず顔をゆがめる。

「お嬢様…」

「主人の命令は絶対でしょ！」

「どうしてそんな勝手」とするのー。」

言葉とは裏腹に、声がくぐもる。

まづい、泣きそうだ。

雪洞はそれを隠すように、俯いて自分の足を睨みつけた。

これ以上あなたを

傷つけたくないのに

黙りこんでしまった雪洞の前で、フランシスは困惑する。

言いたいことは山ほどあった。

しかし、

ロボットである彼の存在意義は、主人の意思の通りに
主人の望むままに従うこと。

そこを突かれてしまえば、なすすべは無い。

フランシスは叱られた犬のように頑垂れると、目を逸らして言った。

「申し訳ありません…」

嫌な沈黙が、二人の間に流れる。

先ほどまで窓を鳴らしていた風も
部屋の険悪な雰囲気を察してか、いつの間にかどこかへ行ってしまった。

「お嬢様…？」

雪洞は下を向いたままである。

フランシスはおそるおそる、雪洞の髪に手を触れようと手を伸ばした。

その時だった。

ガタガタガタガタガタッ！－！－！

何かがけたたましく、

固いものと固いものが、ぶつかりあつよつた音が響いた。

一気に静寂が破られ、
部屋の空気が暗転する。

ぱっと振り返ると、それが先ほど床に落とした電話機の震動音と気付いた。

自動的に、通話が開始されると機械で再現された無機質な人間の声が響いた。

「 セバスチャン。

セバスチャン、何をなさっていますの？

そこに居るんでしょう？

あなたの信号が途絶えたから心配してかけてみたのですが

…まさか失敗しては、いらっしゃいませんよね？」

ガツン、と殴られたような衝撃で
血の氣が一気に引いていく。

…アリエル！

酷く冷たい声で喚く電話の向こうの側で、すっかり忘れ去られたコリシスが倒れているのが見える。

しまった、こんなことしてゐる場合ぢや……！

雪洞が慌てて駆け寄り
更に言葉をつづけようとする電話機に
手を伸ばした時だった。

雪洞が触れるより早く、それが叩き壊された。

「大丈夫です。アリエル様に被害が及びますので、これで…」

拳の主はユリシスであった。

「なつ…」

雪洞の予測をはるかに超えた、驚異的なスピードでユリシスは田を見ました。

驚くと同時にフランシスに抱き寄せられる。

「やはり、アリエル様の仰せの通りにしていて良かった」

ユリシスは立ち上がりて言った。

「貴女の行動ぐらいアリエル様はお見通しですよ。

対睡眠薬のワクチンを、ここに来る前にアリエル様が施してくださいましたのです

ユリシスは口角を思い切りあげて笑った。

しかし、このワクチンを打っていても寝てしまつとは。

それにも関わらず、一時にしろ意識を失つてしまつたという事実。

それがアリエルと雪洞の埋まらない頭脳の差を物語つてゐると言付く前に

彼は考へることをやめた。

「ああ、参りましょひ」

ゴロシスは手を拡げた。

「お嬢様、下がつて！」

フランシスが身構える。

「あいつ、何かをする氣です」

全身で威嚇するフランシスを一瞥すると、

ゴロシスはどこから出しているのか体の芯が震えるような低い声で
言った。

赤い髪が逆立ち、目の中も変わっていく。

「雪洞・F・ケイマ。」

貴女は精神を遊離させた。

しかしそれは同時に軸丘であり単なるハーモニ

アリエル様は手に入れたんだ。

偽物でもなく、
肉体も一緒に、
時間すら越えて

お前と篭を超える方法をなああ！！

ビイイイイイイイイイイイイツ！――――――――――

ずしんっ！！と巨大な鉛が乗つかつたような重圧がかかる。

一瞬ながら起きたのか分からなかつた。

建物全体が震えている。

そうか、これは「音」

すなわち空気の振動。

それももの凄い高周波だ。

こんなものを聞いたら人間の脳などひとたまりも…

はっと気付くより早くフランシスは反射的に雪洞を振り返った。

「痛い…頭が…」

雪洞は耳を必死に抑えていた。

何かが頭に入つてくる。

酷く痛い、勝手に脳内をかき乱される。

何故だらう、すごく痛くて悲しい。

だめだ、耐えられた無い、

助けて！！！

そう叫びました時だった。

ブツッ！！！

爆音と共に全身を焼かれたような痛みが走った。

息を止めて、叫ぶ。

しかし、

自分の声が聞こえない。

突如投げ込まれた静寂の中、雪洞は痛みに耐えきれず倒れ込んだ。

ドサッと雪洞を抱きとめると、フランシスはコリシスを睨んだ。

咄嗟の判断だった。

脳内に影響が出る前に、フランシスが雪洞の鼓膜を破つたのだ。

さすがに荒療治すぎる、

そつ脱えの暇は無かつた。

「SHDKR9000JHOJEPJ138405DA1098...」

その音は、何かの「コード」であると気付いた。
それも、ものすごい速さで。

一秒当たり、約2000。

籌の精神輸送の方法は、脳内を一時肉体と切り離した状態で動かす
ために
電気信号を送り続けること。

「こつも真似」としていつじてこるのか？

「ぐあっ」

ついに悲鳴をあげたフランシスの脳が、全身の力を彼から奪つた。

雪洞を抱いたまま、背後に倒れていく。

とにかくまづい、この部屋から出なければ—！

最後の力を振り絞つてドアに手をかけた。

その時だった。

ガシャン！—！

廊下から、何かが割れる音がした。

開かれたドアの前で、顔面蒼白のシャーロットが立ち尽くしていた。

「シャーロット……」

馬鹿かお前は、ここで何をしていろ……！

そして彼女の足元を見てフランシスは
一瞬神経回路が痛みを感じしなくなるほど
視覚に集約された。

紅茶の海に浮かぶ真っ白なカップな破片の隣で

彼女の足は消えかかっていた。

「シャーロット……！」

フラン시스は叫ぶ。

しかし、時すでに遅し。

シャーロットは口元を手で押さえたまま
蠍人形のように動かない。

大きく開かれた鮮やかな青い瞳も
すでに焦点を失つたまま固まっている。

そしてシャーロットの身体は、砂が崩れ落ちるかの如くサラサラ
と細かな粒子へ変わり

重力に逆らつて拡散していく。

膝から

胸へ

そして顔へと

音の無い世界で何かを叫ぶフランシスを見ながら
雪洞はその光景を呆然と眺めていた。

全てがゆっくつと、何処か他の世界で起つてこむよつて見える。

田の前で起つてゐることが受け入れられなかつた。

見たくない、

しかし、目が離せない。

やがて何かが爆発したよつて
部屋全体を光が覆つ。

思わず田閉じた雪洞が次に田を開けたとき

シャーロットはそこに居なかつた。

「チツ……」

ゴリシスは喉元を抑えると、耳に当っていた震動遮断物を外した。

ビームでも運の良い…

「シャーロット…ねえ…」

雪洞はふりふりと、シャーロットが立っていた箒の床をさする。

しかしそこにあるのは、彼女が持ってきたカップの破片だけである。

「…やあああ…」

雪洞はその場に泣き崩れた。

「すみません、リティア様…。」

思わぬ邪魔が入り輸送に失敗しましたが、かくなる上は…はい

コリシスは胸元の無線機に手を添え何かを話している。

彼自身にも大きな負担がかかっているのだろう。

立っているのがやっとという様子で息を吐いていた。

フランシスも膝に手をついて立ち上ると、コリシスを睨みつけた。

「貴様、シャーロットを何をした」

「…」

「言わぬか…。」

質問を変えよう、彼女を何処へ送ったーー?」

「貴方としては満足でしょう。」

私は雪洞・F・ケイマを狙ったのですよ

コリシスは傷のついた頬を触り、真っ白な手袋についた血を見ると無気味に微笑んだ。

「あのコードはなんだ。

彼女を篝に送ったのか！？

「少し違いますね。

あれには篝のようで、篝ではないのです

「どうこつ意味だ

ココリシスはフランシスに近づくと

「文字の通りですよ

と囁いて、その横を通りすぎた。

「待てココリシス！」

ドアに手をかけたココリシスは、足元の雪洞を一瞥する。

「まあ……良いでしょ。」

「……」まるで手に取り難い貴重な宝物です。

受け取りなさい」

そう言ってコリシスは、何かをフランシスに投げた。

受け取つてみると、それは小さな黒い破片である。

「あいつ面白くものが見られますよ。

……本番はこれからです」

そう言い残し、コリシスは部屋を去つた。

後を追おうと踏み出した足が崩れ、
フランシスはその場に倒れこむ。

コリシスが指を鳴らすと同時に、ようやく何かから解放されたのか

屋敷中のアラームがけたましく鳴り始める。

「くそつー。」

フランシスが床に拳を呑きつけていたのが見える。

色を失いしんとした世界の中

雪洞はただ、涙が床に染み込んでいくのを眺めていた。

3 - 15 (後書き)

コロシス『本番はこれからです』

シキミ『やつとかよー』
キワミ『おせえよー』

(切実)

「医療ロボット…早く…！」

「！」の怒鳴り声と走り回るメイドロボット達の足音
そしてシャナの泣声が屋敷中に響き渡っている。

「お、お嬢、お氣を確かに」

恵永に抱えられ雪洞が、医療室へと運ばれて行つた。

両腕に器具を取り付けたロボットが出迎え、
患者が医療用カプセルに収納されると同時に
医務室のドアが閉められた。

騒然とした空氣の中、フランシスは一人動かぬ体を引きずりながら
コンピューター室へと向かっていた。

コンピューターと言つても、超高度科学時代である23世紀では視
覚化され3次元に浮遊するデータそのものを示す。

ケイマ家のコンピューターを統御する人工知能は雪洞の思考回路を

基にしているため、

扱えるのは雪洞本人の他にフランシスだけであった。

フランシスが右手でセンサーに触ると、中央の大画面に籌のマークが現れる。

「コソニーチワ。 篲オーナーシステムキドウシマスカ」

「しなくていい。 今日はこれを解析してほしい。」

フランシスはガラスの破片のような黒いチップを端末に挿入した。

「オマチクダサイ。

デングンをキラナイデクダサイ。

カイメイシュウウリョウマテ8分57秒…」

ふうっと息をつき、フランシスは椅子に座った。

「これからどうするか。

ここまでの緊急事態は初めてだ。

いざれにせよ、このチップでアリエルが何を伝えようとしているのか

それが問題だ

「相変わらず無茶をするな、お前は。」

突然の声に驚いて振り向くと白衣の男が入口に立っていた。

フランシスはほっと息をつく。

「トムキンス様。

「いらっしゃつてついたのですか

「いらっしゃつたじやないだろつ。

社長の鼓膜を破つた張本人が

トムキンス（Tomkinson）と呼ばれた男は世界医療工学会の

副理事長

即ち医者であつた。

体の弱かつた雪洞を小さいころから診てきた。

医者に似つかない粗暴な外見と裏腹に温かな内面を持ち合わせ、

雪洞が心を寄せる貴重な存在の一人でもあった。

フランシスもこの男と居る時はセキュリティセンサーを緩めること
ができた。

カフェイン中毒者の彼はいつものように

コーヒーの入ったマグカップを持って部屋に入った。

「聴覚器官の振動を利用して、脳細胞に働きかける周波数でしたため
危険性が未知数でした。」

命を優先した結果です。

お嬢様の容体はどうです?」

「なに、現代の技術を持つてすれば聴覚はすぐ回復するだろう。」

開けられた穴も必要最小かつ綺麗だったからな。芸術的なほど。

おかげで縫合しやすかったぜ」

「問題は精神的ショックの方ですね」

「いや問題はお前の方だ。」

大丈夫なのか、体は「

「ええ。

少し胸部と頭部の神経中枢をやられましたが」

「俺が診てやるうか?」

トムキンスはフランシスの隣に腰かけると、
飲むか?とコーヒーを差し出した。

「せつかくですが。

私をメンテナンスできるのはお嬢様だけですので、

彼女が回復しないことには

「大変だな、ロボットも」

「これは?」

せわしなく大画面に表示される暗号を見て
トムキンスが尋ねた。

「アリエル様から頂きましたもので、現在解読中です」

「はあ～、天才共のやる」とはこちこち手がこんでるね。

手紙を読むのにも一苦労だ。果たし状か？」

「ラブレターの類では無いかと思いますので、どうかと聞えま」

「『最近の騒ぎにはやはりアリエル嬢が絡んでいるのか？』

籌の人体影響については理事会でも度々問題になっていたから気になっていたんだが、

ついに発生したそうじゃないか

無精ひげをさすりながらトムキンスはため息をついた。

「女の嫉妬は怖いねえ。

学生時代の成績争いに始まり、研究結果の権利争い。

アリエル嬢はいつも社長のライバルだったからな。

それが籌の開発で先越されてからといつもの、

あの手この手で社長の邪魔をしてきやがる。

世間ではあの美貌と話術でアイドル並みにもてはやされてるりこ

が、

俺はいつもいけ好かんね、あの女は。」

「それでもこれまで、彼らからここまで実質的な被害を被つたことはありませんでした。

私どもの方がいつも上手だつたからです」

フランシスはのど元の蝶ネクタイを外して息をついた。

「今回も、私の予想内で全てことは進んでいた筈でした。

それが、まさかいきなりこいつも直接仕掛けてくるとは。

それもお嬢様を狙つての物理的攻撃など。

あまりにも無謀で危険な懸けです。

見合の利益も不確定です。

さすがにシユミリーション外でした…とにかく私のミスです

フランシスは口をつぐみ画面を見つめた。

「安心したぜ。

お前からハイスなんて言葉が出てくるなんてよ。

完璧すぎるも逆に不完全だぜ。

人間、どこかしら欠点があるから前に進めるんだ。

じゃなあやせらへん面白みがねえつてもんよ

トムキンスはフランシスの右手の傷を眺めながら言った。

「私はロボットです」

「…いや、まあそうなんだが。要はだな…」

フランシスはふっと笑うとトムキンスを見た。

「ありがとうございます。

なんだか胸部の辺りが軽くなりました。

これもメンテナンスの一 種でしょつか

トムキンスもにやりと笑った。

「やうやく。医者をなめるだじゃなこよ

まだまだ成長途中つーことや。『前も社長も

「カイサキカンリョウシマシタ。」

二人ははつとして画面を振り返る。

少し和らいだはずの空気が一瞬にして張りつめられる。

それに伴い、部屋中に離散していた小画面が消え、中央画面に半透明な立体物が浮かび上がったかと思うと
設計図や数列を映した画像が部屋中に展開していく。

「これは…」

「なんだいこれは？」

「どつかの地図か？」

眉をつりあげるトムキンスの隣で

部屋中を埋め尽くす奇妙な図形達を見渡しながら
フランシスが呟く。

「 篪だ」

「あ？ なんだと？ どうことだと？？」

「いや、全てが反転している、どうことだ、これは箆ではない？」

「

瞳の視覚情報を取り込んで、フランシスの情報解析モードが作動する。

トムキンスは残ったコーヒーを飲み干して、動かなくなつたフランシスと拡大を続けるコンピューターをただ見つめる。

「新着メッセージ、一件、デス」

突如、無機質な声が部屋に響いた。

「ウイルス検出、ナシ。

ジドウテキニヒラキマス」

一瞬辺りが暗くなると、画面に女の顔が現れた。

アリエルだ。

アリエルはふわふわに巻かれたショートカットを少しゆらして画面の向こうから一人に微笑みかけた。

「ハセゲンよ。」

時間が無かつたので、2次元で失礼しますわ。

今頃は差し上げたプレゼントを開けてくださいなから。」

メディアに向けるいつもほほ笑みより少し釣りあがった目を細め、
言葉を続ける。

「気についてただけました? も

う賢い貴方がたならおわかりかしら。

そう、これは【箸】であつて【箸】では無い世界。

水面に映つた篝火の影の「」とく、

篝の形、
揺らぎ、

性質

全てを移しどつたもの。

名前はまだありません。

何かいい案があつましたらつけしてください

ほーつほつほつー。」

華奢な白い手を口に当て、大層愉快と言つた声で高らかに笑う。

トムキンスが思わず落としたマグカップの割れる音が

アリエルの笑い声の中で小さく響いた。

「相変わらず癪に障る方ね……」

背後からかすれた声がして振り返ると、雪洞が壁に寄りかかってこちらを見ていた。

「雪洞様！ベッドに戻らなこと…」

慌てて追いかけてきた二口令が息を切らせて雪洞に声をかける。

「雪洞ちやご…！」

糸を回るこまだ早い。

悪こことは言わないから、寝てなさい

「D・Tムキンス、それは無理です。

田を開じるとまだ、シャーロットが…

雪洞は俯くと頬に影を落とす。

「…やうか…。

下がってくれ

トムキンスは「『』に手で合図する。

「だけど…」

「私がついてくる。

大丈夫だ

「…わかりました」

「『』が去ると同時に
フランシスが雪洞に駆け寄つて体を支えた。

「お嬢様、聴覚が戻られたのですね」

「当たり前でしょ、ドクター・トムキンスは世界一の名医なんだから。

まだ少し聞こえは悪いのだけれどね」

雪洞は顔をあげると力無く笑う。

「世界一は言こ過ぎだ。

完治には少し時間がかかるからな、安静にしておきなさい」

諭すトムキンスを無視して、雪洞が画面に近寄つた。

「…」これは？

フランシスとトムキンスは顔を見合わせる。

「ユリシスが残したチップに入っていたものです。

籌の設計図に非常によく似ていますが…」

お嬢様、何かご存知で？

と言いかけて、フランシスは口をつぐんだ。

雪洞の目は、大きく開かれその瞳が震えるように揺れていた。

何か恐ろしいものを見たかのように、口元を抑えてる手の隙間からひゅうひゅうと乱れた呼吸が漏れる。

暗い部屋に浮かぶ人工的な緑光に照らされていても分かる、

真っ青な顔色。

「おい、どうした？

大丈夫か？」

トムキンスが慌てて駆け寄り、首と手首に指をあてる。

「お嬢様！？」

「これは…かげろうつ陽炎…」

雪洞は、かすれた声で呟いた。

「えつ…？」

「…どうで手に入れた！？」

今まで見たどのときよりも恐ろしい剣幕で、

雪洞はフランシスに詰め寄った。

突如襟を摑まれたフランシスが、苦しそうに声をあげる。

「ユリシスがよこしたチップに入っていたのです！…」

「ユリシスが！？」

「嘘つかないで…」

「嘘を言つていいのですか…」

抵抗もできず締め上げられるままのフランシスがぐつと声を詰ませる。

「落ち着け雪洞ちゃん！」

あまり興奮すると、傷口がまた開く！』

トムキンスに背後から押されながらも、顔面蒼白な雪洞は視線を画面から離さない。

怒りなのか恐怖なのか、火照った体からはかすかな震えが伝わってくる。

「…大丈夫だから。

落ち着きなさい」

いつも精神病棟の患者にそうするように、トムキンスはなるべく静かな声でゆっくりと雪洞を宥める。

「彼は嘘なんてついてないよ」

「 セリ…なの？」

顔が今度は、思い切り歪む。

何かに、絶望したように

フランシスは乱れた襟元を直しながら、こほんと咳をして言った。
彼の神経回路も著しく乱れているのが、自分でもわかる。

「私の推測ですが、恐らくこれは、アリエル様御自身が開発された
籌の偽物。

そして、シャーロットが送られた場所かと…」

「シャーロットが？」

雪洞が初めてしつかりとフランシスを見た。

「はい。多大なリスクを迫りながらのお嬢様への直接攻撃、『別の世界に連れていく』というコリシスの言動から、彼らが何らかの手段でお嬢様をどこかへ輸送しようとしたことは確かです。

肉体の輸送とは既成理論を越えていますが、消滅したというよりは何処かへ移動したと行つた方がまだ領けることを考慮すれば、その行き先は籠のような異次元空間と仮定することも十分可能。

そして本来の狙いが失敗したとなれば、再びお嬢様をこの別世界に送ろうと次の手段を当然打たなければならない。

となれば、いつそ手の打ちを見せ…つまり、シャーロットの居場所を明らかにし
お嬢様をおびき寄せる餌にした方が合理的との判断故の行動でしょう。

以上のことから、これはシャーロットが居ると思われる場所の説明書かと思われます」

頭の中にある情報を一気に吐き出すと、フランシスは大きくため息をついた。

彼の視線の先にある雪洞の瞳が閉じられているのは執事の言葉を聞いて故なのか

彼女の思考がその遙か先を行っているからなのか。

「…ほんとね、

正解よフランシス

雪洞はゆっくつと目を開いて、フランシスを見つめた。

そして椅子に座って足を組むと

重々しい口調でついに話し始めた。

「篝は失敗作なの。

元々私は、身体ごと他空間に輸送するシステムを創ろうとしていたの。

篝は、その研究の過程で出来たもの。

脳内エネルギーの発見を受けて始めた研究だけれど

私にとっては、陽炎開発のための1ステップに過ぎなかつた

雪洞は天井を見あげ、フツと笑つた。

「 」 んなものを創りたかったんじゃない… そう思つた。

それでも、かすかであつても私の道を照らしてくれるものにいつやく出合えたの。

だから、篝火。

【 篝 KAGARI 】 ところは、そんな情けない意味なのよ

フランシスの頭を殴られたような衝撃が襲つた。

・なんだそれは。

聞いていいぞ。

【 篝 】 の意味とは、昔人々が追つた夢への道筋を再び照らす灯のことでは無かつたのか。

そしてなんだつて、肉体の輸送…？

これまでと話が違ひすぎる。

篝の最大のメリットとは、肉体の放棄そのものだ。

精神だけの世界ゆえに、自由度も異なれば現実のものでなくとも、

可能性が生じるのだ。

それが肉体も伴った異次元輸送となれば
それは現実世界となんら変わらないじゃないか。

お嬢様のなさりたかったこととは

一体何なんだ。

錯綜する情報の渦に半ば意識を失いかけながら
フランシスはトムキンスの顔を見た。

トムキンスは眉を潜め、重く真つすぐな眼差しで雪洞の横顔を見て
いる。

「篝が出来てから何年も、陽炎の発明のために色々なことをしたわ。

言いたくないことも、あなたは聞かない方がいいことも。

それでも結局、完成はしなかったの。完璧なものは、ね

「お待ちください」

フランシスは額に手を当て、頭から懸命に考えを絞り取るように言
つた。

「輸送先は」の世界のどこですか、それとも篝の様な異次元ですか。

肉体の輸送とは、分子レベルまで分解し超光速で移動させるということですか。

万が一それが可能となつたとしても、形質をもたないエネルギーと異なり分子同士の衝突はどうなさるのですか。

精神が行けば肉体も、というのは短絡的すぎませんか。それは話がまた異なるでしょ？

お嬢様ほどの人が、それが分からぬのですか。

・違つ、そんなことじやない俺が聞きたいのは。

フランシスは、顔をあげて雪洞を見た。

「陽炎とやらを作るメリットとはなんですか」

雪洞はフランシスと田線を合わせなかつた。

そして淡々と、言葉を続ける。

質問には答えなかつた。

「一度だけ、それが成功したことがあつたの。

無我夢中で…いくつもの相互作用が起つて偶然起つた物質の輸送よ。

その時のコードが、「これ」

そういうて空間に浮かぶ無機質な図形達を指差した。

「不規則な上昇気流によつて生じる陽炎のよつて

刹那的に立ち上つた世界。

私はこの不安定なモノを【陽炎 - KAGERO -】と名付けた

「…つまり、一応物質の輸送理論は確立されたといつことですね」

雪洞は少女は首を横に振つた。

「成功と言える代物では無かつたわ。

確かに物質の輸送には成功した跡が残っていたのだけど…
それがどこへ行つたのか、分からなくなつてしまつたの」

雪洞は今にも泣きだしそうな顔で唇をかみしめた。

心なしか潤んでいる瞳には、何が映し出されているのか
フランシスには分からなかつた。

「輸送先が分からぬなど…

もう一度、同じ手順を踏まれても駄目だつたというのですか?

科学的に確立され得る手法なら、それでもなんらかの手がかりが…
ましてやお嬢様ほどの方が一度掴みかけたものを失つなど…」

雪洞は黙つて首を振つた。

そこには大切な何かを無くしてすっかり頑垂れた子供のよつな
少女の姿があつた。

昨夜見た怖い夢を思い出して
泣きべそをかいている子供のようでもあった。

驚くでも訝しむでもなく、
フランシスよりよっぽど冷静に話を聞いていたトムキンスが
そつと雪洞の肩に手を置く。

そして雪洞の悲痛な想いを写し取るようにな
少しばかり顔を歪ませた。

「…少し休んだ方が良い」

雪洞はすがるよつてトムキンスを見あげる。

そんな彼女の横顔を振り向かせるかのよつて
フランシスは言った。

「お嬢様、あなたは…

あなたは陽炎に、一体何を送ったのですか？」

びつしてそんな言葉が口から出たのか咄嗟に分からなかつた。

しかしその時、雪洞は何かに刺されたように体を強張らせた。

ぐるっと世界を縦断するよつて田が泳ぐ。

しかしそれと同時に

ピシッ！！

突如、フランシスの頭を激痛が襲った。
全身が痺れるほど痛みだつた。

そして絵具を混ぜたパレットのような画像が
渦を巻いて目前で旋回していく。

頭の中に突如現れた濁流が咆哮し
幻覚なのか幻聴なのか、視覚も聽覚もあらゆるもののが
回り始めた。

なんだこれは…

痛い！！！

「ぐ…あ…」

フランシスは今にも弾けそうな頭を必死で抑えた。

何かが自分の中から溢れ出よつとしている。

出したら、死んでしまう！－

フランシスは訳も分からず、それを必死で抑えた。

歪んでいく視界の中でぼんやりと、雪洞が駆け寄つてくるのが見える。

「フランシス…－じうしたの…？」

慌ててフランシスの肩を掴み、瞳の色を確認する。

濃淡を繰り返している…

交感神経系がパニックになっているわ

雪洞は咄嗟にトムキンスを見た。

「ドクター－フランシスが－！」

そうよ、私を庇つてユリシスから攻撃を受けていたのに…

陽炎にすっかり気をとられて
あろうことか彼の体を気遣う余裕すら失っていた自分に
叫びだしたいほどの怒りがこみ上げる。

「今すぐ直しに行かないと…」

走りだそつとした雪洞の手を掴み、フランシスは唸るよつこ声をあげた。

「…大丈夫です。大したことは御座いません。

それよりお嬢様、現状の解析を…」

「嘘をつくな、中枢神経回路がやられているのだろう

フランシスに肩を貸しながら、トムキンスが反論する。

「やつぱつ…」

雪洞の顔から見る見る血の気が失せて行く。

「フランシス…」じんなことじてゐる暇は無いわ、治療します…」

「い、今からで御座いますか？」

「今しなくてこつするのよ…?」

「いや、しかし…」

フランシスはトムキンスを見た。

そんなことをしている余裕はありません、と田で訴える。

トムキンスはすぐ近くで喘ぐ青年の端正な顔立ちを苦虫を潰しながら見つめたあと

雪洞に田を向けた。

トムカリ取り乱して慌てている彼女自身も

顔色が十分芳しくない。

重心もぐらついている、心身の緊張から足に力が入っていないのが分かる。

医者が普通の人間の体を直すのさえ、全気力と体力がそぎ落とされる。

それがましてや、確かなセオリーも確立されていない超高性能ロボットの治療となると

雪洞にどれだけ心身の負担がかかるかは想像に難くない

しかし…

「… 雪洞ちゃん。

その身体ではろくなパフォーマンスができない。

少し落ち着いて、私の出す薬で体力を回復してからこなさー

「馬鹿を言わ無ないで。」

雪洞はトムキンスを睨むと、自分を落ち着かせるように呼吸置いて今度は正面からトムキンスを見据えた。

「ふくでなくとも、やつます」

「これはドクターストップだぞ」

「ドクター。

フランシスが力を発揮できない今、このケイマ邸は無防備な状態に等しいのです。

そんな時に何かあつたら、ケイマ邸は終わりです

「先程の攻撃から時間はたつておりません。

彼らが動くのはまだ先かと……」

「フランシス、本当に頭がいかれちゃったのね。

いつもの合理的かつ効率的に仕事が進むような補助プログラムはどうこに行つたの？」

雪洞が諭すような声で、フランシスの頬に手を添えた。触られた箇所から痛みが走る。

感覚神経が過敏になつていよいよつだ。

「うう……」

「雪洞ちやん。

私もフランシスも、君のことが心配なんだ」

「わかつてます。

でも、やりたいんです。

やらなきゃいけないんです

自分を見つめる雪洞の強い瞳を見て、トムキンスは目を細めた。

先ほどまでの絶望に打ちひしがれていた顔から
よつやく少し、生氣を取り戻したものになった。

強く、大きくなつたな。

あのか弱かつた少女が…。

「わかつたよ、許可しよ。」

ただし条件がある。施術には補助ロボットを同行させる」と。
万が一倒れたときに備えて、医療ロボットも施術室に数台配置させ
る。俺もすぐそばで待機する。

そして五時間以上の作業の継続は許さない」

「はいーー！」

また貴方は、人の助言を聞かずに無茶を…

そう言いかけた時、それまで張っていた緊張の糸が切れたかのよつこ
ずしんと重たい疲労が体に伸しかかった。

すぐに手配させます、ドクターフランシスをそのまま連れてきて…
と、雪洞の声が次第に遠ざかって行く。

トムキンスの腕が自分の体に回されるのを感じながら
フランシスはゆっくりと、意識を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2741x/>

TEN-ROBO.-天才少女とロボット執事-

2011年12月1日21時58分発行